

薩ミの間を二佛中間ミ申しまして、釋尊時代のものは釋尊に救はれ、彌勒菩薩時代のものは彌勒菩薩に救はれて有難いのであります。二佛中間の我れ、愚生のもは誰れに依つて助けて貰ふたらいのであらうか。是れが常々弘法大師の歎息して居られたところである。云ふ文章の意味なのであります。眞濟の此の文章の意味からでも解る。云ふことである。云ふ文章の意味なのであります。而して都率内院に在つて彌勒菩薩が此の次世に出でらるゝ時にお供して再び此世に來られる。云ふことでもあります。夫れから今日では弘法大師を全く彌勒菩薩としてお祀りして居るので、随つて私ミもの信仰も都率の内院に往生する。云ふことに成つて居ります。

こう云ふ譯であります。眞言宗の本筋の極樂往生ではない。都率の内院結構、彌陀の淨土結構でありまして、何れに定めねばならぬ。云ふ譯ではありません。併し先づ眞言宗に念佛門の思想が起つて來た由來から考へて見ましよう。時は源平時代でありまして、世は次第に亂れ、太平な皇朝の夢は破られました。だから此の様な嫌やな浮世は早く遁れて平和なる理想の國へ往きたい。云ふ厭世的な思想が俄かに旺んに成つて來ました。此の思潮に乗じて人々に大安心を與へん。云ふして現はれたものが法然親鸞な。云ふ聖者で他力念佛を鼓吹されました。だから、正に大河の流れの如く滔々。云ふしてその救ひの道に趣きました。其の當時既に日本國民の信仰の中心。云ふ成つて八葉の蓮花の峯は現世の極樂である。云ふして崇められてゐた高野山は自然渴仰の淨土。云ふ考へられたのであります。別して高野山は都

の厭はしき風も吹かず、九州や奥州のように道もかけ距れてはをらず、浮世を離れて念佛でも稱へて居るには實に都合の可い土地がらであります。高野へ高野へ。云ふ登つて來た人は澤山であります。中にも戀に破れた瀧口入道や、宇治川の先陣で名高い佐々木四郎高綱、平家の公達。云ふしては平維盛な。云ふ當時に名高い人々も澤山にあつたのであります。折から法然上人や親鸞上人も登山せられて新別處。云ふ少し離れた寺で専ら念佛を凝らされてゐました。此れより前平治の亂に藤原の頼信源義朝な。云ふ腕白者が清盛の留守を幸に謀反を起して一時成功した。云ふことがありました。其の時代に朝廷で最も羽振を利かせて居つた博識多才なる藤原通憲入道信西、この人は非常に勢力があつたのであります。すがかねて謀反人な。云ふに憎まれて居りました。ために大和の方へ遁れて隠れて居りました。云ふを捕へられて殺されました。其の信西の子に明遍。云ふ人がありまして、既に佛門に入つて奈良の方で學問をして居りましたが、父入道が殺された翌年永暦元年。云ふに高野山に上りまして、父の菩提を弔う。云ふのでもありません。か、一生山外不出で、兄さんから父の法事を營むから。云ふ案内があつた時にも下山せられな。云ふんだ。云ふことでもあります。明遍上人は高野山でさ、やかな草庵を結んで専ら念佛を修行せられたのであります。後ち高綱が高野山を去つて信州の方へ往つた時、其の草庵を譲られました。ので夫れに移り蓮花三昧院を創められました。今も其の名跡は覺束なく残つて居ります。折から法然上人が新別處の方に居られました。ので明遍上人は其の門に入つて愈々念佛門に勵まれたのであります。明遍上人は當時に於いても高德の名が高か、つたもので、或る朝見ます。云ふ

其の谷一面に蓮の花が咲いて居つた。それから其の谷を蓮華谷と呼ばれて居る程であります。而して一般に念佛が旺んに成つて高野山内に入る處に鉦の音が響いて居たほぎでありまして明遍上人にもお弟子が澤山に出来たのであります。傳説に依ります。明遍上人は念佛門を法然上人から受けましたが、法然上人は又た明遍上人から秘密念佛を申しまして真言宗の念佛の法を授かつたので、お互ひに師匠たり弟子たりといふ關係に居たといふのであります。夫れから念佛門の本家争ひといふことにも成るのであります。本家は何れにしましても真言宗に念佛門が又た榮えて来て安心信仰の問題が痛切に感んぜらるゝように成つて来たのは是れからであります。

何れにしても真言宗が安心信仰を勧めるのは本筋ではない。本筋ではなくとも安心信仰を求めるはこゝ拭ひ消す譯に往かんのであります。ところが淨土真宗のように彌陀の本願を信じ、彌陀の極樂に往生するに云ふことに安心するならば實に都合がよいのであります。真言宗の方は少々都合が悪い。いふのは私共は彌陀の本願も信するのであるが同時に不動さんも觀音さんも毘沙門天もいます。いふの佛菩薩を信じまして、彌陀を信じて極樂往生に安心するといふ一向專念には往かんのであります。未來往生は那國を頼みに安心するかを申し申します。漠然としたやうで甚だ心許ないやうであります。

真言宗には無數の佛菩薩が居られまして曼荼羅の中にある佛菩薩はいろいろでありますから、何

れの佛を信じたら可いのかといふことすら解らんであります。自分も知らず師匠も知りません。其れで自分が信ずる因縁ある佛菩薩を選ぶ作法のこゝから申します。前に申しました灌頂であります。灌頂の壇を築きまして其の壇の上で初めて自分の信んず可き本尊を定めてその手順を運ばねばならんことに成つて居ります。灌頂の壇に入つて初めて私は觀音様に縁がある。不動尊に縁があるから私の本尊は是れだ。定るのであります。ところが幸に選びました本尊が未來までも救うて呉れるといふ阿彌陀如來のやうな方に當ります。都合が可いのであります。未來までも救うて呉れるといふことを本願にして居らるゝ佛菩薩は實に稀れであります。皆な自分の修行の爲めの本尊でありますから自力修行には適當するものであります。未來までも打ち委せて安心して居らるゝ、いふ譯には行きません。私の本尊は不動尊であります。不動尊は他の佛様方のやうに特別に淨土がある譯ではなくして行者自身の心中を不動尊の淨土とするといふことに成つて居ります。誠に有難い次第ではあるが自分の心の中へ引導して頂いても仕方がないやうに思はれます。是れでは信仰云ふことは成り立ちますが未來を救うて下さるといふ安心は成り立たぬのであります。でありますから耶蘇教の人や淨土門の人が一佛一神を信じて未來まで救濟して貰へるものでなければ眞の宗教の意味を成さぬといふて威張るのであります。が至極尤もなきころもあり、併しながら物は見ようでありまして石や練瓦で家を建て、居ります。見たところ奈何にも頑丈で住んで居ても安心で火が來うが風が來うが心配はないやうであります。ところが木造の家に成ります。一寸した

風にも地震にもゆらくして實に危いものでありますが、一朝大地震でも来るミ石造や煉瓦造の家の損害が多くて木造の方は案外人や畜類を害うことが少いものであります。一向専念で一佛一神を信じて居りますれば平素は實に慥かであります。現代文明のような大地震に遭ひますミ忽ち安心や信仰に大動搖を感じて、極樂も天國もぐらくに動搖して居るのが實狀であります。眞言宗徒は信仰なきはボンヤリして居ります。佛がある、左様か、極樂はある、左様か、實に頼りないようなぐらくのようでありますが、而も時代の大地震に遭ひましても別に差し迫つた動搖も感じて居らん、昔ながらの状態に居るミところに眞言宗の強味があるのであります。

眞言宗位い安心信仰の問題に對して吞氣な宗旨は少いようであります。一般に申しますミ三つほごに成つて居るようであります。

第一は不動様も信じます。觀音様も地藏様も信じ居りまして、安心はミ云ひますミ弘法大師を信じて居さへすれば未來があるなら弘法大師が何んミかして呉れるであらうミ云ふて少しも心配をして居らんミところに安心が出来て居るのであります。横着なようではあります。大きなミころがあります。未來は弘法大師にお預けして此の世では神佛の加護に依つて幸福な生活が出来るミ信じて居るのであります。之れが一番多數の人の状態であるようであります。

第二は此の世では觀音さんや不動さんを信じますが未來は阿彌陀如來のお救いで極樂淨土へ往生するミいふ安心を持つて居るのであります。

第三は弘法大師と同じように彌勒菩薩の淨土である都率の内院へ往生するものミ安心するのであります。是れは眞言宗の智識階級の人に多い信仰であります。其の他にも種々の安心信仰を標榜する學者はありますが凡そ此の三つの外に出でないのであります。學者の理窟ぐらひで信仰や安心があゝのかうのミ論じたりするものもありませんが無駄言であります。三つの中何れに成りましてもかく信んじて未來は然る可くお取り計ひが願えるものミ安心して居るこは現代に於いても最も力強い安心信仰の状態であると思ひます。

さて次に私自心の安心信仰であります。凡そこゝに信仰安心を語るものは他人の財産の勘定をしてお金が幾萬田畑幾町なミ數へて見たミころで實は何んの價值もなきのみならず不都合千萬な仕方ミ申さねばならぬ。自己の安心信仰を有りのまゝに告白してお互ひに共鳴する。是れが安心信仰を語る唯一の方法でありまして、當然の手續であります。自分の寶を示さずして隣の人の寶を聞いて見せるミ云ふこはある可き理のものではありません。隣の人の寶を見せようミするものは自分の藏に寶を持つて居らぬ人の猜い手段であります。自信教人信、己れが先づ信するのでなければ此の問題に限つて語る譯には行かんであります。

私の信仰を申しますミ眞言宗の教全體を其のまゝに信するのであります。眞言宗の教ミ申しますミ手に印を結び口に眞言を唱え心三摩地に住する。是れを三密ミ申しますが、此の三密の行に依つて一生この五十年の間に肉身のまゝに佛に成るこが出来るミ云ふ教であります。手に印を結び口に

眞言を唱へることは眞言僧の常に行るゝころでありまして御承知のこゝ、存じますが、心三摩地に住するこゝいひます。三摩地は平等こゝいふやうな意味を持つた梵語でありまして、觀念を一境地に凝らします。こゝに靈の力が活躍して來ます。此の靈の活躍する一境地に觀念を凝らすのでありまして、觀念が靈の力を働かせて來る、則ち觀念と靈とが一致する平等に成る是れを三摩地と申します。假令へば擊劍をやる。竹刀は印にあたり、ヤツと云ふかけ聲は眞言でありまして構えたる竹刀と精神とが一致して全身是れ竹刀と成ります。こゝに靈の力が働いて來て不思議な働きをするのであります。竹刀を構えて、竹刀の外に身なく全身竹刀と成つて、ヤツと眞言を唱へて打ち込むのであります。私が打ち込む、佛が打ち込む、ヤツと來る。こゝに火花が散ります。火花これを悉地と云ひまして、こゝに佛と成る妙用が行はれるのであります。手に印を結び口に眞言を唱へ、心三摩地に住して三密が調ひます。靈が動いて來て穢れたこの身が其のまゝに成佛する、是れを即身成佛と云ひまして眞言宗の教は此の外にないのでありますから、私は此の教を少しも疑はんのであります。然るに私は安心と云ふこゝは出來ません。何故かならば佛を向うに廻して私からやつと打ち込んで見ますが、火花は少しも出て來ません。五十年七十年かゝりまして、光りが出て來そうにも思はれませんが、出て來るには違ひない。こゝは信じて居るのであります。夫れは永劫を期せねばなりません。

- 一體三密の行を修して一生に成佛が出來る。と云ふには、少くも三つの資格が必要です。
- 一は極く強壯な身體。

二は優秀な靈智

三は豊富な福德

であります。第一に身體が強壯でなければ三密の行には堪えません。こゝいふのは手に印を結び口に眞言を唱へ、心三摩地に住する。こゝは何にも強い身體を要せぬやうなものであります。三密の行には靈が活躍する、靈は非常に力強いものであります。孔子の弟子の顔回も弘法大師の弟子の智泉、十大弟子の一人でありまして、何れも靈の力が餘程著るしく發達して居つた人でありまして、身體が弱い爲めに何れも師に先き達つて死にました。弘法大師の如きは第一身體の非常に強壯な方であつた。こゝは日本全國に足跡のない處がなく支那までも其の當時に出かけた。と云ふ事實でも明かでありまして、次に靈智。こんな言葉は用ひたくないものであります。假りに靈智と申します。普通に天才なと云ひまして、天才にも幾分此の靈智のひらめきがありました。十七八才二十才位で既に天下に名を成すやうなものがあります。三密の行を修するに適當な靈智と云ひます。天才の一を聞いて十を知る。と云ふ風なものは足りません。目に依らずして千里の外を見る。耳を塞いで百里の外の音を聞く。足に依らずして二三百里の道を往く。如何にも奇怪なやうであります。何にも不思議はない。こゝであつて此れが靈の活躍であります。是れは私の信仰の上から一步も曲げぬ事件であります。此の靈の力は特種な人が持つて居る。と云ふ譯ではなくして、皆なお互ひが持つて居る。前にも申しました菩提心は誰れで

も持つて居るのであるが此の靈を働かさぬように極度に此れを隠して隠し了うせたのがお互ひの人間であります。

進化論の説に依りますミ人は猿から發達したミ云ひますが、私は反對に人間は元來靈智を持つて居る可き筈であるが、段々に其の靈を働かさぬ様に隠して了ふて靈の影法師が僅かに精神ミして働いてゐるもので、則ち自我ミ云ふ黒布で靈智を押し隠したものが人間であるミ云ふのでありまして人間は進歩したものでなくして退歩させられたもの、人間生活に適當な程度に耳や目や鼻なミの五官が與へられて居るものミするのであります。ハートマンのハツピネス幸福論の中に面白いミミが書いてあります。若し人間が百里二百里遠方のものが見えたり聞えたりしたら實に結構なミミのよきに思ふかも知らんが夫れは却つて不幸である。この水も知らずに飲んで居るから飲めますもの、餘り能く目が見えるミ水の中には屹度種々の物質が混ぜつて居つて逆も氣持が悪くて飲めるものでない。百里も二百里ものミミが皆な聞えるミこの耳がじやん／＼響いて喧しいミミであります。随分ミ知らずに濟んだ私の悪口を聞いて腹を立てねばならぬミミであらう。又たこゝで御馳走をよばれて居るのに遠方の不淨が見えては味もなくなる。今ま人間が聞いたり見たりして居る程度が生活に恰度適當な度合に發達して居るので却つて幸福なのであります。進化論の考へでは低級なものから高級なものミ進むミ云ふ、是れを一涯に眞理ミ思ふて受賣りをするから間違つて來る。何にも低級なものから高級なものへ上つて往くのを進化ミ考へるには及ばぬ。進化ミは高低の意

味に解せずミも可い。則ち生活に適當したように己れの周圍の世界を改造して往くのを進化ミ云ふのであります。梯子を登つて往くようなのが進化ではないお化粧をするのが進化であります。アミバから次第に發達して來たので凡てが段階を成して居るミ考へるが犬の目や猫の目耳、鷹の羽なミ人間よりは遙かに進歩して居るから人間よりも進歩した動物であります。歩くミミにしましても一體人間は何里位歩けるものでありましよう。醍醐の聖寶さんは朝醍醐を發つて吉野から大峯山に登り歸りには大和の金剛山葛城山を廻つて晩方には京都まで歸られたミ云ふ話があります。が何んミしても不思議なようで虚らしいが又た本統かも知れん。私の身うちにも濱松近在から箱根まで四十里近くは一日で平氣で歩いた人がありました。から人間が一日に何程歩くかも一寸見當が付きません。第三が福德であります。が人生れて宿福を持つて居らねば折角の身體も靈智も何んの役にも立ちません。食ふミ着るミに不自由をしたり不具であつたり災難にかゝつたり、不時の病を病むようなミミでは何んにもなりません。人から尊敬を受けるのも人を教化する力もやはり福分に依るのであります。

ミところが私は此の三つを持つて居りませんから一生に成佛の出來るミミは眞實であるミ信ずるのであります。が、ミても私の手には合ひませんので是れは永劫を期せねばなりません。私が高野山を下りましたのも是れが爲めで、高野山では一生の中に必ず成佛が出來るミ云ふミミを標榜して居るだけで可いので、此の信仰を叩いて居るミミがお役目であります。火花が出て來うが來まいが夫れは

問はんであります。何時まで、も火花が出て来る出てくる、こいふて叩いて居さへすれば可いのであるが私には夫れが出来ません。眞に火花の出るのは又た次の世のこゝにして只今は切めて火花のほゞほりなりを感じたい。こゝ焦慮つて居るのであります。併し是れは高野山では謀反人に成るので謀反人が知らん顔をして居るのは善くありません。

大學へは誰れでも入學するこゝが出来まして絶対平等であります。サテ入學する人の個人、の身體の都合や財力や能力や學力の差別がありますので入學の資格を亡うものであります。佛には誰れでも成れる、けれども三密の行に誰れでも堪えるこゝが出来るか、夫れが難かしいのであります。何れにしても一生の間に佛に成れるこゝ云ふ信仰は確かであり、動かぬのであります。其れでも安心、成ります。こゝ全く見當が付かんこゝに成るのであります。夫れで、私は安心のこゝは別の方から得て来て居るのであります。前に申しましたように明遍上人時代に念佛門が非常に榮へて来ましたので自力宗である可き高野山にも鉦の音が絶えんこゝいふようなこゝで眞言宗の學文などは全く眠つて居つたのであります。が、かの念佛門の勢ひに動かされて初めて高野山にも眞言宗の學文が榮えて来ました。高野山の學風の元祖として尊崇せられて居る方に覺海云ふ方がありました。やはり明遍上人前後の人であります。が此の人が出て次第に高野山には學者が出て来たのであります。が私は此の覺海さんの教えられた安心、夫れを深く信ずるものであります。此れが眞言宗の安心である。こゝ信じて居るのであります。覺海さんの安心のこゝは僅か半紙三四枚の寫しもの、中にありますのを、先年覺

海さんの住所の跡に現存して居る増福院といふ寺に保存されて居るものを見たのであります。今其の文章を少しばかり讀んで見ます。こゝ、何んでも其の當時念佛門に深く歸依して居る人が覺海さんに對して眞言宗の安心は、ごんごんなものであるか、尋ねられたようでありまして、夫れに答へられたのがかうであります。

つらく、案んずるに強いて都率極樂をも執せず。密嚴國土にも偏執す可らず。靜かに思ふ時は何れに生れ何れに成らんごも思はず。心だに淨めつるならば龍、夜叉等の身ごなりたり。こゝて苦しからず。臨終に如何なる印を結ぶごも思はず。四威儀に住す可し。動作何れか三昧に非ざる。念々聲々は悉地の觀念。ご眞言ごなり。實に心に妄念あらば。こゝて此の念を止めて。こゝそ觀んす可けれごも思はず。臨終なごに強ちに人に知られず。善知識をも用ゆ可らず。自他の意各別なれば。同じ觀念にてもさすがに我が意に同せず。我が意に同せざる人はなかく、無きが善きなり。五智房なんごの臨終に人にも知られず。正念に住して入滅せられたるは哀れに貴きこゝに覺ゆれ。やんごごなき人には都て十界に於いて執心なし。

斯う云ふ安心を懷いて居られた人であり、ますから、當時吉野山、高野山、領地争ひがあつて幾度も朝廷に訴へたが吉野方の勢が強いために少しも高野山の言分が立たぬ。其の中吉野の方からは奥の院の側ら迄吉野領、ご云ふ標抗を打つて来た。ご云ふような騒ぎで、高野山の大家は一同に高野山を離散しよう。ご云ふごこゝに一決して居つたのを、覺海さんは一夜だけの猶豫を乞ふて一山擁護の大願

を起されて衆徒も離散するこゝもなく濟んだのでありますが、其の時覺海さんは天狗に成つて隠れられた。云ふ傳説に成つて居りました。其の安心は傳説にふさわしいのであります。此の安心に一點の加ふ可きなく實に徹底したものであります。未來は都合で地獄に入りて熱湯の熱さを見て來るも宜しい。犬猫に生れねばならぬならば夫れでも宜しい。斯くして居る中に今ま植えた佛種が萌して來て成佛も出來ましょう。而して此の安心の落ち付くところは前に三通り上げました中の第一の未來は弘法大師に然る可くお委せする。云ふのと同じこゝに成るのであります。而して眞言宗徒が意識してかせずしてか何れにしても一番廣く此の安心を持つて動かぬのであります。一寸見た。こゝろ眞言宗徒は安心な。ぎてんで知らんかのように見えて、其の實最も確かな動かん。而しながら自意識せぬ。云ふ妙な風を持つて居るのが何よりの強味であります。

安心信仰のこゝに付きましては以上のようなこゝであります。次は地獄極樂觀であります。地獄に往くは悪い極樂へ往くは善い。云ふ申しましても地獄極樂が眞實に有るのか無いのか。若し無いもの。云ふれば安心なき。云ふても何んの意味もなくなり、念佛しても全く役に立たないのであります。地獄極樂の有無が根本の大問題であります。地獄極樂問題に付いては第一に死んで未來があるか。第二に轉生し再び人間なきに生れ替るこゝがあるのか。第三地獄極樂が有るのか。云ふような問題に成ります。併し此れ等の問題は、何ん等科學的經驗的説明の出來るものではなく、死んだらば目に見えた通り皆な土に成つて了うのであります。が或は未來にも生活があるのではないか有りそうである。

云ふので未來生活を科學的に研究しよう。云ふ試して居る西洋の學者は澤山にあるようであります。其のようなものを頼りにする譯には往きません。夫れでも明日食ふ米が無い。云ふしたら何ん。云ふ。米が四十錢に成つた。云ふのであの騒ぎを演つたのである。が明日の自分の生命が何ん。云ふ。成るのか。死んだら生活が無いのか。此の様な差し迫つた重大問題を冷々淡々餘處。云ふにして少しも怪まんの。人間の不思議中の大不思議であります。此れほ。云ふ人間は無感覺なのであります。云ふか。

第一人は死して未來の生活が有るかないか。であります。が理論ではありません。事實でなければならぬのであります。其の事實も誤摩化しや新聞記事や傳説では頼りないのであります。最も確實な事件に依らねばなりません。近世哲學の大宗であります。近代の學文界の本尊様のように一般から尊敬せられて居る。カントであります。が、この人は世間の學者が一般に輕卒にも未來生活はない。云ふ。断定して居るに對して、否定するのは無理である。固より肯定も出來ぬ。が兎も角くも問題である。云ふ。して最も嚴正な態度を採つて居りますが、實に穩當な學者であります。夫れでカントは次のような事件に對しても肯定はせんが、勿論否定も出來んもので研究せねばならぬ問題。云ふ。して提出するのであります。今ま其の事件の成行を申します。云ふ。カント。云ふ。同時代にスエデンボルグ。云ふ。神變不思議な人があります。日本に弘法大師。云ふ。似たような人。だ。云ふ。常に評せられて居るのであります。が、此の人は瑞典の人であります。カントの記する。云ふ。こゝろに依つて次のお話をするのであります。が、千七百六十一年のこゝろである。が瑞典の朝廷に仕へて居た和蘭陀人の夫婦が。あります。が、其の夫の方は前に亡くな

りました。或る日此の未亡人のところへ金細工師から夫の生前に請負ふた銀細工の工賃を請求して來ました。ところが其の亡夫云ふのは規帳面な人で代金を支拂はずに置くような人でもなく又たお金を拂うて受取證を亡くするような人でもなかつたので、那邊かに在るに違ひない云ふので捜して見たが少しも解らん。夫れで未亡人はスエデンボルグの許へ参りまして先生に頼んで亡夫の靈魂に其の在處を聞いて貰らひたい云ふのでありました。而して先生も夫れを承知しました。夫れから三日目に未亡人は知己の人たちと共に先生を招待して茶會を開きました。其の席で亡夫に尋ねて貰うたところがお金は死ぬ七ヶ月前に支拂うてある。受取證は二階の抽斗の中に入れてある云ふことでありましたが、其の抽斗ならば調べて見たが無かつたといふので重ねて聞いて貰らひます。其の抽斗の奥に板があるその板を除けるに秘密の抽斗があつて其の中に種々の秘密の書類を雜ざつて居る云ふのでありました。皆んなで一處に往つて云うた處を明けます。果して云ふ通りに受取證が出て來たが實際死ぬ七ヶ月前の日付けで支拂うてありました。カントは此の事實を上げて何故にこんなことがあるか今ま説明を求めろ爲めスエデンボルグに書面を出して居るので其の中に返答が來るであらう云ふて居ります。日本にも神降し云ふのが澤山にありまして死んだ人と對話をして種々のことを聞くものが何處にも一人や二人は居ります。而して人が死んでも靈魂は残つて居る云ふことは否定することは出來ぬ云ふて居る學者も少くないようであります。併し靈肉は一致でありますから肉を離れて靈魂のみが生活する其のようなことはある可らざること

で、未來生活に於いては我々のような硬はばりたる肉を採らぬかも知らん。もつと稀薄肉であるかも知らんが何れにしても肉を離れて靈の生活そのようなものはない理である。電氣功云ふ如きものでも如何にも靈妙なものではあるが電導體又は保電體がなくして電氣だけが存在するそのようなことは想像が出來るのであります。又た死んだ人と話をする、靈魂と交渉する、實は其の様なことは、死者が生存中に經驗したことは皆な第八識云ふ靈體に必ず跟跡を残すものであります。其の跟跡は永劫に現在でありまして消えるものではないから此の跟跡と生者とが交渉するときに恰も死んだ人の靈と交渉するような形を現はして居るのであります。が此れは稍脇道に成りますから深入りは出來ません。

次は轉生であります。人が死んで未來は何んぞ成りますか。靈として何時までもジツミして冥界に居るそのようなことは、死んだ瞬間に靈は新しい肉を採つて轉生するのであります。釋迦如來の本生譚、此れは釋尊が過去世に於いて種々の生活をして來られた因縁物語であります。轉生には二通りあつて人間が死んで鳥や毛物に生れます。また人間に生れ替るのことであります。毛物や鳥に生れ替ることは今は申されませんが、佛法に依れば因縁に依つては種々の生を採るものであります。轉生は否定することが出來るのであります。其れには人から人に轉生した事實に就いて轉生は通る、ことが出來んものであることを固く信ずるのであります。話は又しても横道に外れますが眞言の法——ダルマ——靈の力であり、是れは大日如來から金剛薩埵へ、其れから龍猛龍智、金剛

智、不空、惠果を傳へて前申したように、惠果から弘法大師へ傳へられたのでありますが、丁度八代ありまして、八代の中でも金剛智、不空是の二方は師弟でありまして、印度から支那へ眞言の法を持つて來られた方で、金剛智三藏が始めて支那で眞言宗のお經を翻譯せられたのであります。而して不空三藏に例のダルマを傳へて置いてお隠れに成つたのであります。金剛智が印度から渡航せらるゝ途中で大難風に遭遇せられたのでお經の原本は多く海中に抛け入れられて、支那へ持つて來られたのは僅かばかりでありましたから、金剛智三藏がお隠れに成るに不空三藏が支那朝廷の保護の下に再び印度に入られて、金剛智の師匠に當る龍智此の人は非常に長命せられた方でありまして、此の龍智に就いて眞言の一切のお經を傳へて支那に歸られました。而して不空三藏が悉く翻譯を爲られたので、此の不空三藏に到りまして眞言宗は實に内容も外觀も完美したので最も效勞の著るしい方でありまして、御在世中から此の法を日本國に持つて往つて永く保持しよう云ふ大願があつたようでありまして、夫れで日本の讃岐國の佐伯氏の腹に託胎して眞魚(大師の幼名)として再誕せられたのが日本の光仁天皇の寶龜五年六月十五日で、不空の入滅は同じく唐の代宗の大曆九年六月十五日全く同じ日であります(佛は百億に分身します聖者も分身して託胎したのでありますからさすがに再生の苦痛に堪えずして不空三藏の晩年は病弱であつた云ひます)不空が再生して眞言法を護持する迄には相當の年月を要します少くも三十年はかゝる筈であります。夫れで不空と弘法大師との間に三十年の橋渡をして、惠果和尚が其の役廻りを勤められた譯でありますので、弘法大師が六七八月

の灌頂壇に上られるに早やくも其の年の十二月十五日、弘法大師も未だ後始末に忙しきをりから入滅せられました。眞に一足違ひで弘法大師は惠果和尚にお目にかゝるこそが出来なしたのであります。尙ほ文章に就いて轉生のあるこそを證明します。

弘法大師が惠果に謁せられた時、和尚は云はれるには、予れ汝の來るこそを知つて待つこと久し、來るこそ何んぞ遅かりつる云はれたのは三十年來の契約のあつたこそを暗示せられて居ります。又た歸朝の後ち直ちに朝廷に上奏して持ち歸られたお經や佛具の目錄を認められたものに、請來目錄云ふものが現存して居りますが、其の中に當時の模様が明かに記されて居ります。和尚の付法慇懃なり、遺誠亦た畢る、去る年の十二月望日、蘭湯に垢を洗ひ、大日の印を結び右脇にして終る、是の夜道場に於いて持念するに和尚宛然として前に立つて告げて曰く、我こそ汝を久しく契約あり、誓つて密藏を弘む、我東國に生じて必ず弟子を爲らん云ありまして、轉生のこそは弘法大師に取りましては人が飯を食うほぎに確實なこそで不思議はありません、弘法大師を信するものは大師自らの經驗を疑ふこそは出來るのであります。

弘法大師が眞言宗を日本に傳へて來なかつたならば、日本の文化は今の半分も喪う譯でありまして、千年間の日本國民の生活は全く違ふたものに成つて居たかも知れません。夫れほぎ重大なこそが僅かに一足違ひで行き違ふのである、これが偶然云へましようか。不空、惠果、弘法、大師と三代三十年四十年の一大計畫でありまして決して偶然ではない。今日のように電信電話も自由な世に於いてす

ら手違ひは多いことであるのに、遠く千里の海陸を隔て、一足違ひで弘法大師が惠果の最後に駆け付けるといふようなことは何んとして聖者の計畫に基いたものか解する外はありません。

既に未來の生活がある。轉生がある。併し地獄極樂はさうであるか。地獄極樂は往つて見たものがないから無いと云ふが、日本の國中ですら隅から隅へ往つたものゝないのに往つた往かぬが何んの證據に成りますか。地獄極樂がないと云ふには二つの理由があるのであります。一は地獄極樂があるに成ることも坊さんが威張り出す。昔は是れで皆な坊さんの爲めに虐め抜かれました。社會の秩序も何にも是れが爲めに亂されました。現に羅馬法皇なきに申して皇の上に皇として非常な權力を振ふて夫れが爲めに皆な難儀をしたものでありますから、無いと云ふ方が安心なためであります。二は地獄極樂があるとするとお互に現在の生活の方式を變へねばなりません。かけ値を云ふたり誤摩化しの商業法なきは全然止めねばならぬが夫れでは都合が悪く、やはり地獄なきないと云ふて居る方が利益に成るからであります。此のような場合を評して弘法大師は耳を掩ふて鈴を盗むと云ふて居られます。隨分皮肉な批評であります。地獄極樂の存在を否定せんとするのは正に此の類であります。文化生活の病を救ふものは地獄なきはあると云ふ觀念より外はありません。

地理學や天文學の知識から地獄極樂があること云ふことを知るのであります。決して空想ではありません。我々の住んで居る此地球の外に一も世界がないと云ふならば地獄も極樂もないかも知らんが、夫れならば我々は全く目を閉ぢて宇宙の月も日も星もないとしてならば道理であるが現に天

界には無數の星の世界があるではありませんか。此れ等の星の世界では我々のような空氣を吸ひ水を飲んで生活して居る人類なきはないかも知らんが、人間が此の五官に依つて生活して居るからと云ふて五官に依らねば生活が出来ぬと云ふ譯ではなく第六官と云ふようなもので生活して居るかも知らん。人間は火に焼かれ水に溺るゝが星の世界のものは火にも焼かれず水をも要せぬものであるかも知らん。地上に於いても我々こそ空氣を吸うて生活して居るが魚屬は水でなくては生きて居らん。人間は水の中では生活は出来ん。人間の生活と違ふて恰度地獄極樂の觀念に相當した生類が無いとは何んで斷言が出来ましょう。宇宙間に無數の世界があることは而して此の地球より幾千倍も大きな世界のあることは天文學者は何人も知つて居る。其れに此の世界にのみ生物があつて其の他の世界に生物がないと云ふ如きは余りに無知な余りに譯の解らぬ迷妄であります。又十萬億土の遠方に極樂が假りに在りまして夫れが我々に何んの關係があるか、有るにしても我々に要事がないと云ふものもあります。此のような人は全く科學の知識にすら觸れたことのない無學の人の云ふことで、我々の住んで居るこの世界が茫漠たる天空の中に安定して山は綠りに水は清く花咲き木の果の實るのは全宇宙の相互關係に依つて太陽との距離が適當なきところに置かれて在るからであります。全く宇宙間の無數の星辰のお蔭であります。若し太陽系に最一つ大きな星が餘分にありましたとすれば此の地球も此のような有様ではなかつた筈であります。夫れほかに宇宙は密接な關係を有つて居ります。

夫れでは假りに有るごしても又たも困難な問題は其れを誰れが見て来たかご云ふごごであります。併し是れも別に不思議はないので則ち佛の透視であります。佛は宇宙を透視するのであります。透視ご云ふごごは可笑しいご云ふ人もあります。ようが茲に再びカントが書いて居る透視の事實を引き合ひに出しましょう。前に上げたカントの記事ご共に二三の事實が上げられて居る中の一つであります。最も確實なものであります。

「千七百五十六年の九月の終りの土曜日の午後四時頃スエデンボルグが英國から歸つて来て瑞典のゴールデンブルグへ着いた。其の地にカステルミ云ふ人が先生を迎えて十五人のお客ご共に晚餐會を開きました。晩の六時頃になるご先生は頻りに室を出たり入つたりして蒼い顔をして戻つて来て云ふには今もストックホルムに火事がある。今ま誰々の家が焼けて居る。火は次第に擴がりつゝあるご火事の模様を一々に語つて自分の家も危ひご云ひました。八時頃に成つて先生は安心した顔付をして歸つて来て先生の家から三軒目の處で火を消し止めたご云はれました。此の報知にゴトルデンブルグの町の人々も友人等の運命を案じて大騒ぎをして、其の翌日曜の朝火事のこごを知事に報告したので知事は先生を呼んで出火の時刻場所消防の模様延焼の家數鎮火の模様等を聞き取りました。月曜日の朝ストックホルムの商人から其火事中に此の人の友人の許へ早飛脚を以つて報知して来た使のものが到着した。其の日の晝に成つて瑞典の皇室から火事の報知が知事の許へ到達した。其れは先生の透視の事實ご少しも違はなんだ。此の事件は私の友人から通知して来たもので其の友

人は此の事件をストックホルムに於いてのみでなく約二ヶ月以前にゴールデンブルグに於いて自ら調査した。私の友人は其の町に名の聞えた友人を持つて居るので其の町の實驗者から十分探つた事實である」ご云ふ意味をカントが書いて居るのであります。

弘法大師にも是れご似た傳説があります。或る時支那の惠果和尚の古跡である青龍寺が焼けて居るのを見て散杖で水を灑いで火を消し止められたご云ふごごであります。スエデンボルグの透視は五十里許りの距離でありましたが人格の偉大なものになるご千里萬里何んの區別もない筈であります。佛は絶對の人格を有つて居られるので宇宙間を透視するは當然であります。或は透視でなく親しく其の境地を踏まれたごしましても不思議ごするほごのこごはありません。

いろ／＼の點から地獄極樂なり轉生の事實を考へねばなりません。時間が無い爲めに大體のこごを申したゞけであります。が此の觀念が破れました。世は暗黒であります。現代の社會を救ふごごが出来るか出来んか全く岐れ道がこごにあります。

眞言宗ご社會

—弘法大師は最後の生存者—

社會ご云ふごごは近頃の流行語で社會問題が出て來んご何んだか捻りが付かぬようであります。から、此の問題にも觸れて見ようご思ふのであります。社會問題ご云ふごご勞資問題家主ご借家人地主

こ小作人云ふようなこゝが定つた題目に成るようでありませんが、實は社會問題に申します今日では勞資問題か小作問題か云ふような生やさしいものではないのでありまして現今各國に起して居る問題の性質も餘程違つて居るのであります。例へば阿米利加あたりでは常に起して居る運動の性質を申しますと特種の技倆を持つて居る勞働者が組合を組織して資本家に種々要求します。資本家は其れ等の勞働者を捨て、技倆を有たぬ勞働者で代用しようとする。夫れに對抗して有能の勞働者が運動を起す云ふ風なものが重なるものでありまして、日本の勞働運動が賃金を増せし云ふようなものは大分違つて居ります。又た英國などに近頃起つた運動などに成ります。勞働者が資本家の所有して居る鑛山などを國有にせよ云ふのであります。資本家はなか／＼オイソレミ諾かぬ。

政治上の問題にする。政府もなか／＼夫れを實行しようせぬ云ふようなこゝから爭議が起つて居るので云はゞ勞働者が直接國の政治を左右しよう云ふような性質を持つたものであります。から餘程危険に成つて來るのであります。一層急進的なものになります。露國の共產黨のようなもので是れに成ります。國民の一番多數を占めて居るこゝろの手づから土を掘つて居る者が直接政治を爲す可きである云ふようなこゝで、日本などではまだ／＼社會問題など全く初步でありまして是から次第に困かしく成つて行かう云ふこゝろであります。私は社會問題を取り扱ふてお聞きを願ふのではありませんが、何故に此の様な傾向が世界的に成つて來て人類が此の問題に苦しんで

をるか、斯く成り來つた根本の問題を宗教の方面から、學文の方面から眺めて見ようと思ふのが今の目的であります。而してこのこゝは一般に少しも考へられては居らんようであります。

斯のように世界が恐ろしく動いて來たに付きましては實に深い因縁があるのであります。單に今ま起つて居る當面の社會問題などは此の根底から起つて來て居るのであります。

夫れは基督教の根本迄も遡つて行かねばなりません。キリストは神から直接に啓示を受け神の兒である云ふ自信を得まして神の教に依つて凡ての人類を救うこゝを本願としたのであります。こゝろがキリストの生れた猶太國には王があり神々があり政治と宗教とは一致して國政が宗教で宗教が國政でありましたが、キリストは其の猶太の眞中に立ちて猶太の神は邪神である。我が神は天の國に在せる唯一の教の主である。此の神の外に尊敬す可きものはないと叫んだのであります。猶太の國民は怒るまいこゝろか種々キリストを迫害しまして、終には捉はれたのであります。基督は無抵抗主義でありますから遁れも隠れも致しません。數限りなき生靈は彼れに依つて救はれるのであります。勝りに微笑して十字架を負ふたのであります。而して基督の教を信じたものが團體を造つて夫れから生れ出たものが基督教會でありまして、西洋の國民は皆なこの教會に屬して居ります。而して西洋の文化は凡て此の畑から生れ出たものであります。此の畑で培はれた國民は其の本質として斯う云ふこゝに成つて居るのであります。

人類は平等に神に依つて造られたものである。

神の前には人類は一様に罪の兒にして國王も同様である。地上に於いては神の命のまゝに神に罪を懺悔し、神の王國を地上に築くこゝが神に對する報恩の道である。

神威を穢し人權を横奪し王位に君臨する國王を仆せ、神の法に背きて暴虐者の勝手に製造したる法律を破毀して神の法律を人類の法律に置き替へねばならぬ。

神の前には均しく罪の兒である可き國王が平等に恵まれた人類を虐待するのは二重の罪人である。其の上彼れは基督—神の使である基督を虐殺したのは正に三重の罪を犯したものである。王を仆せ、人類の法律を破れ、是れが神に對するの報恩の道であつて又た神に救はるゝ道である。云ふのが其の旗標してあります。

曾つて基督の云はれたこゝは最も深く此の思想を其の信徒に印銘させるのでありまして實に有名な話であります。或る日多數のものが一人の女を捉えまして猶太の神殿の前で懲らしめて居ります。基督が夫を見まして何故に其のよう懲らしめるか尋ねられました。人々は答えて云ふようは此の女は姦通したのであるから懲らしめるのである。罪のあるものを懲らしめるのは尤もであるが、罪あるものを懲らすのは罪なき者でなければならぬ。汝等は罪の兒でありながら人の罪を責める。こゝは何事ぞ、罪人を裁くものはたゞ神あるのみである。云ふ意味を申されました。國法を申しまして基督の目からは罪の人が勝手に造つた潜越の法律であります。此のような旗標しを現實に推し進

めて地上に天國を築く。云ふ理想を實現したものが羅馬法皇でありまして、法皇の權力の旺んな時代に、は終に帝皇の上に帝皇として君臨し、假令帝皇の尊嚴を以つてしても法皇の命に背いては存立するこゝも出来ん。云ふような勢であつたのであります。法皇は神の代理者として神の法律に依つて支配するのでありますから現實に地上の天國の皇に成る譯でありました。人類は平等に神に造られた神の兒である神の前には罪を懺悔して地上に神の國を建て神威を穢す國王を仆し貴族を仆し法律を破る。此のような空氣の中に西洋の文化は生ひ立つて來たのであります。

尤も羅馬法皇も年月の經つに隨つて神の代理者たる實がなくなつた。羅馬法律も神の規定ではなくなつて人類の罪の影が彰らかに成つて來たので何時もはなく影も薄れて往つて今では見る影もありませんが、夫れでも基督以來の旗標しだけは益々著るしく残つて往くのでありますから、西洋文明の根本思想がこゝに在つて倫理道德の標準の善がこゝに在りますから、是れに背くものは罪惡にせらるゝのは當然であります。此の思想を押し詰めますれば露西亞の共產主義に落ち往くのが自然の必然の成行きでありまして、共產主義は西洋文明の總勘定場であります。露西亞に共產黨が成効して國の政權を握り所謂勞農政府が成立した時には米國の時の大統領ウヰルソン、英國の大宰相ロイド、ジョージ實に近代文明世界の二大明星である此の二人もが狂喜して勞農政府の成立を謳歌し隨喜讚嘆して、レニンこそは實に露國の救世主である。此の二人もが狂喜して勞農政府の成立を謳歌しか、日本の新智識も何んで此の隨喜渴仰黨に後れを取らましようか、大阪の第一流の大新聞なごは全

く狂喜して堤灯を持つたものであります。

斯く申しますと近代の思潮は全く基督一人の成效のように聞えましたが是れは歴史的に古く、實に國民思想の根底を成して居るのでかく申したまで、ありまして、此の思潮を煽つて最も力強く後援を爲して居るものは申迄もなく科學の方であります。中にも酷く刺戟を與へたものは例の進化論であります。進化論が餘り勢力が強くと基督なきも進化論の爲めに勢力が全くなくなつたものでありますから、見ように依つては進化論一人の勢力であるかのように解する人もありますが勿論そうではありません。

根強い基督教の精神が進化論の蔭に隠れて居りますので實は進化論は手先に使はれて居るほどのことでもあります。

進化論のことは小學校の兒童でも一通り心得て居るほどの説でありまして、凡そ近代の學文も種々行はれては居りますが、此れ位一般的に津々浦々までも行き渡つて理解されて居る學文にては外にはありません。然るに面白いことには此れほど廣く行き渡つた學文ではあります。サテ本元のダーウ井ンの進化論はそんなものかと思ひます。此れは又た其のように廣く行き渡るほどのものではなくしてダーウ井ンも驚いて居ることでありましょう。實はダーウ井ンの積りでは極く狭い意味で生物が劣等なものから高等なものに進んで行く次第を研究して、善い種のものを選んで改良して行けば段々種族の改良が出来て行くこと云ふことを科學的に研究したものに過ぎないのでありま

すが、恰度此の進化論が當時の思潮に都合がよかつたものでありますから唯だ生物進化の法則とする計りでなく、一般人類の進化は生存競争、適者生存、自然淘汰である、競争、競争、自由に競争せねばならんこと云ふことに成つて來たのであります。夫れが爲に實は羅馬法皇なきも根こそぎ碎かれて了うて神の掟なきは坊さんの勝手な掟であるとして、自然生存競争の目仇に成りました。進化論の爲めに神の王國も滅茶々に成つた様なもの、實は神の王國に云ふも夫れは眞の基督教の形骸の部面だけのことで、却つてその眞精神の復活を見ねばなりません。而して生存競争の目仇は廣く國王から貴族、資本家、而して近頃は知識階級が皆な手も足も出んことに成りつゝあるものであります。今は現に労働者、資本家の極めて悲惨な競争が行はれて居るのであります。貴族や特種階級を併して獨り天下で居つた資本家、知識階級は今度は無資産な労働者、無學な民衆に最も悲惨な競争を行はねばなりません。夫れに次いで男女の競争であります。現に世界到る處に女子の参政權運動がありまして男に平等な地位を要求して居ります。是れが又たそんな悲惨な競争を演らねばならぬか想像もつかないのであります。一方には親子の競争であります。西洋流の個人主義は親子の間にもテラホラ其の片影を見せて居りますから、子は一人前の人に育て、置けばよい、親は自身で身の始末をするがよい、親の權利兒の權利、是れは一つは今日の親爺も悪いので子弟が僅かに中學程度の教育でも受ける親爺は早速兜を脱いで、今日の青年は豪い自分等の及ぶ處でない、自分等は頭が古く成つたこと云ふて居るのであります。今日の親爺程度のものには智識が不充分であるから青年に追ひ越されるのは當然で

はありますが、親爺の古い經驗なるものは決して無價値なものではありません。假し多少智識に遅れたにしました處で兜を脱ぐことは何事であるか、努力をすれば青年の智識位が何んであるか、實に淺薄極まる受賣りに過ぎないのである。兒の愛に溺れて我が兒に己れよりも進んだと云ふことは自分に取つては却て慰安に成るかも知らん、併し貴い自分の經驗迄も棒にして且つ自己修養の努力を拂はずして、ひたすらに青年に兜を脱ぐ壯年の人の氣が知れんのであります。特に女子の結婚問題の如きは寒心に堪えぬものがあります。昔は親の威光で兒の意思なご少しも參酌されなかつたが是れは好くないこと申す迄ありませんが、女子の絶對自由開放の成れの果ては何んも成りました。西洋輸入の二番智識で以てヤレ時代錯誤のソレ時代遅れの云ふ抽象文學で以つて親の古き貴き經驗の指導をも絶對に排斥して、性の醒めなき、浮かれて居つて、末では何んも成ることでありましょう。是れは餘談に走りましたが何れにしても基督教の人類は神が平等に造られたもので神の外に人を裁く法はないと云ふ力強い教が那邊々々までも窃き出して居るころの西洋文明の根底は大方此のようなものであります。而して現代の勞働運動者の中には反基督的、非宗教的と云ふとを標榜して一に科學の研究の結果と云ふとを申すものでありますから、基督教の精神なきは煙にも見えんようであります。夫れはほんの皮相的の觀察でありまして、反基督教的と云ひましても基督教の教義や儀式や教會に反對するだけでありまして、人類は平等に神に依つて造られたものであると云ふ基督教の根本精神を前提として居るものでありまして、科學的と申しましても此の前提から出て來て居る

のであります。が只だ其のことは明了に意識して居らんだけのことであります。人類は一切平等に神に依つて造られたものであると云ふことは何んもしては抜くことの出きぬ天性を成して居ります。そこに宗教の方の根深いところがあるのであります。意識せずして而も其れが天性を成して居ると云ふはさ力の強いものはありません。

然るに之れに反しまして佛教の方では實は社會問題なきに關係する筈のものではないのであります。がやはり時代の思潮を避ける譯に行きませんのでござうかする。社會問題は佛法の本義に協つたことであるかのように曲辯するものが佛教家の中にも相當あるようであります。此れは佛法の方でも一切平等と云ふこととありますので其れを履き違へて出て來て世に阿るためと考へる外はないのであります。佛教の方では勿論一切平等を申しまして佛も凡夫も絶對に平等で何んの差別もないと云ふのであります。一切平等を云ふたところで何んにも差し闕えはないやうに見えますが、併し夫れは佛に成つた上のこと、又た成るに就いては草木も平等に成佛すると云ふので何ん人でも佛には成れる。そこを絶對平等と云ふのであります。前にも申したやうに大學へは誰れでも入學は出來ますが、入學者自身の資格が差別して居りますから、是れは又た無限に差別して居るのが本統であります。佛に成る門は絶對平等に開かれて居りますが、世間相を眺めて見ますと、絶對差別で貴賤貧富賢愚壽命の長短平等なところは一つもない。神が平等に人類を造つた其のような間違つたことを前提にし

のではなくして、今は半信半疑位の處に居ります。肝心の佛教家ですら今頃其のような因果なき稱へた處で誰れが聞くものか云ふ風で精々押し隠そうとする有様でありますから、世界の大部分には一たまりもなくたゞの形ちで手も足も出ません様に成つてからは、日本國民の頭から次第々々に三世因果の信仰は消えて往つて、其の代りに西洋の思想が漸く這入つて來ますので、今は落ち着く先きをちつと見て居つて行く處までやらねばならぬ状態であります。併し先づ其れ程に悲觀せなくともよいかも考へて見るのであります。云ふ申すのは日本國民は又た三世因果で頭を固めて來て居るばかりでなく、昔から絶對差別でない云承知をせん國民であつて、一面には世襲的の觀念の強いことは世界に類のない國民でありますから、此の國民性を焼き直さぬ限り動くものではあるまいと思ふて國民性を唯一の頼みにして居るのであります。西洋の學文のために一時は個人主義に動かされるかも知れませんが

お前は今ま貧乏であるから己れに對して其のような要求をするが、お前の兒は己れの兒よりも人物であるから、次の代はお前方が富んで己れ方が貧乏に成る、其の時同じような要求を己れ方から持ち込むがお前方は其の時それで承知が出来るか。

云ふ己れの子孫が富んだら云ふので誰れも二の足を踏まずには居らるのでありますから、日本人の頭には共產主義なき云ふような薄つべらなものに押されても大丈夫であらうと思ひますが或る種の人の騒ぐのは止むを得ません。

基督式の説を押し進めて行けば則ち一切平等で押し進めて行けば人類が絶滅する迄では社會問題なき失くなることはあるまいと思ひます。夫れも宜しからう、神の道に依り人類を救うのでありますから、此の世で人類が絶滅したところで、夫れが皆な救はれて、天國へ往つた云すれば基督の目的は達せられるのでありますから、死の勝利が云々にも現はれて來るのであります。私さもは信仰の上から神が人類を平等に造つた云ふことは信んじませんから、一切平等に躍いて往くことは出来ません。絶對差別であります。絶對差別であることが宇宙の眞實相であるから是れは止むを得ませんから、云々に解脱の道として佛道に行くのであります。現に共產主義なきの絶對平等は最早や露西亞では試験済みであつて、西洋文化の理想は美事でありましたが、現世では空想であつて成り立たぬものであることは事實が證明して居りますから、今頃此のような空想を謳歌するでもありません。時代遅れであります。歐米の智識階級の人々は一時は絶對平等の花々しい大勝利に浮かされて大喝采を惜まないのであります。サテ翻つて自分の背後を見ます。無智なる民衆が得たり賢しで絶對平等で押し寄せて來て居る。其の時は此方は醒めて前を恐ろしきものにして居るが、後から押し寄せて來たものを何んさも取り返しうが、其れは自分達が今まで導いて來た大潮であります。前にも進めず後からは寄せて居るので、西洋では全く行き詰つて居る云ふのが實際の有様であります。サテ何んせん術もありません。たゞ三世因果の道理を高調して世界の惡風潮を救済する云ふ一途が残つて居るばかりであります。

日本はさすがにそこまで進んでは居りませんが、一體佛教家は世界の氣勢に押されて了うて、三世因果、古くさい慈悲善根時代遅れに成つて居りますので此の大切な世界人類救済の大事業も今の日本の宗教界には望まれませんか、日本の社會を救うにしましても一反西洋へ三世因果の教を持つて往つて火元の西洋の方を鎮めて來る。而して日本へは横文字にして西洋から逆輸入をやつて初めて日本の社會も三世因果の法則で救済し得らるゝ、こゝ、思はれます。今は正に世界の大混亂を救うに是より最大の急務はないと思はるゝ時であります。若し今日のまゝで行きますれば實に妙なこゝに成るので、私ども三世因果の道理を信するものは、悪いこゝをせよ、必ず善いこゝをすな、善いこゝをするゝ善果を享けて賢く生れる、富み榮える夫れでは世間から惡まれる、世間に對して相濟まぬ、悪いこゝをすれば貧困に生れる、そうしたら大威張り、大もて必ず善いこゝをして善果を享けて生れるでないぞよ、斯んな風な説教をせねばならぬこゝになります。

佛教の方にも社會に奉仕するために孤兒院、療養院、感化院など種々の慈善事業が經營せられて居りますが誠に結構なこゝ、思はれますが、社會問題となります。基督教徒が陣頭に立つて奮闘して居りまして、佛教の方では賃金の分配方や富の分け前の問題に成るゝから駄目であります。佛教の方では生存競争や社會組織の問題に對しては全く門外漢でありまして、佛教には佛教相應の社會奉仕の道があります。是れだけ喧しい社會問題に對して傍觀の位地に立つなんて意氣地ないこゝのように見えましても、何んぞ云はれても直接社會問題に携はる譯には往きません。夫よりも重用な仕事か

佛教の方には幾干もありましてそれは文化問題であります。この冷かに成り往く社會の個人々々に温か味を與へて社會全般を温かくするこゝであります。

四海同胞ならば喧嘩腰ではいかん眞に温か味のある同胞でなければなりません。日本の識者の間にも冷かな勞資問題など空氣を緩和するために公衆に活動寫眞を見せる、圖書館を造る、運動を奨勵するなど文化的の施設に對する運動が盛んに成つて來ました。近頃は野外劇云ふような新しい試みが出來まして自然の山や川や建物を利用して演劇をやるのであります。

何れも温い情の中に麗はしい人情を造つて往つて自然に社會を向上させようとするのであります。社會問題などに狼狽へるよりはこの文化的の施設をする方が今は非常に必要なこゝ、思はれます。此の點で眞言宗が社會と密接な關係を持つて來るのであります。

弘法大師の文化的施設——夫れは數へれば幾干らもありませんが、大師御在世の時代に有つた事や廢れて了うたこゝをこゝで上げて見たこゝろが何んの役にも立ちませんが、今も弘法大師の遺風として盛んに行はれて居つて文化の向上に役に立つて居るので是れからはますますこれを培はねばならぬと思はれるものを、一二數へて見て御相談を致したのであります。

此の間大阪朝日の週刊にブラジル政府の官命を帯びて來朝したアンドラーデ君一寸茶目式のアンドラーデ君の書いたものが戴つて居りましたが斯うであります。佛教の教義には感心する。従つて横濱から程遠からぬ鎌倉を見ずに日本を通過するこゝは出來ぬ。尤も鎌倉に若し大佛がなかつたらつ

つて居ります。現にこの公園にも最も目立つた處に格好の可いお堂が見えて居ります。

同じ意味であります。が最も規模の大きなものに成る。四國巡拜であります。

病氣は病院で癒して呉れましょう。併し病氣から来る苦惱は病院では癒りません。

貧困は經濟學や政治の執り方で救うて呉れましょう。併し貧困から来る苦悶は誰れが醫やして呉れましょう。

或る不満を感じて信仰の方に走らずして政治の方へ走つて居たならば「パンを與へよ」然らざれば死を與へよ」叫んで革命の歌でも唱うたら何んとして導きが出来ましょう。現代の知者云ふ者は何も彼も社會組織の缺陷から来る者として、パンを與へるより外に手が無いとして居りますが、幸に此等の人は多く四國巡拜の方へ走つて居るのであります。巡禮者には階級もありません。貧富もありません。一切平等に巡禮しますが其處には又お接待云ふ何んも温か味の籠つたところが行はれて居ります。春の頃に成ります。三遍路が澤山でありますから、四國の人は云ふ迄もなく各國から集つて來てお接待をするのであります。米、麥、豆、餅、草鞋、漬物、紙、男女の理髪から人車、宿舍など、遍路の入り用のものは殆んどないものはないは、種々のものを施して居ります。而し貧富の別なく、遍路は「有難う御座います」云うて歩るく、見ず知らずのお互が弘法大師云ふ名に依りて結合せられて、遣る、有難う御座います。奈何にも温情の籠つたものであります。宗教現象としては實に世界に珍らしいと思はれます。が日本の學者などは何分西洋種でない。何程價值のあるものが足許にころがつて居りまして、夫

れを取り上げて研究するだけの餘裕はありません。四國巡禮云ふことは南海の四國に限つたことではなく今日では日本全國津々浦々に迄新四國云ふものがあつて、本四國に劣らず盛んなものであります。から全國的であります。是れ程の著明の現象も省る識者が無い。さすがは米國人であります。例のお札博士スタールは此の方面にも既に手を付けて日本全國を巡禮して歩くようであります。私は西洋風は好みませんが其の着眼の廣いことには常に感服させられるのであります。

日本の社會實狀には目を覆うて外國輸入品の社會問題を強いて日本の社會に押しつけようとするものであります。から日本の學文などが全く價值がないのであります。日本で現實に行はれて居る社會生活を一も二もなく價值のない間違ふたものとして、何んの意味をも看出ることが出来ずして借り物の文化運動など叫んだところで百害あつて一利ないのであります。學文としては多少の價值があるにしても民衆の生活を看すしては研究の價值はないのであります。

是れも弘法大師の遺風であります。が眞言宗の寺院には參籠云ふとがありまして、行き暮れた巡禮者などが自分の家へ歸つて來たような氣樂さで心の向くまゝに逗留して行くのであります。又た病人や氣保養などのためにもやることでもあります。が弘法大師を祭つてあるところは則ち自分の信仰する主人の家であるから親の家に歸つたようにくつろいで居る様子は何んも面白いものではありません。米國の文豪に「ローミ云ふ人がありまして神祕家風の人だ」と評せられて居りますが、此の人の書いたものに「宿屋の主人」云ふ文章があります。疲れた旅人が宿を求めてやつて來る。主人は親

類の者でも訪ねて来た云ふ調子で歓迎する。心からの歓迎でありますから旅人は此の宿へ来るに全く蘇かへつた云ふ氣持に成る云ふ風なことを書いてあつたと思ひますが、眞言宗の參籠が正に夫れだと思ふて愉快に感じたことがありました。

又た眞言宗のお寺は妙に山の中に構えて居るものが多うございますが、山岳佛教なきひやかされて居りますが一寸考へるに山の中に寺を構えたりして夫れが社會生活に何んの關係があるか云ふようなことでもあります。お説教するでなく、慈善事業するでなく、社會の剩りもの、ようであります。これが又た社會の裏面生活には非常に重大な役目をして居るものでありまして、社會の人々が心の中に苦しんで居ることを慰めるには多く此の山寺に集つて來るのでありますから、壇を構えての講演なきこそ致しません。が實に膝詰め談判で一身上の苦悶を救うて貰ひに來る。此れは私が會つて「堂守」云ふものを書いて置きました。が、山寺の堂守を完全に勤めるものは實に佛か菩薩であると思ふて居ります。而して是れも弘法大師の遺風であります。大師の遺風は特に宗派を超越して居りました。常に人間の實生活に直接の關係があるところに常に生きた意味があります。生命があります。大師の此のような遺風を數へて居りますれば果てしがありません。

サテ愈々最後の段になりました。が現今の日本に於きまして最も緊急を要すること、申します。日本國民の思想を統一して世界文化に劣らざる併し日本は日本獨特の文化を形も造らねばならぬのであります。が、此の目的の爲めには日本の宗教家(耶蘇教も入れて)が共同して立たねばならぬので

ありますが、夫れには第一に佛教の思想を先づ外國へ輸出して唯物主義の文明の火元を鎮火させることでもあります。是れは非常な大運動でありますから餘程果斷の處置を採らねばなりません。夫れで眞言宗が社會奉仕の一の實行方法として次のような案をこゝに提出しようと思つたのであります。勿論此の提案を私は實際の運動に移すか移さぬか、或は運動を始めるかも知れん、始めぬかも知れんが、兎も角くも提案しますること。

弘法大師の教は是れ迄も再々申しますように各宗に共通する教義であつて、各宗を綜合したものであるために。

又た弘法大師は事實上日本國民共同の崇拜の對象であるために。

又た現に各宗派の人でも弘法大師をお祭りして居る、而して其の風は次第に盛んに成りつゝあるために。

又た各宗派の祖師方にしても名ある善知識にしても、檀信徒にしても、自ら高野山に參拜するか或は遺骨なきを留めて居る事實のために。

又た弘法大師の外に日本には國民共同の崇拜の對象に成る人格者がないたために。

又た弘法大師の入定日である三月二十一日全國的にお祭り日に成つて居りますために、而して其の信徒は上下の別なく各階級に通じて居りますために。

日本の社會生活の上から、日本宗教統一の立場から弘法大師を中心とする云ふことは事實であり

まして何にも議論の餘地はないと信んずるのであります。而して弘法大師に對する信仰は自然高野山が中心地に成るのでありますから茲に於いて、

高野山を各宗に提供して共同のものにする。

是れであります。絶對無條件で提供して信仰なり學文なり運動なりの眞實の中心地とすることあります。弘法大師は事實上日本の宗教界の崇仰の主體でありながら單に眞言宗の開祖であること云ふために、殊更ら人格を曲げようとかゝる學者なきも決して少くないのであります。夫れも平凡な時代ならば何んとして宜しいが、今や世界から押し寄せ来る種々の思想は實に恐る可きものであります。世界を救うものは外にはありません。

斯かる提案を致しますのは又た外に目的があるのであります。社會を救済すること云ふ當面の目的だけではありません。夫れは西洋には西洋文明がありますが東洋文明は全く有りません。東洋に於いては支那の如き印度の如き昔は絢爛たる文明がありました。今日では自國の文明すらも持つて居らずして支那の如き只今では西洋文明を取り入れることに忙がしいばかりであります。獨り我が日本に於きましては日本固有の文明を持つて居るばかりでなく、東洋諸國の支那の文明も印度の文明も傳へて居ります。上に西洋の文明も悉く輸入されて居りまして宛然日本は世界思想の大展覽會を開いて居るようなものであります。一方から見ますと夫れが爲めに日本の思想界は實に混沌として大動搖を成して居るのであります。是れが又た日本人の包容性に富んだお蔭で世界人のあら

ゆる思想を同時に打ち眺めて居るごころに日本人の偉いごころを現はして居るものでもあります。日本人は偉大な新發明を成すごころは不得手であつて世界を驚かすようなごころも致しません。あらゆる文明を綜合して是れを融合させ渾然として一大統一のある新文明を造り上げるごころには、實に不思議な能力を持つて居る民族であります。而して私の考へでは東西の文明を融合して統一ある新文明を造つて行くものは眞言宗の阿字の思想でありまして、自然弘法大師の思想の下に東西の思想は皆な綜合せられるのであります。日本人は世界の文明に對して此の重大なる使命を帯びて居るものであります。斯様な提案をするのであります。而して此れが何よりの急務でありましてやがて社會的問題なきも此れから解決の道を見出すものと信じて居ります。

此の大事業は眞言宗の坊さん方には夫禮ながら剩りに荷物が重過ぎまして、五人や十人の學者が何んごころで何んの効果も擧るものではありません。日本の佛教界の華を集めて一心に努力して初めて成り立つこととあります。阿字の思想を眞言宗の坊さんたちの専有であるかの如く打ち捨て、省みん限り佛教全體として世界文明に何んの貢献をも成し得ざるものであるごころを斷言して憚らるのであります。其の第一歩として此の様な提案をするので、眞言宗の手から高野山を離すのは惜しい。其のようないごころで此の文明を奈何にするか。此の人類を奈何にするか。私は手を下して此の運動を起す勇氣はないかも知らんが、かゝる大膽な提案をする勇氣はあります。文明は行き詰つて

居りますから新文明の建設は此の運動の外はないのであります。勿論各宗の本山や坊さんたちに成るべき皆な下手ながら自負心を持つて居りまして、なか／＼承知せんかも知らんが、自分の宗派の事なごを第一に心配する坊さんたちを待つ必要は更らない。國民が直接此の運動を起したら可いのであります。斯くして印度の釋迦如來も均しく日本の弘法大師は最後の生存者として各宗の祖師として永久に新しき生命を發揮するのであります。此れは何にも各宗の祖師を何んぞせよと云ふのではありません。斯くして各宗の祖師は一分も其の徳を損する恐れはありません。又た殊さら弘法大師が偉いこと云ふことを申すようなケチな考からでもありません。若し現代に於いては私の申したように成らずにしましても、五十年百年後には屹度私の申したようにならねばならぬこと云ふことは豫言出来ると思ひます。何れも御参考迄に申し上げましたのであります。

祭 祀

—曜宿—方位—生活—

本日はお祭りこと云ふ實に妙な題目を選びました。忙しい今の世の中に悠暢なお祭りの話夫れに曜宿だの方位だのミ八卦見がするやうなとでありまして、此の頃では無駄な馬鹿騒ぎでもするミお祭り騒ぎをしてなき云はれるほきでありまして、全く時代錯誤であるかのようにあります。日本は正に

世界の一等國ではありませんか。五大強國ミ云ひ来りましたが英米ミ共に僅かに残つて三國しかなくなりまして、フランス、イタリーなきは早くも劣等の方に陥されました。日本國民は此の一等國民たるの名譽を維持するには最も忙しく努力せねばなりません。この世界競争のなかに在つて他國に打ち勝つて往かねばならぬ時代に當つてお祭りだの方位だのミもつての外のとであります。今日日本國民が文明の民として内容の豊かな生活をするには種々の方面に努力をせねばなりません。今日日本も急を要するのは科學の研究であります。日本では實に少數の學者の外は全く學術ミ云ふとを疎外して居りますから文明國人としての第一の資格に缺けて居ります。例へば獨逸人の如きは一般の國民の生活が全く科學的でありまして、朝起きるミ寝るまで科學の生活であります。先達も宗旨の雜誌に椎尾博士のお話が掲つて居りましたが、日本人も科學を研究して獨逸人のように發達した生活をせねばならぬこと云ふ趣意で例を上げられまして、獨逸では風呂に入るにも、あなたは何度のお湯がお好きですかと云つた調子で、日本人のように手で掻きまぜて熱い、ぬるいなきは云ふて居りません。湯殿には寒暖計が備へ付けてある。日本は科學が進まん爲めに幾干損をして居るか判らん。正宗が名刀を鍛へたが眞に正宗に科學的の頭があつたら、名刀を鍛へるには何度の湯加減が良いこと云ふて置けば名刀が幾干出来て居つたかも知らんが、科學の頭のないために正宗が死んで了へば名刀を造るものがなくなる。何程の損か知れんこと云ふ様な意味のとであります。是れも困つたものであります。西洋文明を研究するのも宜しいが日本文明の意味すら解つて居らんでも難儀であります。日本の文明

は科學から成り立つては居らんのでそこに又超越した價值があるのであります。正宗の名刀よりもよく切れる刀は科學の力で機械力で日に何本造ることは易いことでありませんが、正宗の造つた物が銘刀として眞に千古の價值を持つて居りますのは、何にも切れる切れんが標準ではない。正宗の人格が正宗の靈が一振一振の刀に生き／＼して居りますからでありまして、正宗の外に何人も眞似ることの出来ん匂ひがある。夫れが價值なのであります。何にも何度の湯加減や鍔の重りのためではありません。機械で出来るものは鋼鉄の目方ミ手間賃ミが價值でありまして是れは西洋文明の産物であります。日本の文明は一本／＼の刀にも人格が流れて行かうミ云ふのでありますから非常に違ふたものであります。今代の學者はこのような日本文明の意味すら解りかねて居りますので文化問題なご實は論ずる資格に缺けて居ります。夫れでも國から優待して行かねばならぬように成つて居りますが妙な國柄に成り果てたものであります。かくて日本文化は日々に亡び行くのであります。

兎も角斯んな風で間違ふて居つても何んでも構はん。科學ミさへ云へば喜ばれるので又た實際本統にやらねば生存の出来ん世の中で、非常に忙しい世の中でありますがお祭りなんて一體何んの役に立つのかミ非難せらるゝことでありまして、私が私世の中が忙しいことを充分心得て居る。夫れであるからこう祐暢らしいお祭りの話が殊更ら必要に成つて來るのであります。文化發達、その後から敵にでも追つかけられたように忙しく焦慮らすミ暫らく靜かに考へようではありませんか。

進化は皆んなが努めて計らねばなりません。進歩發達は自然の法則であつて天則であります。同時

に退歩廢頽是れも自然の法則であつて天則であります。奈何に偉きな樹木ミ雖も何千年も生きては居りません。やはり年限が來るミ朽ちて枯れます。迅く成熟するものは迅く凋みます。是れも天則であります。何にも早く進歩、疾く發達、早く／＼ミ急いで進歩發達して見たミころで進歩の頂上は退歩であります。早く進んだならば早く退歩致します。一體日本人ミしてお互ひは凡そ何百年位生存したら夫れで可いミ云ふ考へであります。日本民族の建國の理想は天孫の垂訓に依ります。天壤ミ共に窮りなしミありますから、三千年や一萬年で亡んで了うて可いミ云ふようなものではありません。天地の有らん限り常に榮えて往かねばなりませんから一步進んでは一步は踏み止まり、一步步々健實に歩いて往かねばならん。焦慮ることはない。進むのを知つて退くのを知らんでは下手な戰爭にもなりません。さしもに戦上手な太閤さんも小田原の城主北條氏を討つた時は、なか／＼思ふように行かなんだので、無理押しに攻めかゝつたならば秀吉も家康も却つて討たれて居つたかも知らんが、攻手を緩めて國許から皆なの者にも妻子を呼び迎えさせてお茶の會なごして遊ばれた。そうするミ今度は城の中から焦慮り出して來たので手もなく小田原の金城も落ちた。是れは攻めるよりはお茶の會に力があつたのであります。又た世の中が忙しいミ云ひまして秀吉の創業時代程忙しい人はありますまい。夫れが九州征伐に下向の折なごは丸で遊山氣分で宮島に參詣したり、壇の浦を訪れて「波の花散りにし跡のこみ問へば昔ながらにぬるゝ袖かななご詠みながら至極祐暢に出かけて居るこの餘祐が胸の中にあつてこそ天下も秀吉の手に歸したのであります。一步進んで一步退いて考へ

る云ふところに自ら價值があるのであります。科學の研究が進歩發達のために重要でありませれば、お祭りの事は後ろを省みて健實な道を歩むに缺ぐ可らざる重大事項であります。これなくして日本民族が天壤と共に榮えるなご云ふことは神變不思議よりも遙かに不思議であります。お祭りの如き祐暢なごみがなかつたら日本民族も久しからずして滅亡して了う夫れほごに重大な問題としてこゝには取扱う積りなのであります。

米國から日本に來られて長らく出雲地方で暮して居つて、其の後大學の教授なごして居られましたが終に日本で亡くなられた小泉八雲ラフカヂオ、ハーン先生ご云ひますご今日では實に世界的の大文豪として定評のある人でありませすが、八雲先生は最も眞摯に最も麗はしく日本の國狀を世界に紹介して呉れた日本の大恩人でありませすが、八雲ご云ふ名も出雲に居られて出雲民族なごを研究せられたごころから、例の「八雲立つ出雲八重垣」の歌の意から來て居るものご思はれますが、此の人の著作の中に「神國」ご云ふのがあります。讀んで見ますご我々日本人でありながら全く氣付かなだごを此の本から教えられるようなごころが澤山にあるのであります。日本にも歴史家は澤山にあります。が八雲先生のような深刻な觀察をして居る人はマア無いようであります。その神國の中に書いてあるのであります。がかねて出雲の神官はまばたきをせぬご云ふごころを聞いて居つたが、折からお祭りであつて神官は馬に跨つて居つたので先生は興味を以つて神官の目もごを注意して居つたが成程神官はまばたきをせぬごころが何にかの機みで馬がはね出したが馬上の神官はやはりまばたきを

せなだご云ふのであります。實に小さな事實のやうでありませして普通の歴史家ならば織田氏が興つたごころか、徳川氏が興つたごころか云ふごころが歴史上の大事件として取り扱はれて居りますが、神官がまばたきをせぬなご、云ふごころに何んの意味も解するごころが出來ませせん。然るに先生はこのまばたきをせぬご云ふ僅かな事件が武田氏が滅んだ、北條氏が興つたご云ふような歴史上の事件よりも遙かに重大な事件として、この事に非常な價值を看出して居るのであります。實にその慧眼には感服の外ありません。先生の意見に依りますれば日本國民族は三千年の訓練がある。ポライトせられて居る。磨きがかゝつて居る。人生れながらの疎野なる個人主義なご、は違つて三千年來の磨きがかけてある。其の磨きのかゝつた跟跡が神官のまばたきをせぬご云ふごころに現はれて居るのであるご見たのであります。斯く見ますれば代々の豪族の起き伏しそれは歴史の常でありませして實は何んの妙もない事件であります。が三千年來の日本民族の本質の歴史を物語つて居る神官の目がまばたきをせぬご云ふごころの方が遙かに深い意味を持つて居るのであります。實に徹底した觀察であるご思はれます。大和民族の文明は單に智識や腕力や機械の力で出來て居る東西の文明は全く違つたものであります。人格を磨き上げて三千年の歴史を書いて來たのであります。が現代は此の立派な國民性を次第／＼に壞して行くのであります。八雲先生も神國の終りに到つて、此の麗はしい國風も近代的の工業の發達ご云ふごころのために破られて行くのは如何にも惜しいものであるご歎息して居られます。近代は惡風潮が盛んであるご憤慨する人もありますが、知識階級資本家階級にも此れを導い

た全責任を負はねばならぬのでありますから餘程注意す可きこと、思ひます。

私も先生の警告を見た時は昔の事でありませんが其の當時は工業の發達が日本民族性を破ることはさう云ふものか合點が行かなんだのであります。

尤も其の當時は日本も左まで工業も發達して居らなからでもありますが、工業の最も發達した現今に成つて初めて解りました。成程古くから労働爭議の喧しい米國あたりで育つた人だけに八雲氏の豫言は今まは眼の前に現はれて來ました。

斯くの如く日本民族は磨きをかけて仕上げて居るのでありますから、お祭りの氣分はあまへ戻る力が日本民族を天地に窮りなく榮えしめるのでありますから、お祭りのこころは非常に重大なる實際的な民族繁榮の方法なのであります。眞言宗の第一に大切なお経は大日經一部七卷であります。前の一巻は理論でありまして後の六巻が早く申すお祭りの事柄でありまして何れか申すお祭りの方が主要なのでありますから、やはり其のお経の法に依りましておしまいはお祭りに往かねばなりません。

お祭りは一口に申しますと人神の交歡であります。これには種々に分けて見るこころが出來ます。

第一は皇室を中心として國家のお祭り、三大節や國定の大祭日でありまして、皇祖皇宗に對し、四海靜謐、五穀豐饒、萬民快樂を祝し奉るなごの儀式であります。私は昨年秋東京へ参りましたが、恰度神

嘗祭に當つて居ましたので大分に國旗が樹つて居ました。併し大分に樹つて居りませなんだ。以前から見るに國旗の数が餘程少ないやうであります。田舎なれば兎も角くお膝許に居住する光榮を有つて居る住民は心す可きこと、思ひます。何故ならば國の祭日に國旗を出して居らんのは外から見ますれば直ちに國民の忠誠に疑ひを懷かれても仕方があります。而して國民に忠誠が弱くなつたら國民の行く末は何んぞ成るのであります。是の外に宮中のお祭りや歌會などは今は數へますまい。

第二は國民的のお祭り、五節句、盂蘭盆、涅槃會、誕生會など。是れは支那傳來のものや印度傳來のもので國家としては何んの關係もないのであります。國民が一般に行ふものであります。實に國民の信仰なり理想なりを表徴するものであります。然るに近時は曆が種々に成りましてお正月のお祭りも新曆、舊曆、夫れに一ヶ月遅れの二月一日がお正月と云ふ風で減茶くであります。國民のお祭りならばお盆には日本全國津々浦々一整に精靈祭りをして、太鼓を敲いて踊つて居ること、國民としての統一ある信仰なり理想なりが現實に表徴せられるのであります。今日では全く統一がないから國民的のこころの付くお祭りがなく成つたやうであります。随つて國民の理想が破れ信仰が破れて了うて今では日本の歴史の書き方も根底から書き替えねばならぬと云ふ風に成つて來ました。西洋風に日本の歴史を書き替えます。例へば英國の歴史であります。是れは國王と人民との對抗でありまして終に人民が皇室に打ち勝つて民主的の英國が出來たと云ふことを書くのであります。アン

グロ、サクソン民族が獨逸の森林からやつて来て舊民族を放逐してイングランドを領有したのが今日の英國民であります。處が時の經つに隨つて國王が專斷なことをやつて人民を虐けるので、人民は怒つて倫敦を遁け出す。遁けられては困るので人民に約束を與へて歸つて貰ふ。又た約束を違へる。又た遁け出す。又たさらに確かな進んだ約束を與へて歸つて貰う。又た約束を違へる。又た怒る。云ふ風にしてあの大憲章を國民が握るに到つて今日の英國の憲法政治が出来上つたものである。云ふ風なものであります。日本の歴史を斯のよな見方で書いたらざるのやうなものに成りましよう。是れまでの忠臣が悪人で不忠臣が善人に書き替えられる勘定であります。國民の理想が破れ、國民の信仰が破れたならばこんな風に歴史を書き替えるよなことに成つても仕方がありません。

日本では佛教が理想でありますから父を殺し母を殺し國王を殺し阿羅漢を殺し佛身より血を出すものを五逆罪として最大の罪惡とし墮獄の因縁として居りますので、日本の歴史も此の理想に依つて書かれてあります。隨つて國民の生活にしましても皇室を中心として國民が是れを擁護する。其の擁護する頭目が源氏となり平氏となり織田徳川となりまして一條の繩に縋ひ出されたる愛國忠臣の彩りが歴史に現はれて來るのであります。日本の歴史は大忠臣でなければ書けぬ等でありませんが、忠誠にひひの這入つた學者なきに書かしたならば何に書き出すか知れたものでありません。民族の理想と信仰の表現であり民族性を陶冶する國民のお祭りのなくなつたことは曆の種々に成つたため仕方もありませんが、特に學校なきでは困つたものであります。中學校の修身科なきでは

文章の上では精神の修養と、か、舉國一致と、か、友愛、禮儀、作法なき、項目は一通り漏れなく備はつて居るのであります。夫れはほんのお申し分けのお話しに終るのであります。夫れ等の項目を實際に當つて修得する唯一の機會であるお祭りが認められて居らるのであります。習ひようもありません。假令へば盂蘭盆であります。一族が相寄つて一家團樂で祖先の魂祭りをする。改めて禮儀作法に依つてお互に友愛の情も此の時に新しき感じで交換される。然るに今日のようにでは東京では七月に盆を行ふて居るから此の方では知らず居る。此の方のお盆に中元でも送る。何んの爲めに送つて來たのか感じない。兒供等は學校がある。兄弟は會社がお休みにならん。魂祭りをして見た。ところで参り人がない。

正月も節句も皆な其の通り減茶苦茶であります。からたゞ形だけやつて居つた。ところで全く仕方がありません。私も近年は年禮に廻る。こも止めました。往つて見た。こもない處でお芽出度も掙りが悪いのであります。夫れで學校の修身科なきは全く無用に屬して居るので實に憐れなものです。先達でも大阪の中等學校の校長方が修身科教授の研究會をやつた。其の記事が新聞に出て居ましたが、教科書を用ひる。こか用ひん。こか採點はすべきものでない。こか採用をして居る。こか教材を何のよに取り扱ふ。こか全く哀れな有様であります。氷を隠して涼しさを語つたり、砂糖をなくして甘さを教へたりしても駄目であります。國民のお祭りの機會をなくしてからは修養も禮儀も社交もありません。が修養書を書く人に既に此の理解がないのではなからうか。思はれる節もある。

のであります。國民のお祭りは何んぞか考へねばなりません。

次は部落のお祭りでも申しますか、鎮守のお祭り、土地の観音様不動様のお祭りなきで、其の大きなものになる。讃岐の金びら様京の祇園様云つたようなものであります。部落のお祭りは愛郷心を強めるに何よりも力強いものであります。田舎は淋しい、都は賑かで面白い、で皆んなが都へ集つて来たたら田園は何んぞなります。現に都へ、は近代の風向でありまして、都は次第に賑はしくはなりますが田園は其れだけ荒れて行くのであります。而して都會は生活難が甚しく成つて事が面倒に成つて行くがまだ、日本なさは不便な淋しい田舎で不味ひものを食ふて苦しい労働にも堪えて居る中でありますが、此れは愛郷心が強いからであります。而して愛郷心はお祭りが最も力強く奨励するのであります。此の愛郷心が國に對しては愛國心となり敵に對しては敵愾心と成つて國の禦りとなるのであります。而して又た社會の平和を愛する心も成るのであります。尤も此の頃は愛國心、大和魂なき申します。直ぐに好戰國民として外國から睨まれる云ふので滅多に大きな聲で愛國心なき呼ばれぬ時代でありまして、世界主義、人道主義、平和々々で行かねばならぬのであります。外國人は宣傳が上手でありますから世界主義、人道主義、喧しく叫んで然る可く非人道主義も押し通せるのであります。日本の識者と言はるゝ人は今は世界の稱讃を得ることにのみ腐心して居りますので、夫れならば勇氣、愛國心、大和魂なきを亡くしたならば世界は大喝采であります。東洋の場面も西洋人の跳るがまゝに委せて置きますれば尙ほさら大喝采であります。而して日本國家が露國の

ように瓦解しますれば夫れこそ世界主義、人道主義の實現として世界の救世主の如く喝采が得らるゝこと、思ひます。私が小僧の時坊さんが剩りに評判が悪いので成る可く法衣や袈裟を押し隠して書生さんに見えたら喜んだものであります。此の頃は軍人が刀を袋に収めました。軍人が勤めに通ふ途中で軍縮々々冷笑されるので成る可く軍服は途中では着ぬように成つた。か新聞に出て居ましたが、私たちと同じ經驗をして居るのかと思ふて悲惨なことに思ひます。夫れほごに今は愛國心や大和魂が評判が悪いのであります。此れは世界に對する宣傳であつて米國流に人道主義の宣傳であると思ひます。又た意味のないこともありませんが知らんものは宣傳にかゝりません。而して其の結果は恐ろしいものにならんとも限りません。

次は家族のお祭りでありまして主として祖先を弔ふのであります。近頃は法事葬式が坊さんの専務のようであります。世間では何にか坊主が始めたこと、無駄事のように嗤うのであります。一體法事葬式なきは佛教から始まつたものではありません。祖先をお祭りすることは日本の國民性でありまして、天照皇太神の昔から皇祖皇宗の御靈代を御座所から離されず、事毎に皇祖に申上げて居らるゝ位であります。自然此れが風を成して祖先祭りは國民の生活に缺く可らざること、成つて居るのであります。夫れが偶々佛教の儀式で執り行はるゝものであります。坊さんが可い加減な事を云ふて勤めて行はせて居るかのように悪しざまに云ふのであります。早く申します。多くのお寺なるものは説法するためでもなく、地藏様觀音様をお祀りするためでもなく、人々が自分達の

祖先を祀る爲めに共同して建て、居るのでサテ祖先をお祀りするに就いて何にか本尊様を云ふので地藏様や阿彌陀様を安置しかねてお説教をも聞かう云ふのでありまして、何れにしても根本は國民の祖先崇拜の要求に促されて出来て居るものであります。尤も一般に寺院の目的を申しますと又た違ふたものである可きであります。今日では寺院の他の目的なきは多くは忘れられて居ります。夫れに祖先崇拜を坊さんの偽り事であるように思ふて此れを疎略にするなきは國民性の破滅であります。

或る時私の知人が恰度法事でお寺参りから歸つて来て私に申しますには、一體坊さんも心ない。何にか解らんこを長々云ふて居るが言ふ人は夫れでも宜しからうが後ろで靜かに聞いて居らねばならぬ身に成つて見たらさうです。時勢は非常に忙しいから何んか工風して貰ひたい云ふのであります。私も尤もこ想はれますので別にお答はしませんが、凡そ祖先の魂祭りして今ま祖先——神人に對して居りますれば最も敬虔の念に充ち、

祖先から自分達が享けて居る恩徳の程を思ひ、

自分は祖先に對して恥する行爲を爲しては居らんか。

自分の業務に眞摯に勤めて居るか。

を深く反省するに絶好の機會であります。かく反省する時自ら自己の人格は洗練せられ、向上し人事俗事に超越して祖先の靈と自分の靈とが相ひ接觸する瞬間でありますから、坊さんが何にをして居

るかを氣にしたりする違はない筈であります。坊さんのお經の長い短いを考へて居ることは祖先の靈を見ずして坊さんを見て居る。成程是れでは無意味であります。幾ら忙しい云ひましても一年に一回か三年に二回の法事であります。而も自己を反省して人格を向上させよう云ふ大切な時間であるにも係はらず其の間も忙しい、其のように周章て居ては眞に近代の忙しい競争場裡に立つこゝが出来ましようか。自己の一身の浮沈に關するこゝであります。現代の人は何にも彼もお金で勘定が出来るように思ふて居るが其のお金ですら其のように忙しい人の方へは向いて来るものではありません。神人との交渉に慣れて嚴肅な氣分でお祭りをする心持で居りますれば奈何なる不運に出遭ひましても貧乏搖ぎもせん筈であります。お祭りは古來の習慣云ふばかりではありません。實に國民生活の根本に成る重大事件であります。

次は宗教的のお祭りであります。是れは宗旨の祖師方や本尊様のお祭りでありまして現世未來のお約束を新たにし、報恩謝徳の實を運び又た家内安全、五穀豊熟を祈るのでありまして、斯う云ふ風なお祭りは未來の近づいた爺さん婆さんの仕事で若い者には要事がないように成つて居ります。併し佛教の法會云ひます。是れは大變に意味の深いものでありまして決して老人を相手云ふような生やさしいものではありません。

普通説教や講演なきは假りに云ひます。小説の如きもので、小説では許婚の男女があつて女は虛榮心に囚はれて、ダイヤモンドの爲めに目が眩んで未來の夫を捨てた。女は虛榮の夢が破れたが眞の

愛を亡ふて居つた云ふような風に事を延べ書きにして理を盡せば宜いのでありますが、眞言宗の法會は是れに對する芝居のようなもので平面に對する立體であります。藝術の中では芝居は綜合藝術でありまして、音樂、詩、繪畫なごの要素が皆な此の中に綜合せられまして、立派な建築物が要る、書き割りが要る。大道具、小道具、其れに音樂に合はせて韻律に協うた言葉を以つて身振りを整へねばなりません。法會は正に夫れでありまして、佛の阿字の生活を宛然らに望見するのであります。法會には立派な建物、表徴的な佛器佛具、夫れに韻律に協うた音調は音樂と相應して佛徳を讃し、佛心と我が心と融合して超越的な眞諦の生活が漂うて居るところが法會でありますから、一目瞭然、佛の理想が解るのであります。夫れで法會に參會することをお經には一見曼茶の位と申しまして佛道に於いては既に初位に入つたものとせらるゝのであります。初位と申しますと佛道には位階なご元來ある筈はありませんが、假りに凡夫から佛に成る階級を計つて見るに六階級に成つて居るにせらるゝのであります。六階級は既に凡夫ではないので佛の位地に入つて居るのであります。夫れが此の一見曼茶の位、法會を拜見すること云ふところに初まつて居るのであります。説教やお經の延べ書きなごで味つたところを一目瞭然で男女老若智愚が同時に同様に利益を得られるのであります。是れが佛の慈悲に依ること云ふのであります。して見ますれば法會こそ大切なもので知識顔して法會に參見せんがきは固より佛の生活を味うだけの資格のない憐れな人たちであります。

法會を拜見して一見曼茶の初位に入るものでありますから、自分は既に佛の境涯に一日でも生活

した而して菩提心が一分づゝ發揮した云ふ氣分に成りますれば實に愉快な人生生活の發展でありませんか。併し此れは自然法會を執り行ふ人の心持に關係するのであります。僧侶が自分で其の高潮に達する要意の大切なることは申すまでもありません。和辻學士の「偶像の再興」云ふ書物がありますが、其の最後の章に法會のことが書いてあります。可なり克く一般佛敎の法會の良が描かれて居ります。矢張日本にも篤實な透明な頭を持つた人もあると思ふて感心して居ります。

お祭りの話は此れ位で置きまして少し横道に成るようではあります。當然次いで出て來ねばならぬことは神道のことであります。而して神道と眞言宗との關係であります。神道も眞言宗も或る意味から申しますとお祭りを除いたら跡には何んにも残らんかも知れません。神道では神は八百萬の神々——無數の神々があります。眞言宗にも曼茶羅の佛菩薩は無數であります。而して神々佛菩薩のお祭りを本義とするものであるところから弘法大師以來佛様と神様が全く同じものに成つたのであります。

夫れで御承知の通り眞言宗の曼茶羅の諸尊は随分妙な良をして居られます。是れは印度に發生した宗旨でありますからであります。若し日本に眞言宗が發生したのであつたならば日本の神々の良で曼茶羅の諸尊が描かれたこと、思ひます。神様も佛様も生きて居られる。生きて居られるから其の活躍は無限であります。然るに其れ等のお良を現はすに成るに無限の活躍の中の最も價値のある

瞬間のお良を現はすここに成りますから、何れの神様佛様のお良でも夫れはほんの輪廓を現はしたものでありまして其のお良に囚はれて何の神様は斯の良でなければならぬ、何んの佛様は斯の良でなければならぬなご云ふことは要らぬ詮議であります。私は昨日寫眞に映りましたが映つて居る私の良は映すときに構えた瞬間の良でありまして私は何時も其のような良をして居るものご解せられては困ります。大村ご云ふ密教を研究する人がありますが何にかご云ふご歴史的に何か儀軌に合はんごか云ひますがやはり輪廓に囚えられた素人論でありまして全く價値のないことであります。不動様は何時も右手に劍を持つて居られては困るごが出来ましょう。索を使う時には劍を捨て、からでなければ人を縛る譯には行かんであります。これも最高の理想を表徴したものであります。て輪廓に過ぎません。其のような譯で曼荼羅の諸尊が神様で描かれて居りましても別に不思議はないのであります。其れから兩部神道ご云ふやうなものも出來た譯でありまして、今の人たちは眞言の寺ご神様ご何んの関係があるか解らん程に縁遠く成つて居りますが、或る眞言宗の神道學者が問を起して眞言宗は佛が表か神が裏かご尋ねまして勿論神が表であるご答へて居るのであります。是れは少し言ひ過ぎの嫌ひはありますが決して無茶なごを申したのでありません。そう云へば云へぬごごはないのであります。少くごも眞言宗は佛が表で神が裏であるご云ふごごは維新前までの眞言宗の風でありました。夫れでお宮があればお寺がある。お寺は眞言宗でありました。尤も中にはお宮の寺に天台宗もありましたが天台宗に傳へて居る眞言の法でお宮をお祭りして居つたのでやは眞り

言宗ご云ふても宜しい。維新前までは日本全國に宮寺ご云ふものが幾千あつたか知れませんが、然るに徳川氏の末頃から本居宜長や平田篤胤ご云ふような古神道學者が出て来て神ご佛ごを一つに扱うのは眞言坊主の胡麻化して神ながらの道は高天原以來の古日本の神髓であるご云ふやうなごごから、維新の大變動に乗じて神佛引き分けご云ふごごに成りました。夫れからはお互ひが非常に縁遠く成つて今では神佛の長らくの關係のあつたごごすら忘れられて居ります。神佛引き分けも尤な話であります。其の人ごても馬鹿ばかりでもない、兩部神道にも相當な理由があるのであります。今は委しくお話しをする時間がありません。神佛引き分けで何れに利益があつたか、眞言宗の方ではつまり何んの損もして居らんご云ふだけは明かであります。ごもかく神佛の深い關係のあつたごごは宮寺や出雲の大社、伊勢の大廟は別であります。安藝の宮島、讃岐の金びら様のお宮の造りを見たならば直ぐに分る通り全く眞言宗の風であります。たゞ神道學者にごつて最も困るごごは兩部神道の流義でないごご神道だけでは解らんごごが多いご云ふごごであります。夫れで今でも神道の學者で篤學な人はやはり兩部神道の方から神道を研究して居るのであります。長い間眞言宗のものが神様を表ごとして擁護して居たごごは何れにしても非常な効績であります。一例を上げて申しますごご神道の唯一の經典ごも云ふ町き古事記日本紀なごごには實に妙なごごが澤山にあるのであります。此のような文章は何んごご解するごごが出来ましょう。古事記にあるのであります。例の須佐之男命が亂暴で天照太神もお困りに成つて天の岩戸にお隠れに成つたのを神々が種々にお慰め申してお出ましに

あります。例令へば日曜日に生れた人は容良が美はしく才智があつて氣品が高い。火曜日に生れた人は色が黒くて氣が短い水曜日に生れたものは色が蒼くて病氣が多い。云ふ曜自然の不思議な作用があつて其の精を享くるこゝを見るのであります。

宿ミ云ひます。二十八宿でありまして七曜ミ同じく天文學上から出たこゝでありまして天文の星座を二十八宿に分けて其の星座ミ人生ミが直接に關係のあるこゝを示すのであります。二十八宿の中牛宿ミ云ふのを除きまして二十七宿是れを一ヶ月に配當して宿の運行に隨つて吉凶禍福なミの分れる次第を見て行くのであります。例令へば今日は鬼宿であるから長久なこゝを始めるに適當して居る。抑宿であるから敵を攻め城を攻めるに可い。云ふようなこゝを知るのであります。

次に方位ミは申す迄もなく東西南北東南西北なミの方位でありまして二十八宿七曜なミ、同じく天文地理の學文に必要なこゝでありまして不思議なミはありませんが、此の方位にも神祕なる關係がありまして此れは阿字界のかねての豫定であります。世間では此れを迷信ミ呼ぶのであります。一般佛敎の方から申しまして例のお通路の笠の上には必ず書いて居りますが、本來無東西何處有南北。迷故三界城。悟故十方空。ミありまして一切空なり。云ふ悟りを持つて居る人には本來東西なしでも宜しう御座います。が、日常に生活をする而して阿字界に生活をする。宇宙の天體ミ相應した生活をするにはやはり無東西では行きませぬ。例令へば種を蒔くにしても東南の方は陽氣で日あたりが可いから種が克く芽ばへますが、西北の方になります。ミ陰氣でありますから種は芽を出しません。

日の出る陽氣に面して家を建てる。ミ健康に宜しいが、日のあたらぬ陰氣に面して室を造りますれば健康に宜しくない。方位にも自ら神祕の力があつて日常我々を支配して居るではありませんか。阿字の生活をするものは此の力を無視する譯には往かんであります。假りに日本だけで申します。春夏秋冬の四季は少しも間違ひなく循環して居りますが此の四季は譯なく起つて来るものではあります。宇宙全體が相關聯して地上に四季をあらしめるのであります。而して春は草木を芽ばえさせて人を陽氣に致します。

夏は草木が茂つて人は勇壯の氣に満ちて男性的であります。秋は萬物が黄ばんで人は嚴肅な氣分に満ち何にも彼も悲哀の色を帯びて居ります。冬に成る。草木も葉を落し人は靜寂ミして沈黙に耽つて来る。四季の運行のために人も草木も萬象は悉く其の威力の支配を受けて居ります。四時の運行に對して更らに反逆を許されませぬ。第一此の地上に空氣あり水氣あり暖温あるは宇宙天體の總關係に依つたものでありまして、現實の天體の外にも一つ大きな星があるか今ある星が一つ缺けて居るかしたら此の水氣も暖温も餘程違ふたものに成つて居るこゝは間違ひのない事實であります。而して水氣なり温度なりが少しでも違ふて居たら今の地上にある萬象別して人類なミは栖息せなんだであります。我々の生活はやがて宇宙全體の均衡から成り立つて居つて、其れが偶然でなく皆な阿字界のかねての意匠から成り立つて居るのであります。其の意匠のまゝに春は浮き秋は沈み、我々の一喜一憂は天體全體ミ一致して動いて居るのであります。四季の運行ミ我々の變遷

ミが密接に關係して居るように一月一週一日一瞬間が何んで宇宙の運行ミ關係なしに孤立して休息するミが出来ましよう。我々は獨り淋しく世の中に生れ出て居るものではありません。宇宙の兒であります。阿字界の兒であります。私の動かす一投手一舉足は天地宇宙に關係して行くのでありますから。我々の生活は波の上に浮いた頼りない泡の一片ではありません。阿字界の意匠に生活をして居るのでありますから。我々の生活ミ七曜二十八宿、東西南北なミの無限の偉きなものが皆な直接に關係を有つて居るので、阿字界の生活佛の生活、宇宙の法則ミ一致して生活しようミ云ふので、曜宿方位を迷信ミ考へたり無用のものミ思ふたりするのは餘りに此の地上の眞理、科學の教へる眞理に暗ら過ぎるからであります。

夫れで日月火水なり二十八宿なりは假りに當てはめるための名ではありません。

天體の星の名でありまして山ミも川ミも名けません。名だけの用事ならば山川草木の名の方が早解りがして何にも縁遠い星の名なミ用ゆる筈はありません。

斯の宇宙の一大意匠を認めて、宇宙の大に生る。阿字界の意匠に生活する。斯れが眞言宗の阿字の生活であります。實相の生活ミも申します。即身成佛ミは此のこミであります。夫れで始めにも申したように現代の科學が進歩發達すればする程眞言の祕密は次第に開かれて明かるみに出て居るのでありますから、此れを祕密が莊嚴せられるのであるミ云ふて科學の發達を喜ぶ事に成るのであります。以上であらう、眞言宗ミ人生々活の大體をお話したのであります。人生々活に間に合はぬこミ

を申上る考は少しもなかつたのであります。自然種々の問題を次から、連發したような傾きもありません。是れは皆様の研究のための暗示を與へるミ云ふ下心からであります。暗示を受けるミ云ふこミは非常に價值のあるこミなのであります。日本の科學者なミは暗示位では何んの應へもありません。随つて六な發見も出來そうな筈はありません。私は眞言宗の阿字の生活で科學者に暗示を與へる。而して科學者が研究して大發明をする。夫れが眞言祕密を開いて莊嚴して行く。斯うなくてはならぬものミ信じて居ります。(大正十一年八月岡山縣井原町にて五日間講演)

第十 檢討章

(自明治三十八年頃
至大正七年頃)

白雲に與ふる書

白雲兄足下、僕近時の所感を記して足下に問ふところあり。冀くば一瞥の勞に吝なる勿れ。現時眞言宗に籍を有するものは、舊分離派に参加するか、舊畫一派に左袒するか、本山黨たるか、地方黨たるか、而して常に宗務に與らざれば、有志家にあらず。僧侶らしからず、少くとも有用の材にして遇せられざるなり。されど有志家たること又容易にあらず。高き名望を有し、豊富なる収入を擁し、國內會議、副管理、學頭、派會、宗會なきの戰場を駆け廻り、切り靡けたる老功の士ならざる可らず。而して全国各地に於ける眞言宗の分布の状況、大勢に同じ、各寺院の財政、各有力家の勢力範圍を暗らんじ、且つ各本山の實力、意向、各末派の輿論、就去には、最も精細なる注意を拂はざる可らず。

白雲兄足下、僕は何の名聲なく、妙の富なく、かの有志家たるべき第一の資格を缺如するものなれば、彼等有志家の眼よりすれば、殆んど宗内に生存せることすら認められざる哀れの兒なり。されど僕又凡夫なり。彼等有志家が、宗家の輿望を負ひ、肥馬輕車を馳せ、意氣揚々、喝采場裡に相往來するを展望して、心中竊かに羨怨に堪えざるなり。僕が畏友某某は、現に宗の檜舞臺に立ち、龍驤虎步、威名の赫耀たる

ものあり、僕宵夜薄福を恨みて涙滂沱たり。

白雲兄足下、彼等有志家が、今意氣軒昂、頗邊に微笑を洩らしつゝ、あるは、抑も何件を成し遂げたるが爲なるか、本山黨捷ちたるか、地方黨成功したるか、問題は、何なりしか、教育か、布教か、將た政權分配か、兩黨が鏑を削りて争闘するところ、勿論政權の分配なりき、さればかの有志家の胸中に往來しつゝ、ある題目も、必ず政權にあらざるなきか、僕は政權なる文字は國家にのみ限られ、法皇には寧ろ政權なる字面を充つるに適當なる場合を見出すこと、尠かりき、近時政治思想の普及は、宗教界にもこの字面の必須となりしは、洵に驚異を禁じ克はざるなり。

白雲兄足下、吾宗は政權の外、眞に宗の生命に關繫し、社會民人の安危に迫る如き、重大事件の潜在するものなきか、彼等有志家は、荐りに權利を叫び、義務を喚き、寢食を忘れてかの政權なるものを珍重し、政權の移動は、直ちに宗運の消長を意味するかの如く、思惟し、拮抗をさし、怠らざるなり、されど一度政權なるものゝ内容に觀至らば、僕は啞然たらざるを得ざるなり、試に本山なるものを見よ、宗費賦課に住職進退、僧階昇補、賞罰、職員の任免、而して布教師差遣の如き事を、依托せられたる(保有するにあらず)一の團體に過ぎざるなり、又試に末派なるものを見よ、寺塔を維持し、本尊を奉侍し、信徒の祭祀を司るものゝ止住するところ、而して兩者の接觸點は、宗費を納むるに、之を歛むるにありて、争闘はたゞ之の間に發生するなり、宗費賦課のこまなくんば、本山は末派の困厄なる制肘を卻くるに躊躇せざるべく、僧階住職進退のこまなくんば、末派は本山の威抑を恐れざるなり、斯くて末派は宗費を抱

いて本山に迫り、本山は宗制を擬して末派を脅かさん、而して教育の如き布教の如き、要するに政治的暗闘の裡より操る給に、伴れて、跳り狂へる木偶のみ、或ものは各自黨の優勢を矜るべき、標旗の如く考へるなり、學校が如何なる教育を施し、如何なる人物を作りつゝ、あるか、布教師が如何なる宗意安心を説きつゝ、あるか、固より問題外に授けられたるなり、かゝれば、有志家は眞言宗の爲に働きつゝ、あり、主張するも、僕を以て見れば、たゞ羅生門頭に綱を縛り、隻腕を争ふものに過ぎざるなり、僕不敏なり、雖も、かの百老家が、かの宗の形骸を以て、宗の生命なり、と思ひ、謬れり、こは、誣ひざるなり、是は八祖傳來の不二法門の形骸なり、鎮護國家の骸形なり、萬人快樂の骸形なり、有志家は、この形骸に肝を熬るの餘り、形骸なることを忘れて、宗の生命、其ものなるかの如く、思做すに至りたるなり、容姿の端嚴なるを冀ふて、命を捧ぐる婦女は、又この有志家の一類なり。

白雲兄足下、西哲の語に、競争は進歩の基なり、と、されば、この形骸の争奪も、吾宗が發達するに避く可らざる徑路なり、とするか、僕考ふるに、智光戒賢の二論師ありて、有空の評を爲せるは、佛教々義の發達の原始的動機なりしなり、又ノミナリズム、ゴリアリズムの争端は、クリスト教義の發達史の初頁を飾るものなり、權實の争ひ、顯密を争ふて、奈良朝平安朝の佛教は盛なりき、本地身加持身を争ふて、南山學風頻りに揚れりき、蓋し斯等の争論は、熱烈なる宗教的信念の發動にして、爲に汚れたるは、洗滌され、眠れるは、醒され、自覺し、反省し、茲に初めて宗教の活力は復活し來る、かの形骸の如き、たゞ其餘波を受けて、膨脹増大するのみ、假し夫れ、俗權の争奪に至りては、重き病患に罹かれるものゝ、懊惱せるが如きか、苦

痛に堪えずして、瞬間の輕安を得んが爲めに、空しく悲鳴大きくして、展覧悶亂するなり。終に死期を疾めずんば止まざるなり。されど俗悪なる政權争はざる可らざれば争ふを妨げざるなり。争の激甚なる了に恐るべき弊風を煽焙し、宗内は冷然として政争の人となれり。視よ如何なる僻陬の山僧も、荒涼たる村僧も、本山黨地方黨の孰れかに與みし、時務の適否を論じて火花を散らさざるなし。乳臭未だ唇頭を去らざる青僧すら、本山が如何、地方が如何、當局が如何を説いて得々たり、而して蘆の枯葉も松の落葉も、一票の選舉權を撃けて上長を調戲ひ、有力の士は其前に低頭するを恥せざるなり。斯くして培かはれたる結果如何、その部下の暴悖なる横論縱説、傍若無人なる放恣の鬱起之なり。投票權なるものは、猿をして自由に舞はしむるに重寶なる鎖の如きものなるを知らしめたること之なり。實に流石の兩派の有志家も、この鎖の曳くがまゝに舞ひつ跳りつ飛びつゝあるなり。一たび鎖を断たれんか、直ちに舞臺より引退かざる可らざれば、最も柔順に鎖を曳く手の加減に留意せざる可らず。されば有志家の首なるものは、自己が馴致せるこの弊習に駭きたるも、すでに及ばず。宗の事業、少くも自己の理想の事業を阻害するものは、自己の兒飼ひの猫なるを知るも、最早や集收すべからざる悲境に陥れるなり。たゞ末流に至りては、親の心兒知らず、首領等の意向をすら揣摩し得ずして、漫りに雲を叫び風を起し波を跳らしめて、凱歌を奏せり。放恣なる哺育を與へたる兒女の淫蕩なるに苦慮して、發狂し自殺したるは、單り愚婦の蒔ける笑草にあらざるなり。渾てかく政争に熱中する間に、宗家の生命は全く忘却せられたるなり。昔は我が行くところ、何處なりやを搜ね歩るける呆痴漢ありき。今は我が生命

の那邊に在りやを探がすことすら忘れたる有志家あるにあらずや。

白雲兄足下、僕はかくても吾宗の一員たらんを希ふものなり。されど僕もかの政争の渦中に及びて、兩派の孰れかに與し、断えず湧き出づる新しき問題、昔も争ひ今も争ひ未來にも争ひ、争ふて遂に究極するを知らざる古き問題を翳して、努めざる可らざるか。僕が立つべき瀬は他に見出し克はざるか。僕はかの有志家の履き古にしたる草鞋を脊負ひ、かの形骸の改造變革に浮身を窺す能はざるなり。僕は吾宗の生命の爲には、形骸の如何なるかを更らに憂へざるなり。されど茲に、頗る遺憾に堪えざるものあり。有志家と同じく、僕は宗の生命が何處にありて、如何なるものなるかに暗きこと之なり。洵に僕知らず、有志家知らず、學者知らず、世人固より知らず、悉てが知らず、在りや無しやすらも知られざる、宗の生命なるものに憧憬すること、迂遠にして世間見ずの企畫なり。舌切り雀を探して奥山深く分け入りたる、老人にも見紛がへらるべきか。されど宗の生命は吾人の生命なり。自己の生命の所在を知らずして平然たるは理外の傑物なるか。小膽なる僕の如き、是を不念の閑事業として見道す能はざるなり。白雲兄足下、炯々たる足下の俊眸を勞するまでもなく、近時社會の進歩は驚嘆の外なきなり。最も時流に遅れたりし宗教界の中に就ても、眞宗の如き淨土宗の如き疑々として昂進し、優に廿世紀の宗教として、天下に呼號し得るの盛運に向へり。

吾宗が政治的思想に富みたるを矜るべき、彼宗は宗教的思想の普及を矜り、却つて政治的思想には疎遠なるが如し。少くも、舉宗政争を後にして宗の生命を索め、之を活躍せしむるこそが、焦眉の急務

なるこゝを自覺せり。吾人が彼宗に遅れざるが爲に、第一着に宗の生命の所在を明かにし、之を復活し鼓吹し、かの當世風なる形骸なる偏狭なる政治的思潮を防がざる可らず。愆くて宗に生命あらしめざる可らず。

白雪兄足下、僕不敬なり。宗の生命が何處にありて、如何なるものなるかを知らず。されど設し強ひて問ふものあらば、假りに其所在の方向を指示し得るものなり。謂ふを憚らざるなり。乞ふ試に語らんか。吾宗は古來、法將星の如く名僧眞砂の如く出で、研鑽至らざるなきも、多くは訓詁注釋にして異說傍義の繁き、寔に煩瑣に耐えざるなり。或は玉石混交して、寧ろ眞意の掩蔽せられたるもの少なからず。宜しく炬の眼光を放ちて末注を比較し、亂麻を断ちて末書を整頓すること、稍々易くして最も急を要するところなり。又諸名僧の研究の結果は、渾て零碎なる斷篇にして、玉を碎いて吹き散らしたる如く、名所見物記の如し。是を綜合歸一して系統的に組織し、眞言宗旨を一眸の下に集むること、決して容易にあらざるなり。

又高祖の遺風なる十住心の判釋は、淨菩提心の發展を總攝して漏らすところなきなり。故に下は三惡道の邪心より、上は秘密莊嚴心に至るまで、宛然として曼荼羅を粧れり。而るに近時西歐の宗教哲學科學文學傳はりて、淨菩提心の發展は更らに複雑を加へたり。高祖の當時、世に存在する渾ての思想を網羅して、淨菩提心上々去々の序列を裁断し給へる旨意に従へば、かの西歐の思想を調整して、均しく淨菩提心の徳益を與へ、是を攝入して以て十住心判教の廣大無邊なるこゝを顯揚するは吾人の責任

にあらざるか。上はプラトール、アリストートルの哲學より、下はグントの哲學、カーライル、トルストイの文學をまで含める。西歐の思想を手玉に取りて、淨菩提心の光明に浴せしめ、曼荼羅の會場に列せしむること、高祖を以てするも容易なり。とせんや。況して備劣なる吾人の手に委ねられたるをや。而してクリスト教、マホメット教は俱に曼荼羅の聖衆に開會せられんと、忘れても渴仰しつゝあり。又秘密佛敎が印度支那を経て高祖に至り如何なる發展を遂けたるか。高祖以後、道範果實快師を経て、淨嚴妙瑞に追ふまで如何なる傾向を爲して、如何なる發達を遂けたるか。要するに宗意の歴史的的研究も、頗る興味ある而も最も重要な問題なり。又支那に於ける慧果和尚以後の秘密佛敎、印度の其後の秘密佛敎の運命を研究して、日本の秘密佛敎との比較は、如何なる掘出しものを得らるべきか。知らざるなり。又近時サンスクリットの研究漸く盛んにして、ベイダを讀誦すること、自在なれば、秘密佛敎の事相、波羅門のそれ、如何なる關係を有するか。之又深き注意を要する問題なり。特に秘密佛敎の心理的に宗教的に將た歴史的に、如何なる價值を有するか。及その實修實證は、注意の焦點たるべきか。又悉曇の研究は、博言學的の價值、原本譯書の比較校合に資益し、聲明の研究は、聲字韻律を明にする等、算へ來れば、際涯を盡さざるなり。眞言行者兼て他宗を學ぶは、高祖の遺訓なるも、一たび眼を擧げて自宗内に開拓すべき荒蕪地の廣大なるを觀れば、僕は驚倒せずんばあらず。而も之等の荒蕪地は如何なる寶玉を包蔵するか。眞珠か紅玉か金剛石か。全く未知の問題なり。されどこの方向に宗の生命の伏在しつゝあるは明なり。

白雲兄足下吾人の雙肩には既に斯の大難事のふり懸りつゝあり。何の違ありてか世の風潮に驅られ
政争に漂浪し、虚々實々の掛引を試みんごかする。而るにも拘はらず、吾徒にしてこの責務を果さんご
するもの、現にありや。思ひ至らば寔に長大息の至りならずや。僕の先輩にして、學博く智聰にして未來
の師表たるべき素質を有する人に乏しからず。彼等は學歴よりするも、思想の傾向よりするも、夙にか
の研究的體度を取りて、現時は既に一宗の燈明臺ごなり。宗の光輝この邊りに赫耀たるべかりしなり。
而るに彼等は又餘りに熱く、自己の學殖ご威嚴ご運命ごを意識せるなり。彼等の友人は某の要職に在
り。某の事業を起し、某の名譽を擔ひ、肥馬輕衣の富をすら恣にせり。而して彼等又その同地位を獲るご
ご營一步のみ。されば非常に堅固なる意思ご、殆んご仙人的清廉ごを以てするにあらざれば誰れかか
の名譽ご富ご浮世の欲望ごを擲つて、この困難にして報酬なき事業を遂行するものあらんや。宜なる
かな。彼等の多くは、設しや世間に乗り出して、名利を争ふ如き極端なるごごを敢てせざるまでも、宗内
に於いて、追ふ限りの名譽ご富ご位地ごを要請し、幾分か自ら慰撫せんごす。其自らに供するの薄きに
満たずして能ふだけ豊饒ならんが爲めに、眞面目の研鑽を疎外にするの傾なきにあらず。一は彼等
の境遇の然らしめたるなり。視よ、宗内が政治熱に狂するの餘り、政壇に立ちて、敵味方入り亂れて、華々
しき白兵の接戦を爲すものにあらざれば、僧侶らしく人間らしくすらも思はざるにあらずや。宗の理
想的人物は議場の花形役者なり。敏腕なる事務家なり。如何に清廉の師なるも、如何に篤學の師なるも
一たび國に政論を斷たば、迂愚の非難の箭は立ちごころに放たるゝなり。甚しきは、意氣地なしの、嘯り

つきの頓馬の而して無用の廢人ごすらも、罵られ侮られ賤めらるゝなり。かの先輩に對し、或ものは嘲
笑の齒を露き出し、或ものは政壇に顯はるゝごごを懲惡し、或ものは還俗して俗務を執るごごを勸む
るものあるを見たり。昔は、清貧に安んじて、學に篤く行清きものは厚徳の君子ごして、師宗ごして奉侍
至らざるなかりき。今は却つて之を嘲諷し侮蔑して完膚なからんごす。嗟前には富ご名譽ごの招くあ
り。後に嗤笑ご饑餓の追迫するあり。彼等先輩の意思ご明智ごを以てするも、恐くこの誘惑ご脅迫ごに
心迷はざるを得ざるなり。先輩にして既に權門の前に踞して、降れるものあり。降るべきか背くべきか
逡巡して決せざるものあるも、洵に所以あるなり。

白雲兄足下、僕は先輩の態度に就いて、同情の涙を堰き克はざるなり。されき僕の涙は餘りに婦女子的
ならざるか。餘りに脆ろし。可しさらば、涙を禁じ情を押へて少しく語らんか。彼等先輩の修めたる學文
は抑も何の爲なりしか。設し富を作らんが爲なりせば、商業を學びて銖銖の利を争ふべきなり。盛名を
希ふなれば、政治を學んで知洲を獵り宰相を漁るべきなり。武事を修めて三軍を叱咤する肝膽を練る
べきなり。而るに彼等の學びたるごころは、宗教にあらずや、哲學にあらずや、文學にあらずや。之等の學
文を金賞牌ごして、世に矜り俗に估らんごには、餘りに嚴めしきに過ぎたり。社衲を着けて燒芋を賣ら
んごするも、何人の兒か能く近き來るべき。彼等は意思の修養の爲に學びたり。俗世間を超脱せんが爲
に學びたり。人生の奥底を敲かんが爲に學びたり。彼等は清貧に安んずべきなり。世俗ご闘ひ之を扶挾
すべきなり。而るに何ごごぞや、自己ごして何等意思を制御するごご克はず、他に對しては區々たる世

評に畏縮し、賤劣なる俗情に力まけて、直ちに面縛して、自己を訓練せんが爲に修めたる學文を其まゝに貢物として醜猥なる俗界に、臣事せんぞす。之を譬ふれば、天に登らんとして柁櫓の船を造り、未だ其運轉をすら試みずして、破りて薪として市に鬻がんぞす。愚の極、痴の極、さればきて、古き學者はたゞ夫れ古き學者なり。嗟政治家か、あらず、新進の學者か、あらず、舊學者か、あらず、愆くて吾宗は茅原に建て古るしたる御殿の如きのみ。

白雲兄足下、僕痴愚にして謂ふこゝに諄々し、され、最早や多く、雅量坦懐なる足下を煩はさざるべし。僕ほかの布教師なるものが、吾人に如何なる慰藉を與へ能ふものなるかを知らず、之に關しては他日重て問ふこゝろあらんぞす。管僕は有志家と學者とに嫌焉たらず、而して勿論自己の腑效なきには更に驚くなり、僕は他人を糺す前に、自らを糺さざる可らず。たゞ茲に僕の近時を溲け出すには餘りに汚なし之を語るこゝにそれ日あらん。

舊佛教徒に警告せんか

(舊佛教徒、新佛教徒の稱呼頗る妥當を缺けるも漠然たる意味に於いて)

試に近時の佛教界の狀況を觀よ、其の言論に於いて、其の行動に於いて頗ぶる妥當を缺き、何等の教權を認めず、何等の聖誠をも省みず、放縱不羈、遂に懲治すべからざるに似たり、吾人は漫りに慨嘆せざ

るも、寧ろあり得べからざる事に思へり。現今の宗教は單に歴史と習慣に據りて存立するものなるに斯くまでに歴史を無視し、習慣を無視し、尙ほ且つ一日の生命を保ちべきか、不可なり、速かに自滅を招くより他に途なからん。例せば封建時代に於いて、諸侯が其の系圖と家憲とを失はんか、直ちに闕所となりし如くなるべきものと思へり、然るに事實は全く吾人の所信に背けり、教界の危急を憂惧するこゝに三十年にして、今日こそは實に其の極端に達せり。

而も宗家は嚴乎として三十年の生命を保ち來りしのみならず、近き未來に於いて廢滅すべくもあらざるが如し。寧ろ舊觀を改めて、勢力の旺盛なるを致せるものすらあるは到底否認すべからざるの事實なり。之れ社會の現實が誤れるか、吾人の憂慮が謬れるか、問題の繋るこゝに茲にあり、今ま暫く宗家の立脚地を離れ、人生の行路より考ふるに、吾人は所謂舊佛教の爲めに、更らに驚く可く更らに悲しむべき事實に到達したるを覺ゆ。

蓋し何れの社會にも常に二個の潮流あり、則ち一は保守的にして他は進取的なり、保守派は悉ての點に於いて、無事を喜び、歴史を重んじ、習慣に拘はり、相傳を尙び、昔に復るを理想とし、従つて其の思想は考古的にして、訓話的なり、固より進取的思潮に對して、絶對的反抗を試みんとするものなり。進取派は悉ての點に於いて、活動を欣び、歴史と習慣との拘束を嫌忌し、自由を尙び、未來に理想を求め、従つて其の思想は研究的にして、批評的なり、固より保守主義に對して、侮蔑し、輕慢して、先人の威壓に屈せざるなり。たゞ時勢は絶えず遷移して、或時は保守に傾き、或時は進取に傾き、一波一瀉、決して定相あるも

のにあらざるも、人類がアミーバの原始より、猿の最古より、今日にまで進み來りたる痕に考ふるに、人生の行路は或る目的の外到底保守的たるを允されざるなり、保守主義は人生の相對的目的に過ぎずして、常に或る波瀾の後、必ず敗亡して、人生の絶對的目的たる進取の爲めに、道を譲らざる可らず。之を現實に見るも、支那朝鮮の弱のみならず、北歐の強國たる露國すら、其の保守主義に堪へずして、漸く破綻を示し、進取的日本國民の前に屈したるにあらずや、兩主義の成敗洵に明白なり。

由來成立せる宗教は、一教主の下に一教憲を擁護し、以て萬世に通じ萬國に通じて、之を行はんとするものなれば、其の必至の要件として保守的なり、然れど宗教も畢竟するに人生の一事変たるに過ぎざれば、從つて人生の大目的たる、進取の道に塞がること能はざるなり、茲に於いて、宗教は斷へず其の變に應じて、内容と外形とを改むべきなり、而して變に應ずるの最も顯著なるものは分派なり、分派は寔に宗教生存の必要條件ならざる可らず、加之種々の國情に影響せられ種々の時勢に影響せられ、一轉再轉分派又分派展轉して了に現狀に至れるなり、是れを原始の佛教に比するに、素より雪と墨月と龍との差のみにはあらざるなり、されば現時の寺院が存在する所以は、原始的佛教と殆んど全く異なりたる目的の爲なり、則ち現今の寺院は、年忌葬禮の儀式を行はんが爲め、家内安全、福壽圓滿を祈らんが爲め、幽魂の得脱を禱らんが爲めに建てられたるなり、釋尊當時の如くこの阿蘭若に獨住し、只管らに靜慮を凝らし、出離解脱を急がんには、今の寺院組織は、餘りに煩雜なり、而も之れを看て直ちに宗教の墮落とのみ批難するは、頗る當を得たるものに非ざるなり、之を譬ふれば、博愛に謳はるゝ大長者ありて、多くの番頭手代を召し使ふて、頗る殷盛なりき、而るに時勢の變遷の爲めに、家運傾きて何時かは知らず、屋敷を拂ひ家財を賣り、一家分散するの不幸に陥れり、反之、番頭手代は漸く時勢の變に乗じ能く商ひ能く蓄へ、大いに盛大なるを致せり、たゞ舊主家の暖簾と屋敷とを犯すも其の商風は漸く改まり、家憲をすら變へんとするなり、斯くて彼等は、主家の再興を謀らず、恩知らずなりと謂はゞ謂ひ得べきも、自家の生存に急にして、主家を拯ふの違なしとすれば、強ち非難もなりがたきなり、彼等如何に隆昌なるも、主家の興る日はなきなり、要は故の大長者の子孫を以て任ずるもの、自ら立つて御家再興を謀らざる可らず。

之を平明に言へば、舊佛教は新進の途に塞がりて、全く失敗したるものならざるなきか、この敗殘の舊佛教を擁して再舉を企てんこと、三曹子を傳りて、雪中に彷徨へる常盤の末路よりも果敢なし、されど再舉決して瘦せ浪人の閑事業にはあらず、蓋し保守主義は、常に進歩主義の爲めに破らるゝも、かの進歩主義の方向を規定するものは保守主義なり、新しく起りたる急進的教徒が、如何に突飛なる活動を試みるも、終に佛教の圏外に逸出するものにあらず、たゞ舊佛教の拘束のうちに、彼等の進むべき新らしき道を求めて進まんことするなり、此點より言へば、舊佛教思想は依然として、嚴乎たる權威を有し、巍然として萬年滲らざるの師匠たり、之れを擁護して、新進の宗家の規範となすこと、に於いて其の最も完全なる本能を發揮するものなり、と言はざる可らず、現時の佛教が原始の佛教に倅りたるを視て、釋尊の昔に還へさん、企つる如きは、兒の六十才に成りたるを捉へて、己が腹中に返へさん、企つる

愚かなる母に均しからん。抑も又た舊佛教徒の事にあらざるなり。眞の護法家は、渾ての利益を幸福を犠牲にし、斷へざる奮闘に身心を碎き、嗤けられ罵られ忌み嫌はれ、畢に生きながら葬らるゝに至りて、今者已満足せざるべからず。この熱烈なる壯志ありて、初めて進歩的大勢を拘束し、最も健全なる發達を遂げしむる力あり。此を外にして、吾人は舊佛教復活の意味を解する能はざるなり。而して今や其の時にあらざるか。新派は既に大に動けり。眞の護法家の秋は來れるにあらずや。

學生訓に就いて

浮世の事は掙りがあるが如くして掙がない、解つてゐるが如くして實は解らぬのである。さりて矛盾に充てゐる言ふこゝもできぬので、秩序は整然としたものである。發縁酬答は錯誤あるを許さぬのであるから、掙りあるらしく無いらしく、解つたらしく解らぬらしき、紛然雜然たる社會にありて自然ら道ありである。然らば其の道は何ものであるか。言ふに實は外界にはなき道で、たゞ内界にのみある道である。則ち理想が道である。理想が定つてくる道自然らありである。鳥の飛ぶべき路、船の通ふべき路、それは空にも沖にもないのである。かの小山の枯木に往くべし、かの岸の港に航すべし。と掙るまきに、茫漠たる空、汪洋たる海に道ありである。確然たる目的なくして曠野に臨むまき、曠野は迷境である。深く入れれば入るほき、方角も道路も錯雜して、遂には出るにも入るにも道はなくなつて、救

はれぬ荒野に迷ふて悶えるより他に術はないのである。

學文が人間に理想を與へるものである。云ふこゝは、屢々耳にしたこゝで、吾人も爾か信じて、極めて正直に、學文に理想を索めたのである。が、學文果して吾人に何物を與へたるか。學文が吾人に與へる理想なるもの、ありやなしや、頗る怪しいもので、無しと言ふこゝが適當であるかも知れぬのである。廣い意味で言へば、學文は悉て吾人を誨えて居るものであるから、哲學でも數學でも地理でも歴史でも皆な何にかを誨えてゐるのである。のみならず目を開けば、宇宙の森羅萬象は各の宇宙の祕密を語りつゝあるもので、日夕に吾人に何事かを語り且つ誨えて熄むまきなしである。而して吾人も亦た之を學びて飽くこゝないのである。さりながら、學文や宇宙が誨ゆるまきころは、此處に道あり、彼處に道あり、是れも道なり、夫れも道なり、解剖的に證明的に條理を示すだけで、訓誡的でない。恰も曠野の中に縦横に通ずる路の側らから、是も道なり、彼も道なり、誨えらるゝだけで、此方に向ふべし、彼方に向くべからずまきは誨えぬのであるから、誨えられざる前まき變るこゝなく、吾人は依然として迷ふてゐねばならぬのである。見聽くこゝはいよゝゝ、滋くして、道いよゝゝ、多岐で、迷ひいよゝゝ、深からざるを得ぬのである。是れ併しながら罪は吾にあるので、學文も宇宙もにあるのではない。學文特に宇宙は、實に茲に道ありまき教ゆるのみならず、斯く爲べし、此の道を往くべし、王公の權威を以て吾人に命令しつゝあるのである。道德律まきは宇宙が命する此の聲で、吾人は此の聲を聽かねばならぬ。而して此の聲が吾人の理想するものである。天に在りては、道德的命令の聲まきなり、人に在りては、理想まきなるので、實は二つ

あるのではない。此の聲は頗る幽玄で天才でなくば聞き取ることはできぬ。自分のものであるべき理想を看るこゝができぬ。之れが凡夫の悲しさであろう。

人は自身に己れを看るこゝができぬから、先覺者の教訓を要する。斯くて學生訓はありである。先覺者は後進に人生の意義を教え、理想を啓發し、而して處世の方針を授けるのである。家にありては父母と兄弟とありて誨え、學校にありては教師ありて誨え、長者に聞き下賤に聞き、官衙に聞き、道途に聞き、人は熄みまなく誨えらるゝので、教訓に饜きるほゞであるが、其の教えかたが一様でない。厭世的に傾いた兼好流の訓誡、心學的に傾いた益軒流の訓誡、邁進主義のスマイル流の訓誡、さては坪内流、異軒流、桂月流の訓言は皆な一家言を成して、何れの學生が服膺しても過失なきに幾庶いのである。さりながら所謂先進を稱せらるゝ人の訓誡は、其の人の性格と境遇と、それ等より來る經歷、其の人の人生觀及び世界觀なきに基くものであるから、自然ら一面の眞理相對的の眞理、従つて其の人たちと性格境遇等を略ぼ均しうしたものにのみ眞理なのである。少くも性格境遇等を異にするものには直接の訓言はならぬのであらう。

維新の大動亂に封建制が瓦解したと、もに、日本社會の道德的標準は、全く根柢を失ふたので、人心亂麻の如くで趨向する所を知らなかつたが、漸次に秩序が恢復して來た時、日清戰爭となつて、國民が稍々自覺し始めて、社會の基礎がますます固まつて、日本人も餘程大人びたこと云ふ事になつたのである。日露の開戦は、此の機運を更らに昂進したもので、其の大捷利に終つたのも、實は此の機運に乗じた

からである。斯れで國民の理想もほゞ定まり、先進者が後進者を嚮導するにも、標準が立つて來たやうであるから、青年はそれ〴〵向ふべき方角を誨えられて、多く處世を誤るものもないであらう。然るに社會の秩序が整へば整ふほゞ解らなくなつて、迷はざるを得ぬのは、佛教青年僧侶である。社會が動搖して居た際には己れが迷ひも然ほゞ目にしたゝなかつたが、社會が秩序を恢復してみるに、己れの迷ふて居るこゝが殊更ら著るく目につく。思ふに今日の社會で青年僧侶ほゞ迷ふて居るものはあるまい。彼等ほゞ苦悶して居るものはあるまい。たゞ譯もなく曠野に突き放されて、目的もなく理想もなく、而して之れを指導する教訓も持たぬのである。勿論世間には種々の誨言があつて、處世の方針を示してはるるが、夫れは世間普通の學生の教訓で、青年僧侶には餘り適切なものでない。然らばこゝで從來の佛敎家が教ゆる所に聞いて居れば、直ちに社會の進歩に遅れて、物の役にも立つこゝも覺えぬ。嗚呼迷ふた〴〵は獨り幽靈の怨み言ではないのである。止を得ず社會の風潮に順ふて、世間の教訓に順ふて、世間並みに動くやうに成つて來たのである。祖訓や宗風は言ふまでもなく押込め隠居で、僧儀や法規は肩籠に潜んでゐるが、奈何に亂暴なものでも之れが正當で、斯くあるべきものには思はぬ。宗教的天才が出現して、文明世界の眞中に新宗教を樹立して、吾人の急先鋒となるこゝを渴仰するものも茲である。青年僧侶の迷ひの原因を他に喩するこゝができるならば、未出の天才、其の人が罪人であらう。天才が出て指導すれば、青年僧侶は迷ふこゝを要せぬのである。然れど其の迷を罪として、其の罪を己れに歸する勇氣ありとすれば、謂ふまでもなく迷ひの罪は己れ自身に在りである。吾人に理想を與えて、誘導す

る天才は未出でない既出である。それを惟はぬのは則ち吾人の罪であるまいか。されば其の天才は誰れぞ。誰れあろう宗祖である。吾人が出るここの何ぞ遅きと叫んで、待ち侘びたる天才が、假りに一時に百人輩出するこゝもあるも、顧みれば宗祖一人の分身に過ぎぬのである。宗祖は豫言者で、其の豫言は未來永劫の末徒の理想とすべきものである。其の豫言は慰安を與え、光榮を與え、パンをすら與える力がある。而して時處を異にする爲めに、其の豫言の力に厚薄のあるでない。要するに眞言宗の末徒なる限り、吾人を誨えて吾人に理想を興えるものを、未來に求めたりして來すべきものではない。吾人は手に持てる寶玉を棄て、沙漠に寶石を捜して、之れを得ざるが爲めに、叫び悶え狂ひ、而して失望して居るのである。愚言へば之れほゞ愚言か。試みに高祖の遺訓を誦せんか。

出家修道は本佛果を期す。更に輪王釋梵の家を要せず。豈に況や人間少々の果報をや。

此の御遺勅昭々として動すべからず。千古不磨の格言である。此の外に何等の訓言も要らぬ。此訓言が則ち吾人の理想である。此の理想の定まるべき、何の違あつてか岐路に迷はんやである。確として理想が根を下ろしたならば、其處に手段方便は自然ら備はつてある。遊覽に往きたしと思ふても、たゞ往きたいと惟ふて居るうちは迷ふてゐるので、西にも東にも一步も移すこゝは成きぬが、松島へ嚴島へも目的が定まれば、汽車もあり、汽船もあり、徒歩で行くもよし、自轉車なきで往くもよしである。生憎金の持ちあわせがなくば、文なしも可なりである。理想目的に相應しい手段は幾干もある。佛果を志求するからして、何にも堅苦しい方法に限らぬのであろう。猜介な律僧や偏狹な學者の致へる如く、枯

禪主義沈黙主義で山中に行ひ澄さなくてもよい。眞言宗の實意は二利同時であつて、己れ修證の後に濟度に出るなき、廻り遠いこゝはしてゐられぬので、修行しつゝ、化他をする。其の化他の功德を自利に廻向する。其の自利の功德を衆生に廻向するのであるから、依然り浮世の浪風にゆられつゝ、雨にも濡れてみ嵐にも吹かれてみ、五月蠅い世を五月蠅く濁してゆかねばならぬ。であるが其の濁しかたを最も注意せねばならぬのである。鬼面と佛面とを糺ひ合せて居て、鬼面を満足させる爲に佛面を飾るなきは以ての外である。佛や法を種に芝居を興行するなきはそれで、さりながら佛面なき巖で捨て、終つて、鬼面一方でゆくなきは、沙汰の限りである。佛も法も押し除けて殖産の工業の狂ふなきがそれで、實は理想さえ確かなれば、其の處には佛面も鬼面もないので、一兩面に使ひ分けたり致へたりするものが誤つてを。譬へば佛陀を理想とするものは、商人の眞似軍人の眞似は要らぬ。佛陀に成るべき道、則ち僧でいつたならば宜いのであらう。東郷大將は豪傑であつても、僧徒の理想とすべきでない。紅葉は天才であつたけれど、軍人や僧侶が彼を理想とすべきでない。彼は小説家の理想とすべき人であつた。芭蕉や其角は俳人の理想で、雪舟や探幽は畫人の理想であつて、孰れも吾人の理想とすべきものでない。耕耘が巧みなりして、鋤耨を軍刀に替えて、兵卒の動くべきでなく、挿花點茶に通じたりして、干杓鉢を振つて高座に登るべきでなからう。醫者には檢温器なり軍人には刀なり百姓には鋤なり、而して僧侶には珠數と法衣である。此の外に吾人の武器はない。折れが高祖の誨ゆる理想から來る自然の手段で、茲に慰安も光榮もパンもある。理想から來る處世法は神聖なものなれば、珠數と法衣に於

いて威あり嚴あり快樂あり自由あるのである。

然るに時勢の變化と言ふものがあつて、之れが俄かに攷へるに、非常な魔力を持つてゐて、石を金にするほどの大變化を起させるかのやうに思はれるが、夫れは大なる誤りで、さ程勢力のあるものではない。維新前の日本の社會状態、維新後の社會状態が雲泥の相違があるのを見て、日本人が急に西洋人にでもなつたかのやうに攷へたならば、全くの謬りである。日本國民は飽までも日本國民で、社會状態の變化は、和服のものが洋装になつたはさきのこゝに過ぎぬ。日本人でも洋服を着たら西洋人に成つたやうに思ふて居るほどのものは餘程のお芽出度であらう。にもかゝらず、社會状態の變化に駭いて、己が理想も捨て祖訓も宗風も省みず、社會粧の前に額づかねばならぬのであらうか。額づかねものは時勢遅れに罵るものが、時勢通に稱へらるゝであらうか。青年僧侶は斯かる時勢狂に耳を貸すべきでない。彼等も俱に狂ふて居る若しくは狂ひたいを希ふて居るものは不幸である。言ふまでもなく、今日の社會が僧侶の意氣地なきを叫び、無能なるを罵り、有害なりをまで貶してをる。さりながら此の聲は、僧侶の墮落を促すのでもなく、僧侶絶滅策を呼ぶのでもない。全體吾宗なきは日本國民の宗旨なので、決して印度や支那の地に在つたものではない。國民自ら造つたものこそ謂ふて宜い。それを僧侶に預けて措くは、勝手氣儘な真似をするので、國民が還せ戻せと迫るのである。少くも宗祖の昔に還れ然らざれば宗祖の昔を顧みるも可しと言ふのである。社會が宗教家に迫る聲はそれなのである。何故なれば、今の世にても、高祖を罵る人があらうか、尊崇せぬものがあらうか、而して我は高祖を理想

とし、高祖に憑りて立ち高祖の名の下に世を救ふことを願へる高祖の末徒なりと呼號すれば、誠に壯烈で偉丈夫の事である。今の宗教家には斯く呼號する勇氣がないので、其のやうなものが時勢通を氣取つたところが妙でもあるまい。荐りに時勢呼ばはりをするものは惡魔の兒である。惡魔の兒は人の兒を煽動して地獄に送りて快哉を叫ぶのである。寔に吾人を誨えて理想を與ふるものは、慰安と光榮とパンを賣らすことを忘れぬのである。高祖の外にそんな人があるであらうか。其の人の教ゆる理想を外にして何を求めんとするのであるか。予は高祖の外に吾人を誨ゆる人はないと思ふので、青年の宗學生にも其の主義を鼓吹したのである。

樂觀したり悲觀したり

私は眞言宗の將來に就ては大なる樂天觀を持つて居りますが、眞言宗の僧侶に對して悲觀説を抱いて居るのであります。世間では眞言宗が榮えれば僧侶も榮える、眞言宗が衰へれば眞言僧も衰へる、云ふこゝが當然の如くに考へて居るが大間違ひであります。之れこそ反對に宗旨が衰へたら僧侶が榮えるか、云ふに勿論そうは思はんのであります。宗旨が衰へるに僧侶が跋扈する、好きな真似をする、云ふこゝは云ひ得るであらうと思ひます。此の實例は維新以來の宗旨の状態が最も嚴確に證明して居るではありませんか。維新以來非常に逼塞して全く宗旨の威信が地に墮ちたので、世間は全

く省みるものが無くなつた。是れ幸ひ鬼の居らぬ間に洗濯を爲過ぎたので手の皮も剥がして畢ひ布の生地を洗ひ破つて畢うたが素より咎める人もなかつたし爲すが儘に任せて措かれたのであるが今日は僧侶の眞言宗ではなくなつて信徒檀徒共營の宗旨に成つて居るから決して僧侶の自儘には行かない。尤も今も宗旨云へば僧侶團體に限るもの、如く思ひ宗制にも僧侶の保證はあるが信徒の權利が殆んど認められて居ないから、僧侶の專斷で何事も能きる爲ても構はぬと思ふて居る。是れが抑もの大間違ひで、時代を理解せぬから盲目蛇に怖ぢずの妄に陥るのであります。弱いから保證を要するので其の半面には強者が窺ふて居ることを忘れてはならぬ。強者には保證も何にも入らぬのです。保證せられて居るもの程弱いものはありません。保證を頼んで安心して居るなごは全くの盲者です。社會民衆は則ち其の強者ではありませんか。現代は奈何なる社會の隅々迄も專斷を許され保證されて居る處はない。保證されて居るのは正義公道のみであります。僧侶の身分の保證でも正義公道である限りに於いての保證であつて、我儘や自惚れや得手勝手迄も保證して呉れた權威者は封建制の倒壊と共に壊滅して畢うた筈です。此れ程に明かな事實を理解せぬ者が現代に於て首を擡げやうとしたからこゝで誰れが一顧をも呉れるものですか。

併し密教は前途洋々として春の如き運命を有つて居ると思ひます。其れは

一は密教が現代文明の理想と同じ理想を有つて居るからである。

二は眞言宗の教義が文明の研究の歸趣點を握つて居るからである。

三は眞言宗は貴族宗であるが同時に民衆的であるからである。

第一第二に就ては別に説明を要する程でもなく眞言宗の教義の一端を窺ふたものには首肯せらるゝ處であるが、第三の點に至つては別に説明を要することゝ思はれます。現代の宇内の狀勢を見るに社會民衆が凡ゆる貴族を咀ふて四民平等を叫ぶので、其の結果は支那帝國も露國も而して獨逸も倒れました。民衆は常に平民的平等を云ふことを絶叫するのであるから、其の表面の旗章しに依るに貴族に對する平民を云ふことで、其の方面から見ると貴族文明を嫌うて平民的下劣を謳歌する時代の如うにも見へますが、勿論是れは一時の變態で現代民衆の理想は決して其の様の下卑たものではありませぬ。文明を貴族を或る一團體が專有するから其の團體に對する怨憎に過ぎぬので是れは眞の目的に達する道程であります。民衆は何にも貴族を倒し文明を破壊し又は引き下げ、下卑た民衆昔の野蠻に返さうと云ふやうな考へではありません。民衆が一般に己れ自身を貴族に文明に引き上げて現代の貴族が專有する地位を文明に平等に到達するこれが目的なのであります。

今の貴族を咀ふのは光榮を利益を專有して民衆の光榮を利益を妨げるから現代文明の賊として取扱はるゝまであります。何れか云は、現代の貴族が專有して居る位地が開放せられて民衆的に成れば即ち民衆が一般の光榮を利益を分つて貴族に成れば此の不祥な世界運動は治りが付くのであります。日本では既に不完全ながら明治二十二年に解決が出来たので今度の世界騒亂にもピリミもせぬ所以であります。眞言宗は貴族宗であります。併し四民平等に皆な貴族的に成るのが

目的であつて四民平等に下卑た平民黨に成り貶るのが目的ではありません。眞言宗は一切衆生を愚夫愚婦は見ないので、一切衆生を大日法身なりとするのであります。現代歐洲で騒いで居る民衆運動が此の自覺を有つて動いて居るか云ふは勿論無意識の者が大多數で、其の遣り振りを見るに勞兵會なきは單に貴族を引き下して文明を下卑た民衆に非文明に戻さねば満足せぬらしく見えますが、前にも云ふ通り之れは一時の現象で世界運動の大宗ではありませぬ。世界運動は其の様の不味きものには思はれませぬ。眞言宗の教義が是れであるから、眞言宗の血に生きた云ふ迄もなく無意識的にですが日本は益々眞言宗の宗意を實現するばかりで頓て世界的文明の眞目的に協ふ様に成りましよう。此の意味から眞言宗は榮へます。

同時に何にも自覺せず、自惚れや得手勝手や我儘が保證されて居ると思ふて居る僧侶が驅逐されるのは當然でありましよう。例せば今まで貧乏で暮して居た中は何人も省みるものが無かつたから安心で自儘しても咎めるものが無かつたが、遽かにお金が出来ると自然人物が這入つて来るから、我儘が出来なくなる。自分の財産と思ふて居た處で支配人や理事が出て来て、勝手に一文も遣はせぬ。構はず勝手を振舞ふに禁治産や除籍に遇ふ。傭人と思ふて居た支配人や理事に處分せられるが法律や保證は正義公道に與するから仕方がない。遣れば遣つて見るが宜しい天罰が最後のお別れであります。約り大資本家の主人家族で居残らうと思へば、

一身を慎しみて大家の家族らしく成るこゝ。

一、諸種の藝能を習得して大家の家族らしき品性を保つこゝ。

一、自惚れたり我儘勝手したりせず、支配人や理事の節制に服従するこゝ。

此の如うな修養は一つも見ればききものがない。大家には成るが大家の家族らしくはない。其の癖に自惚れや自恣は素質である。是れでは何んとして此の大家に手足を伸ばす見込みはない。何れは支配人たちの御厄介ものであらう。斯う思ふに眞言宗が發展するのは有望だが自ら省るに洵に心細からざるを得んやであります。其れに日暮れて道遠しの恨みは充分である。悲しんだり喜んたりは茲にあるのです。

戦 争

廻向院の土俵の上で、梅と常陸がヨッチョミ組合つて、仆すか仆さるか、押しつ押しされつするこゝろ、如何に最負目に看ても、馬鹿けてをる。大男が力瘤いれて踏んばつてゐるものを、コカス、突き出す。それがこゝに興味があるか、虚心に考へれば、二王よりも強い力士の取組も看る氣にはならぬのである。

その相撲にも劣りて、全く無意義なのは戦争であるまいか。相撲は搏つ、蹴る、拵る、遁ける、攻めるが、殺傷はせぬ。戦争は撃つ、苦めるのみならず、殺戮するのである。蠻人でも、より已上の無謀なこゝはせぬ。而もこの無意味なこゝが、列國環視の中で、西洋の大強國と東洋の島帝國の間に行はれてをる、冷靜に考

ふれば、これは馬鹿々々しいことはない、頗る滑稽である。黄金世界を實現し得た後世の歴史家は、何と謂ふて冷罵するであろう。或は戦争の行はれたことを疑ひ、日露戦争などは捏造説として抹殺するかも知れぬ。

されど兩交戦國民の眞面目なるは勿論關係のない國々までが、一勝一敗に一撃一笑するのである。人間は何としかくも淺ましいのであろう。兒戯にも劣つた戦争に興味を持つやうでは、人間の水平はまだ高くはない。天國は遙かである。

それにしても、兎も角人間界の一現象なるかぎりには、何か意味がなくてはならぬ。が從來の日本人の戦争は多く平凡であつて、沈痛な深刻なものはないのである。

上古は事古るければ謂はぬが、藤原時代に行はれたものは鼠賊の勦討に過ぎぬのである。最も興味があつて、詩材に富んでをる源平の戦でも、恩怨相酬ゆるのであつて、後世の譚討の大きなものであつた。

北條足利時代の戦争は、猜疑、嫉妬、誑詐、陥擠のあらゆる惡徳を、無遠慮にさらけだした。がそこに一種の禪味を帯びてをる。思ふに人間の個人性が天真流露したものであらう。

たゞ元寇と建武前後の戦争は、少しく趣を異にしてをる。そは外部の事情が逼迫して、朝日が初めて昇つたやうに、愛國と忠君との思想が、煥發したのである。從來無意識的に動いてゐた國民が、忽ち國家に對する自己の位地と、君皇に對する自己の責任とを、臆ろけながら自覺するに至つた。が、その自覺は

頗る單純である。君皇と國家とに對する自己の責務と關係のみである。自己は何なりや、國家は何なりや、君皇は何なりやは、永く疑問とて後世に遺された。

上杉、武田の戦ひは、兵を弄んだのである。人命を犠牲にして、演習を續けたのであつた。兵學を實驗したのであつた。犬の蓄みあい、軍鶏の蹴あいも、人間氣を離れてみれば、面白いものである。眞劍の演習にも興味はある。

大英傑が辣腕を振り、國の動亂に乗じて青雲の志を成すことは、多く人間の個人性を極端まで發揮したものに過ぎぬ。織田、豊臣、徳川時代の戦争は、凡てそれである。忠臣もなければ、愛國者もなく、利益の山わけ、權利の剥ぎりのみ、封建時代の大名小名なごは、この個人性の發現の程度の反映である。大なる個人は大國を領し、小なる個人は小國を領した。彼等は自己の主張に眩惑されて、國家をも君皇をも忘失したのである。されど彼等は人生の片影を捕へたのである。人は決して奴隸ではない。又貧困でない。生れて或る權利と財産とを享受すべきである。蓋し日本民族が舊慣を破り、系圖を古紙にして個人的權能を發揮したのはこの時代である。

個人の權利は尊重すべきである。勞力は報酬さるべきである。たゞ濫用と過剰とは決して見通がされぬ。封建諸侯の子孫が三百年の温袍飽食は、頗る適當な報償であつた。又人の子を召して家來と呼ぶは越權であつた。ナポレオン帝の壓迫に對して、獨逸國民は直ちに騒起して、これに抗したのである。が日本國民は却つて、かの壓迫に酔ふたのである。かくて三百年安く眠つたのも、醒めたごも、に、天下治

然鼎の如く湧き騒いで、爲我主義の殘骸は全く粉碎されたのが維新の大革命である。

斯くて没自己的君主制の國家倒れ、次で起つた没國家的の封建制も滅びて、自由と平等の清鮮な空氣は、夏の朝風のやうに吹き渡つた。こゝに個人の權能と國家の威嚴と、相悖らず、相援くるものを求めた。吁！日本民族の理性は、歴史ありてよりの夢を破りて醒めたのである。吾人に幸福と光榮の道を示し、理想を與へ、奮力を與へ、高き尙き生命と力とを與へたのである。この新しき理性が凝晶して、具體的に顯現したのが立憲政である。則ち明治の日本は個人と國家がよく調和したのである。換言すれば理性の體現である。

されど一たび覺醒して目を上ぐれば、瞳に映じ來るものは頗る慘憺たるものであつた。外に列國は牙を磨き、爪を祕して、虛を窺へるがあり、内に習慣は全く頽れ、風俗は亂れ、禮節は廢れ、人情日に浮薄であるのみならず、道德の根底に一大動搖をさへ來したのである。この間に宗教は信仰を失ひ、邪說異端は荐りに蔓延してをる。人心の澎湃たる怒濤に漂蕩しつゝあるのは無理ならぬのである。前門の虎後門の狼はこれか。洵に日本の國狀は進んで列國の強壓に備へ、退いて自家の整理を迫るのである。

さきに臆ろけながら、この間の消息を呑み込で起ちたる南洲翁は、不幸、偶々頑迷な壯夫に擔がれて西南に旗を上げた。蓋し新たに壯宏な殿堂を建てるために、まづ草を刈り、石を掘つて大掃除をしたのであらう。

日本は頓て第一問に答へんとして、戟を執つて立つた。朝鮮は懼伏し、支那は償を納れ和を乞ひ、列國

は目を翫て、而して世界に於ける存立權を確かにし、門前の虎漸く拂ひ得たる。これ日清戦争の成功である。

日清戦役は陸海軍、商工藝、學術の發達を促し、國力は充實して、國家の基礎固くなつた。されどこの成功は前よりも一層廣大で、且困難な日露戦争を胚胎したのである。這次の成功は更らに一層強烈な戦争の先驅である。戦争に次ぐに戦争を以てし、捷利に次ぐに捷利を以てし、前の戦は後の戦を豫想するなれば、日本の運命知るべきである。百戦百勝の後の羅馬帝國は、頗る短命であつた。捷ちつゝ衰へつゝあつたのか。蓋し戦勝と國運の發達とは意味を別にしてをるのであるから。

今や日本は第二問の解決を促がされた。曰く永遠の平和は云何にすべきか。この蒼生を云何にすべきか。則ち從來哲學書や講壇に於いてのみ談論せられた人生問題に、事實に到着したのである。人生の眞意義を自覺すべき絶好の時機は今か。

日露戦争は日本國の膨脹と殷盛を期待すべきでない。人生問題、特に日本國の理想如何、永遠の平和如何の解決を迫るのである。これ頗る難問で、宗教家、哲學者、文學者、美術家、教育家に課せられた活問題なるべきか。日露戦争はこれを解決するこゝによつて價值がある。若し然からずば、無意義に終るのである。少くも廿世紀の戦争ではないのみならず、勝敗ともに吾國の患である。否日本の危機は却つて戦捷の影に潜むでるかも知れぬ。

南海、山猿生に答ふ

八七四

(修養園の諸師に代りて)

南海山猿生に答ふる前に廣く讀者及び同志の師に告げざる可らず、自體「山猿」てふ名が「六大」誌上に顯れたるは、昨春の頃「御僧」なる題を掲げたるときに初まり、爾來時折り「六大」の雄墓欄に在りて短文をものし、時には山猿と漢語風に署したることもあり、最近「六大」の開宗紀念號に「四國」なる題を掲げたるとき、依然山猿と署したり、而して行く末も永く彼の欄を見訪ふことを樂みとする山猿あり、誰あらう則ち東條隆督が浮世を忍ぶ假の名にてありき、これ子の友人のひそ／＼知るところなり、而して予は南海の生れなれば、南海山猿生の名を署して「修養園」の聲を聞くてふ文を見て、同志のものは直ちに予ならんかを疑ふべく、予も亦かゝる紛はしき署名を以て修養園を云爲するものあるを見て、是れ必ず爲にする所あるものと做し、常ならば不徳義呼はりして同志うちをさせる猪手段なりなど仰々しく書きたて、以て惡口の中に勝利を博すべきか、然るにかの南海山猿生とは何人なるかを知らずと雖も、其の語調の親切なる、其の知識の該博なる、其の文辭の巧妙なる、其の理を盡し情を竭し、敬意をすら拂ふことを忘れざりしことに於いて、予は此の筆者の凡人にあらずして御大將自らの御出馬なることを看る、讀者よ師が前號に於いて修養園に興へたる警告が、一片の娼婦のすなるアテコスリや意地悪しき小女のすなるツメリあいにあらずして、堂々出陣せらるゝ武者ぶり、天晴れ大將の御粧い、吾が徒

の以て模範すべきなり、されば師は知りてか知らずしてか、山猿なる名を署したるは、聊か戯れたるばかりにして、其の間に何等の惡意あるものさば思はれざるなり、故に師に對して、更らに惡感を抱かざることを告白す。只だ第三者ありて師の徳を云々するものあらば如何に悲しからん、希くは師よ第三者に誤らるゝ如き戯れをなし給ふな吾人はたゞ予が從來用ひ來りたる山猿と、前號の山猿と別人なることを記憶せられんことを、(昨春已前に既に彼の名の顯れたるかそれは知らず)

予は山猿生が普通の人にあらざるを知りて尙ほ山猿生と呼ぶの頗る禮を缺ぐものなるを知る故に山猿に替へるに師なる語を以て呼ぶことを許されよ。

本園が求むる聲に應じて師は本園が掲ぐる五個の綱領に就いて委細なる批評を試みられたるは、寔に感謝に堪へざるなり、而して五個のうち、第二の事教二相を以て修養の規矩とす、三云へるを、第五項の「現今の寺院組織を改善すれば現代の日本が要求する宗教機關と軒輊なし」と云ふ個條に對し、別に異議なしとして肯はれたるは、吾が徒の光榮をなすところなり、たゞ少しく吾が徒の意を曲解せられたる眼なきにあらざるも、そは暫く措くを適當なりとす、第三項に對して「園は餘りに盲目鼓吹に走りて文學研究上の親切に乏しきを惜まざるを得ない」と云ふ文章に至りては、吾徒は再讀三讀するも意を得ず、四讀五讀、彌々出で、彌々不可解にして何處を的てきなるかを推測するに苦しみしに、果然師の所論を明かにせり、吾が徒は曩きに支那の學問と印度の學問と西洋の學問と博く三大系統

の學問を論じたるに、師は學文てふ文字の順を取り違へ逆に讀みて、文學として非常に狭く解し、荐りに力瘤を入れられたるは聊か滑稽に過ぎたるの感あり、吾徒が學文に云ふうちには悉ての哲學科學文學宗教等の學をも込めたる考なるに、師は卒然文學として詩歌小説等に限れる如く解せられたる爲めに盲目鼓吹、研究に不親切なる等の語ありたるなり、知者の一失にて誰れしもあることなれば、師の宏量なる多分哄笑一番して終らるゝならんか、只だ此の中に、現に日本が今得つゝある印度文學は矢張り西洋よりの取次ものであるに至りては、吾が徒俄かに首肯する能はざるも、夫れは自ら餘論に渉るものなれば、重て貴意を得ることあるべし、要之師と吾が徒との所見を異にするものは第一項と第四項なり、思ふに第一項に就ては、獨り師のみならず宗徒たるものは皆な同一意見ならむ、而して吾が徒も亦師と同一意見ならんことは奇怪なりとやせん、月の圓きことは何人も異論なきことなり、然るに三日の月は弓狀にして八日の月は半圓なりと云ふを妨げざるべし、吾が徒が月の圓きは共許なる上に三日には弓狀を顯はすもの、八日には半圓形を顯すものなるを論ずるに不可なきなり、乞ふ試に之れを論ぜんか。

人あり吾人が眞言宗を日本民族的と呼ぶを以て偏見なり狭劣なりとし、眞言宗は世界的宗教ならざる可らずと云ふ、然り吾が徒復た眞言宗の教義より論ずるときは世界的、宇宙的、法界的、其の他如何に宏大なる抱括的の名詞を以てするも、夫れに同意するに躊躇せざるなり、さりながら夫れ等の廣大なる宗教は勿論人生なるものとは最初より没交渉にして、社會、國家、人種、國民的特性、時勢、人情、風俗等

の或る具體的事象を没却して、抽象的に同一佛性を具備せる平等々々の衆生なるものに對して成立し得べきものなり、されど斯かる意味より論ずるときは獨り眞言宗に限らず、悉べての物象は宇宙的、世界的性質を有するものと言ふを得べし、近く例せば一人の男一人の女といふ如き單純なる事實も此れを書籍に記すときは、其の男女は日本人にもあらず、西洋人にもあらず、従つて日本人なりとも、西洋人なりとも言ひ得べく、愚なる人、賢なる人、賤しき人、貴き人、凡て吾人が欲するまゝに批評して、圓轉無碍なることを得べし、而るに眞に一人一人を捉らへ來らんか、其の人には、必ず何處の出生、何某の兒、身分何、財産の有無、父母妻子の關係、賢愚、年齢、職業、學歷等の具體的事實を有して、其人の價値は自ら定まる可きものなり、何事に依らず、此れを机上に論ずる時は、廣大無邊にして、融通無礙なるものも、此れを事實に下すときは、自ら或る制限あり、程度あり、關係あり、歴史あり、一邊に論斷する能はざるなり、それと此れとは品異りて、祕密佛教は法界宮に在りて、唯佛與佛の境にあるときは、絶對的、普遍的、法界的なりき、されど其の無量無遍の法門は、傳持して闇浮に來ることすら許されざりき、僅かに斯れを傳持するにも人を選び法を擇ばざれば授けず、處にあらざれば、時を得ざれば授けず、當機のものに遇はざれば、寧ろ法の埋滅することあるも、祕して傳へざるが法なり、されば慧果阿闍梨は雲の如く簇れる私俊、頭才の中に於いて、特に高祖を擇んで授けて、支那に密教の根絶ゆるも知らざるものゝ如くなりき、高祖が此の祕密を傳ふるにも、祕密相應の地として、特に日本を擇び、彼の山に摩尼を藏め、此の山に入定留身して、是の祕密法門を護持し、彌勒出世の曉を待たるゝに、あらずや、吾徒は世界的にあらずと言は

す、爾れども日本國は密教國なりと言ふは今に初まりたるにあらざるなり、日本民族的と言ふを小なりとし、或は國に阿る言ひあるものあるかなれき、高祖已に其の人なるに、傳教大師が叡山を拓きたるは、京城の鬼門を鎮護のためなりき而して、兩祖交々皇室に接近したる爲めに、後世をして兩宗は皇室中心なりと誤らしめたる程なりしなり、剛岸なる日蓮上人があらゆる迫害にも屈せずして、苦心懺悔を極められたるは、其の立正安國論の爲めに、上人は如何に愛國の情の切なりしぞ、親鸞上人が一向専念往生彌陀佛の宗旨ながら、眞俗二諦を説いて王法爲本とし、荐りに聖德太子の恩德を稱揚したるは、是れ又た愛國の情に無關係なる能はざりき、孔子の一生は戰亂の世をして、周の靜謐なる天下に返さん、爲めに如何に盡瘁せられしか、ソクラテスは常にアデン人の爲に説きたり、楠公は國の爲に死したり、古人は眞面目なり、従つて眞摯にして事に中り、後人は輕浮なり、従つて理に陥りて空茫に失す、宗脈の振はざる之れが爲めなり。

されど吾が徒は他の意味に於いて、眞言宗が世界的の宗教なることを主張せん、何ぞや、有佛無佛性相常住なり、世界には今まは秘密佛乘より、下那落迦界に至る迄宛然として存立せり、斯れ佛の一切智々にして曼荼の當相なり、何をか説き何をか施さん、眞言乘あり天台乘あり耶蘇あり阿教あり自性會場そのまゝの世界なり、今より布教す可きにあらずして、既に布教を終へたるなり、佛陀も既に今者已満足して涅槃に入り給へり法々爾として秘密佛乘は體現せり、今俄に何をか説き何をか施さん、宇宙は秘密佛乘の世界なり。

又斯かゝる主意に於いて、世界的宗教なることを主張せん、衆生つき虚空つき涅槃つきなば我が願も盡きるものから、一切衆生を悉く濟度せざる可らず、されば祕經拏け三杵を振ふて海を濟り、一切衆生を化度するこそ何の異義かあらん、佛敎は迦かに印度より來れり、耶蘇敎は西洋より來れり、今は天理敎すら滿韓開敎を叫べり、吾が徒何かは彼等に後る可き、されど吾が徒は海外布教を叫ぶには餘りに自ら不用意なり、眞言宗の布教なりと稱して其の實通佛敎若しくは世間普通の道德談なごに走りて談義説法に一切をうち委す如きは、吾が徒其の可なるを知らざるなり、且つそれ貧しき藁小屋の主人、富貴の未來を夢みて、名聲の隆々たる、交友の尊貴なる、邸宅の莊麗なる、僕婢の饒多なるを矜らば、悲觀して厭世思想に惱まざる、の慮れなしと雖も、身は此れ昔ながらの貧主人なるに、搗て、加へて己が屋形の一方に猛火燃えかゝりたるさへあれば、吾が徒は家の焼けるを捨て、かの空想の描ける莊宏なる邸宅を索め行く如く、洒脫なる能はざるなり、のみならず吾が徒は他の爲すを妨げざるべし、たゞ吾が徒が脚下よりせん、ごするに何の妨げかある。

師よ世界的なりと云ふ眞言宗を、教理上より抽象的に論ずること、を止めて具體的に世界的眞言宗の考案を示されよ、且つ試に問はん、其の邊は如來有應の所、此の宮にあらざるなしとある如く、日本計りでなく法界海到る處として此の場合に於いて一致せざるはないと言ひ、其の例として首陀會天云云、西藏云云、假りに其の例は可しとして、然らば英國國民は日本傳來の眞言宗との關係如何、佛國民との關係如何、土耳其は如何、瑞典は如何、杜國は如何、エスキモーは、濠州の土蠻は如何、臺灣の土蕃は如何、その他

無數の地球上の國民性ニ眞言宗の具體的關係を示せ、否な宇宙には如何なる人種、生物ありて現今の眞言宗ニ關係せるか、凡て具體的説明を需む、世界に如何なる人種ありて、如何なる性行を有するものなるかを知らずして、ヨモ日本にある眞言宗が世界的なりと言ふ如き突飛論は爲す能はざるべし、但し六大緣起、四曼三密の講義は今ま聞かんニ欲ふところにあらざるなり、自性會場にある眞言宗、夫れは吾人論するにあらず、日本にありて現今行はれつゝある眞言宗を如何にすべきかを思ふて我が徒は立てるなり、自性會場の眞言宗は我が徒には高きに過ぐるなり、希くは師よ、眞言宗を世界に押し出すにあたりて、僧は斯かる教育あるものなるべし、教理安心は斯くあるべし、法服は斯くせよ、佛器佛像は斯くせよ、さては渡航費は斯くせよ、會堂か寺院か、儀式は如何にすべきか、此れ等の點に就て眞言宗が世界的なる實を示す前に、せめては具體的に考案を示せ、よしや日本の眞言宗は何なるもそれは捨てをくして。

第四項に至りては吾が徒の特に深き注意を拂ふところのものなり、師曰く、藝術は自證のためか、化他のためか、自證のためかあらば既に三密修の行規あり、藝術に要はない、化他ならば藝術による固より可である、師の問ふところ頗る簡單なりき、予は試に反問をせん、曰く、藝術ニ眞言宗ニ關係ありや將たなしや、若しあらば眞言宗に於ける藝術の位地如何、三密ニ藝術との關係如何、阿闍梨の十三徳中の藝術は自證なりや、化他なりや、近世哲學科學に於ける藝術の位地如何、それに對する眞言宗の覺悟如何、特に高祖ニ高祖の藝術との關係如何、高祖ニ高祖の藝術は偶然か、將た必然的發現なりや、山内學

士の言ふ如く、チヨツカイに過ぎざりしか、高祖に取りては末技なりしか、將た如何なる價值ありしや、又自證の爲には三密あり、從つて藝術は要らぬ、ならば、阿闍梨の十三徳の藝術は因縁なくして得られたるか、蓋し自證の爲めには三密のみありて他に何事も爲すべからず、すれば高祖が阿刀大足等に就いて詩文を學び、魚養に書を學び、唐に往きて韓に明に書道を學びたる如きは邪道なりしか、又た、自證ならば要らぬ、化他ならば要る、せば、藝術は學ぶべからず、而して藝術を以て化度するは可し、云ふことなりや、法律は學ぶべからず、然しながら判事になるは可なり、といふ理、寔に奇ならざるか、予は師の所説に對して斯かる疑問を有す、從つて此れに對して明確なる答を得ざるうちは否、も應こも答ふに方なきなり、されど予は斯かる錯綜せる疑問を撃けて師を煩はさんとするものにあらざるも直ちに自證か化他か、てふ簡單なる疑問に接觸する能はざるなり。

されど今、師の好意に酬いんがために、師の論據に順じて聊か論ずるところあらんか、眞言宗に言ふ藝術が自證なるか、化他なるか、先づ疏の文を見るに

兼綜藝者、謂妙善世間種々技藝也、謂聲論、因論、十八明處、六十四能、算數、方藥、觀相、工巧之數、緣曼茶羅所、要、皆不假於人、則造次施爲無闕乏之過、然後堪作阿闍梨。

阿闍梨は衆藝を兼綜せざれば、其の任に堪へざるなり、阿闍梨として衆藝を學ぶは化他のため、言はんよりも、自らその職に在る事を既に許されざるが爲めなり、自ら修めずして他に教ゆる、金を儲けずして費ふ、斯かる不條理なる義何處にありや、師曰く、三密行滿の威神力を要するが第一なるに、然り

既に三密の威神力を仰げばこそ第二項に於いて事教を以て修養の規矩とするにあらずや。五個の綱領は個々別々のものにあらずして、一連のものなり、而るに師は第二項に於いて吾が徒の所見を諒せられたるに、第四項に來りて後ち前に諾ひたる所を忘れ、本團の眞言宗に對する信仰の程度を疑はるゝは、吾が徒の甚だ遺憾とするところなり、人或は言はん、阿闍梨には十三徳ある中、特に第三の徳のみを取り出して困難なる説を爲すは如何に、法然上人は彌陀の四十八願中第十七願に緣りて、親鸞上人は第十八願に依りて信仰を確立せられたり、吾が徒は此の第三の徳を鼓吹して聊か眞言宗に生命あらしめんとするなり、吾が徒の信條は眞に三密の行を修證修顯して、一印一想に冥會冥合するものは、藝術に於いて自在を得べき理なり、藝術なき三密はあり得べからざるなり、高祖の藝術は高祖のチヨツカイや末技にあらずして、高祖の契證の効果に出たるなり、三密に負はせるに藝術を以てするは漫りに三密を修し三密の効果に矜るものを防ぐ所以なり、何等契證するところなくして荐りに靈驗を説き、淨財を集むる如きことあらば實に國家の一大事なり、されどまた大藝術は三密の効果を最も有力に保證するものなり、高祖の如き偉人も若し藝術の保證を無くせんか、役行者已下の師も同列にさるゝに至りたらん、復た予が説教等を以て藝術としたるにかゝりて、師は曰く眞言宗ばかりでなく各宗にも説教をするにあらずや、而らば藝術は眞言宗に限らず、師も頗る困難なる説をせらるゝものかな土にも濕氣あり、木にも濕氣あり、人にも濕氣あり、故に人も木も土も一様なりと云ふべきか、吾が徒は藝術を以て直ちに説教のみに限りたることなし、説教の一技あるが爲に各宗にも藝術

宗といふべしは、少しく詭辯に陥ちずやと虞るゝなり、況んや眞言宗已外に藝術なしと言はざるをや、見よ現に眞言宗には何等の藝術なく、藝術の名にすら驚けるに天下の大勢は殆んそ何人や人の罵りたる如く藝術狂にまで近からんことをするにあらずや。

已上は藝術に關して師の意に順じ、且つ吾が徒の當面の言音に順じて述ぶる所ありき、されど實は前に提供したる種々の疑問が解決せられざる限り、吾人の言論は盡きざるべし、因みに後日子が所信を發表するべきの係として、先づ以て前に現時吾人の藝術觀を表白し置かんことを曰く

藝術とは何ぞ、三密の効果其れを藝術と云ふ。故に上は如來の三密より出たる三無盡莊嚴より菩薩聖衆の自業的事業及び悉ての藝術斯れ等を稱して藝術と言はんことをするなり、則ち事業の根本に約して此れを三密と言ひ、其の三密の自業的效果それを藝術と言はんことをするなり、思ふに再び師を煩はして大日の大罪人等の苦諫を賜ふことを敢てするならん、されど吾が徒には聊か所信を披瀝するに眼めんか、終りに臨み、師よ、吾が徒は教理の幽玄なる然しながら略々形成を成せる者に就いて多く言論を爲さんとするものにあらずして、實行の標的に向つて一步にても踏み入れんことを躁急のものなれば、理幽玄ならず主張頗る平板なる嫌ひあり、而も此れ我が徒の本領なることを記せられよ、茲に師の厚き願念を謝し併せて師の健康を祈る。

獻花に就きて

(東條松山師に質す)

龍華學人

東條道兄足下

予は未だ道兄に見ゆるの光榮を得ず、されど予は六大に於て、有聲に於て、道兄が苦心の後に成りたる論文に接し、少からざる啓發を得たるを悦ぶ、然も今予は道兄のものにされたる獻花(有聲第六號所載)の一章を讀で、予の記憶に違ふものあるを覺ふ、乞ふ左に開が一二を指摘せん。

一道兄曰く補瑟微迦法には黄なる花に、されど補瑟微迦法品第十四に曰く(上略)於其地上遍散雜色花(中略)或用粳米、或用糞伽汗薩花、或用蓮花、或用揭唎尼上迦花云云云、尙補闕少法第十五の條下をも参照されん事を望む。

二、道兄曰く阿毘遮略迦法には、紫黒、赤き花に、されど阿毘遮略迦品第十五に曰く(上略)獻以赤色香之花、或獻臭花、或青色者、或獻諸穀麥豆之糠云云云。

三、道兄曰く經華は造花の意か、されど吉祥天俱次第記に曰く六度供養者、闍伽、塗香、彫花、燒香、飲食、燈明也、轉法輪法に曰く問怨家之形、不及綵色文、此定儀獻、寶藏天女法に曰く壇上有五色綵(各二尺一寸)以爲座云云云。

四、道兄曰く鉢頭摩花は赤蓮花なり、されど白衣觀音法に曰く(上略)成鉢曇摩花(白蓮花)、變成白衣

觀自在菩薩云云云、金剛智三薩の毘沙門儀軌に曰く鉢頭摩華書蓮花に、アイテル氏の梵漢字彙に曰く The waterlily, lotus, nymphae, and specially the rose coloured species (no-lumbium speciosum), p. III の尙次表を参照されん事を望む。

鉢頭摩花	赤蓮花	鉢頭摩華	青蓮花
蓮花	白蓮花	蓮華	黃蓮花
蓮華	白蓮花	蓮華	赤蓮花
蓮華	白蓮花	蓮華	赤蓮花
蓮華	白蓮花	蓮華	赤蓮花
蓮華	白蓮花	蓮華	赤蓮花
蓮華	白蓮花	蓮華	赤蓮花
蓮華	白蓮花	蓮華	赤蓮花
蓮華	白蓮花	蓮華	赤蓮花
蓮華	白蓮花	蓮華	赤蓮花

机邊藏書に乏しく、如上只予が茫乎たる記憶に依りしものにて、想ふに兄を煩すに足らざらん、予が崇敬せる覺彦和尚の如きは、ハンドマ (Padma) を單に蓮花に譯され居り候(一切如來心祕密全身舍利寶篋印陀羅尼慈氏菩薩根本真言等参照を望む)事相の研究、密言の翻譯、中々に困難なり、輕辛不眞面目ならんか、其罪深し佛光の下、道兄自重、自愛せよ。

行者邊には深く誠めたり、幸ひ近所には照遍大和上なる大學の阿遮梨も居ませば深く鍛練を受けらるゝが善からん。

第十檢討章

足下に梵字を書き與へ、宗祖大師を蒿麥屋へお連れ申す杯、斯かるこゝを眞腦底より信じて爲し、若しくは云はるゝならばまだく、戲論三昧の人にて彼の姉崎氏の藝術說近角氏の信仰說を辿る皮相論者、或ひは目する人なし、こゝも保し難し、是れ予の進んで修養園に猶ほ向上の一段を深く希望する所以なり。

龍華山人に答ふ

(獻花に就て)

龍華山人足下、僕頃日雜務に妨げられ貴問に應ふるこゝを怠りたるを慙む、今少閑を得たれば冀くば僕をして所思を述べしめよ、僕不幸にして足下が如何なる人なるかを知らず、されど足下の謂はるゝ、こゝろに依りて僕の未知見の道友なるを知り、一たび相見て親しく清談を恣にせん、こゝを思ふなり。龍華山人足下、僕が、の獻花の一文を草するに至りたるは、僕の研究の工風、謂はんも烏澁の沙汰なれど、從來の宗部研究方法が逐文逐章の講讀なるに、是れと相并べて近世風の研究の最も興味あるを、惟ひ眞言宗の新研究を看出さん、こゝ僕の至願なれば、かの獻花一篇は其の希望の犠牲として、假りに一の摸型、こゝもなれど作り試みたるなれば、實を言へば花獻するこゝを主として論じたり、言はんよりは僕が眞言宗を研究するに就いての態度を發表したるにてありき、今思へば慙かる大膽なる下心

ありての文章として、餘りにブアーなるに駭けり、それが爲に僕の主意の存するこゝろは世に認められずして、却つて足下の間に遭へるは汗顔の至りなり。

山人足下、僕は眞言宗研究の態度に就いては重て世に咨るの機會あるべし、今は先づ足下の間に答へざる可らず、足下も知らるゝ、如く何事につけても經軌の上には多岐に亘りて一途に定め難き個處に出遭ふ、こゝ屢次たり、夫れが爲に僕が獻花を草するや、『大日經疏』、『蘇悉經』、『聖德經』などを緯し、諸尊の儀軌等を経し、何れも決し難きは經說に従ひ、儀軌等に顯れたるものは數個の本據を看出し、能はざるものは且らく省きたり、而して多くの學者が最も得意とする博引傍證の如きは止を得ざるもの、外は努めて爲さゞりき、是れ一は讀者を煩はさん、を恐れてなり、然るに僕の意ありての用意は偶々足下の疑を招けり、今少しく、足下の言はるゝ處に就いて語らむか。

一、僕が四種の法に配して、補瑟微迦法には黄なる花、言へるに對し、足下は補瑟微迦品の地上遍散色花、言へる文を引かれたるも之れに對して足下の高見を附せられざるために少しく貴意の在るこゝろを知るに苦しむ、足下は僕が黄なる花、のみして他の色を上げざるために、補瑟微迦法には黄なる花の外に雜色花のある事を示さん、の意なるか、若し果して然るならば、僕の獻花にも疾くに其の用意あり、前の配當は一往の事にして、若し委しく言へば四種法に通じて雜色華を奉るのみならず、或は梗米、蕎麥を燒きて華に代へまつるこゝは、獻花の下十七頁の下段六行目より、其の頁の終に至るまでに之れを述べをけり、足下補瑟微迦のみに就いて雜色花の文を上げらるゝも、それにては足らざる

二、僕も『蘇悉地羯羅經』供養花品第七に於いて、阿毘遮略迦法には紫、黒、赤き花の外に青蓮花の花を用ゆることを見たり、然るに特に青色こそせずして青蓮花のみありたれば青蓮花に限りたるものなるか、或は青色の悉てか阿毘遮略迦法に用ひらるゝものか決し難かりしために、且らく之れを除きたるなり。

三、僕が多聞天別行儀軌の春夏には雜華を採り、秋冬には綵花を散ぜよ三言ふ綵花の意を汲みかねて綵華三は造花の意か三して疑を存したるに對し、足下は吉祥天俱次第記の六度供養者闍伽塗香、彩花燒香、飯食、燈明三言へる文を引き、又た轉法輪法の不及彩色の文を引き、又た寶藏天女法の壇上有五色綵の文を引いて、さて之れに對しても同様に足下自身の意見を附せざるために、足下三僕三の意見に於いて如何なる相違點あるやを知らず、從つて何三應三ふべきかをも迷ふなり、若し僕が綵花三言ふ文字を上げたるに對し、足下が彩花、綵色、綵の字面あることのみ井べられたり三すれば、足下の言は餘りに無意味なるべく、若し彩三綵三の字面が異なることを示さるゝにしても、夫れが爲に僕が綵華を造花か三疑ふたるに對して、足下は積極的に何等の意見をも示されたり三も思はず、綵華の綵はいろ三の意なること、彩のいろ三さる三と同じく、五色の色を以て綵りたる花の意なれば、造花か三疑ふに奇怪はあらず三ぞ思はる、春秋の花なき三き綵華を獻ぜよ三言へるを造花か三推するは寧ろ適當なるか三思はる、増蓮の護摩次第抄には明かに冬寒くして花なき三き造花を奉るべき由見えたり。

四、鉢頭摩花を赤蓮花三したるに就て、足下は直ちに反對の文證を挙げられたり、而して足下は例の如く足下の意見を明言せざる爲めに、僕が鉢頭摩を以て赤蓮花三爲すを誤り三せらるゝか、或は鉢頭摩に赤蓮なることは共許して、僕が鉢頭摩に就いて青白の義あるを上げざりし爲に、足下を煩はしたるか、判断に苦しむなり、それは兎も角も三して僕をして思ふ三ころを語らんか、鉢頭摩に就ては種々の説あるが、今好き機三思へば少しく委しうせん。

- 一、慧苑の音義に波頭摩正しくは鉢特忙にして、此には赤蓮と曰ふ。
- 二、法華玄證には鉢頭摩は赤蓮花に當る。
- 三、玄應の經音義には鉢頭摩此に赤蓮花と云ふ。
- 四、翻譯名義集第三に鉢特摩此に紅蓮華と云ふ。
- 五、正理論には鉢特摩紅蓮と云ひ、摩訶鉢特摩大紅蓮と云ふ。
- 六、長阿含第十八卷に鉢頭摩池とあるを赤蓮花池と譯したりと見ゆ。
- 七、華嚴疏鈔十六には鉢頭摩佛を譯して赤蓮花身心と云ふ。

顯家諸大乘には悉て鉢頭摩を赤蓮と翻じ、他の翻名を用ひたること極めて稀なり、而して此等の諸所には悉く優鉢羅を以て青蓮花と譯せり、演奧鈔の説に依れば諸大乘家には、鉢頭摩を青蓮花と爲す説を見ず三(二十四卷六ノ表)而るに密家にては、

八、大日經疏の第七に鉢頭摩是れ紅蓮華なり。

此れ等の諸文既に明かなれば鉢頭摩を赤蓮花と譯するは最も普通の説なるが如し。されど實に足下の云ふ如く鉢頭摩を譯するに止まらず例せば

一、大日經疏十五卷には、鉢頭摩に二種あり一は赤色此の間の蓮花なり、二は白色此の間に有る白蓮なり。

とありて鉢頭摩は赤白二種に通ずと見えたり。

二、鉢頭摩を青蓮花とするに足下の引證せられたる外、菩提心義等にも鉢頭摩を青蓮花とし、狗物頭を赤蓮花とせり。

三、慧林音義に依れば鉢頭摩正しくは鉢納摩と言ひ此の間の紅蓮花の上なるもの、或は赤黄なる花なりともあり。

四、大疏抄には鉢頭摩は通じて四種の色に通ずる名なりとして一色に限らずと言ふ。

五、大日義釋の説に依れば一鉢頭摩、二優鉢羅、三狗物頭、四芬陀利の四種の花に各々赤白黄青の四色ありと云ふ。

愆くて其の説の紛糾せるに非常なるものなり、且つそれ他の優鉢羅狗物頭華に對して青黄の色を配しかたをも、釋ねゆかば日も亦た足らざるべし、而して夫等は僕が最初よりの企てにはあらざりき、されど此の外に尙ほ一つ見通すべからざるものあり。

六、鉢頭摩を單に蓮花と約することと是れなり。

足下は淨嚴和尚の言を引用して之れを證せられたるも、それは最も普通に用ひらるゝ譯語にして、常に三部を分つときも佛部を芬陀利と云ひ、金剛部を縛日羅と云ひ、蓮花部を波頭摩と言ふにても明かなり。

尙ほ近く例を上げしめよ、足下も知らるゝ如く高貴寺一派にては慈雲尊者の流に依りて光明眞言を讀むに、普通に異りて。

チーン、アホーギヤ、ベイロシヤノ、マカーゴダラ、マニ、ハドマ、ジバラ、ハラハリタヤ、ウン。

の如く聞ゆ、而してマニは摩尼にして寶珠、ハドマは蓮花、ジバラは光明の義にして同咒中の三の三形なりと言はるゝ時、鉢頭摩を單に蓮花とのみ譯せり、亮汰の如く尙ほ波頭摩を赤蓮花と譯する人もあれど、宥快師も光明眞言の頌文に、雨摩尼珠蓮華及微妙光明、普周遍十方三世と言へり、要之愆かる細密なることを探りゆかば殆んど際限なかるべし、たゞ最も手近かなる先例に隨ふて且らく僕の如く言ひ置くにこの初心に取りて、一層有益なるを覺ゆ、如上に例記したる處ですらも普通の讀者は讀むを欲せざる傾あれば如何に惜しと思はるゝ、材料をも割愛しつゝあるかを思へ、足下よ僕が博引傍證を事とせざるを深くな咎めそ、僕は足下がアイテルの『梵漢字彙』を引かれたるは何の意たるを知らず、されど僕は是れを見て足下が英語を解する人なるを知りて轉た敬畏を深うせり、山人足下密言の翻譯の困難なることは如上の如き實例を以ても明かなれば、こゝ容易ならざるべし、さりながら自體眞言宗の事相研究が振はずなりゆきたるは皆な足下が言ふ如く、事相は困難なり、輕々しくされば罪

足下は「覆面の小沙彌」云はる、足下決して意を爲し給ふなけれ、足下がよしや千枚の覆面に置れらるゝも夫れが爲に寸分足下の價値を貶さざるなり、見よ足下のものせる文字の一端は皆な足下の影ならずや、足下の氣風學識素行、其の他足下の風采も音聲も血の色も肉の色も、要するに足下自身が一々の文字となりて紙上に活躍せるにあらずや、足下は此れ等の一々の影像を如何にして覆面し得るや、僕は其の文字を見れば敢て其の人の姓名を問はずして其の何人たるかは掌を指すが如く明かなれば、予は常に足下及び他の如何なる匿名者をも直ちに其の實名をすら指摘し得るにあらずや、既に其の人を知り其の價値を知りて相當の敬意を拂ふ、随つて又た匿名に依りて如何に高價に賣りつけんことを、僕は買はず幸に足下が匿名たることを多し自ら意に介し給ふ勿れ、僕は今進んで足下に問ふにあらずしてたゞ左の事を語りて満足するなり。

一、足下僕に對して言へることをありたれば、僕は一往開陳するところありき、是れに對して足下を「長き旅行より歸りて」重ねて足下をして云云を煩はせり、然るに其の文末に「未完」なる文字ありたるために更に引き續き大々的高説に接し得ることを、僕は待てりき、思ふに一般の讀者の中にも此の如き如何なる名説あるかを期待せられたる人もありたらん、素より僕が前に言へるところに對して別に足下の言議あるあらば、あれだけにてはなか／＼事たらざるべく殊に其の意氣込みにては是非もに長き高説のなければならぬ理なれば早く其の次を承らんことを待ち侘びたることも情けなや、去日足下が僕の手許に越されたる端信に依れば、あれは未完であるも完結し心得よ、このことなり、さるにて

もこれにては餘りにあつけなし、僕呆然たらざるを得ず、云ふものは足下の高説を承ることを得ざるも遺憾ではなきにあらずも、かゝることをなれば何故に初めから完結せられざりしか、其の方をより多く遺憾に思ふなり、茲に於いて僕は恥しくも邪推して、足下は豫め未完なる文字を點して僕を欺き世を欺き而して足下自らを欺かんことをするの手段にてはあらざりしかと思ひ到つて疎然たりき、しかし之れは僕の邪推なり、足下にかゝる深意の存せざることを明かなり、さりながら斯かる邪推をもすれば能きるが如き痕跡のありたるは兎も角も遺憾なりき、足下は思ふに僕等と同様に文壇の新參なるべければ相誡めて後來このことをなきを期したく希ふなり。

二、夫れも彼の一文にて既に要領を盡し居るならば僕も敢て其の「未完」を云爲せざるべきも、要するに博覧なる足下が僕に對する新しき見地は第二次、第三次、第四次に到りて明かならざる可からず、而るに第一次のブツツリにて、あれを完結し、これは什麼心得て宜敷きや更らに分らず、されば何にか僕に應へをせよと迫らるゝやうなるも、さて答の致し方なきに苦しめり、若し足下にして僕に斯く答へよと答の致しやうを教へらるゝならば其の上にて一考を煩はさんも未だ遅きにあらずべし。

三、足下は僕の梵語の讀み方を誤れりといはる、然り足下が指示せらるゝのみならず僕は僕の讀みつゝある梵語が全て根本的に誤謬にあらずるかを疑へるものなり、此の點に就いて今少し委しく梵語の語根より音韻の法則より、而して現時のサンسكريットの法則より足下の高説を承るを得たらんには如何に益するところ廣大なるか喜びたるに、さばなくしてたゞ傍訓をたよりにしてステンシヨミ

ステンチヨ、ハンカチミハンケチの邪正を争ふ。こゝは僕の最も得意せざるこゝろなれば、それ等は足下の指示のまゝに従はんこゝろなり。足下以て不可なりとするか。

四梵語に就ては僕別に考へあるも夫れは自ら別問題なれば茲に述べ難きも、今梵語に就て傍訓や僕の記憶を辿つて以て論談するの勇氣なき由來を語らんか、僕先年高貴寺にあるこゝろ數月かの一派の人の朝暮に誦するこゝろの眞言陀羅尼が僕には少しも了解能きざりき、何を讀みつゝあるかを訊くに迫んで、之れはさて驚けり、先づ初めに光明眞言より諸眞言陀羅尼等凡そ僕等の日常讀みつゝあるこゝろのものゝみなるに、僕等他派に人となりしものゝ耳には全く新しく響くなり、素より慈雲和尚の發音が悉く正しいは和尚自らもせられざりしが如きも、要するに我れ等の讀みつゝある陀羅尼の發音には大に疑なきを得ざるなり、其の原因にも種々あるべけれき。

一、梵文の種々なるこゝろ高貴寺の伎人和尙の言はるゝに、曾て不動明王の眞言を書くこゝろ原書を調べたるに七八部？ある梵文が皆な相違し居たりと、此れがために眞言等の讀方に不同をなす。

二、連聲の如きは音韻の法則に就いて相承の別あるは止むこゝろを得ぬとす。

三、從つて漢字を當てるに就ても其の通りにて、例へば因業の訶字の如き、常には何人も之れをカミ讀めり、高祖も卍字義其の他には此の訶字と共に賀字を用ひられればカミ讀むは定なるも夫は且らく別として、而るにサンスクリット學者の説に依れば因業の訶字は英字のHに當り、從つて訶字はカ音にあらずして、ハ音となり、カ音はなしといふ、而して又た本來支那にても訶はカにあらずし

てハミ發音したるらし、曾て土宜長者にも此の意味のこゝろを承りたるこゝろあるやう覺ゆ、既に吾人日常爾なりと信するこゝろにもかゝる誤謬？あり。

又音の上から一々區別するも、今は煩はしけれき。

一、同行の音の混同あり、例ば瑜迦ヨガをユガ、二、鼻音の亂用あり、例は波頭摩ハドマをハンドマ、三、長音と短音を混する、例ば摩訶マカーをマカ庵オーンをオンと讀む如き、算ふれば際限なからん。

要するに梵語の發音に就ては支那と印度と日本との文字の根原に依りて出立し來らざる可からず、傍訓や聞きかじりに依りて發音の正邪を論ずる如き勇氣は僕は有たざるなり、而して僕不幸にして今研究の初歩にあり、ために足下の博識に御相手する能はざるを憾みとす。

今の安心研究説に就て

雙 棲 山 人

京都に教友會なるもの出生して祕密宗の安心問題を研究さるゝと聞く、頗る愉快のこゝろなり、而して其の二三の研究問題を見るに亦愉快なる問題である、唯其の題の愉快なるのみならず、其の會員のこれに對する説が出でしきは、定めて愉快なるこゝろ一層深からん、其問題が果して宗教的に解釋せらるゝや、將た哲學的に解釋せらるゝや、若しくは無遠慮にも科學的より解釋せらるゝや、吾人は深き趣味を以て諸公に聞かんを欲す、但し吾人は研究問題の斬新なるを以て然か云

ふにはあらず、題は頗ぶる陳腐なり、陳腐なれ共諸公の新知識よりこれが解釋を與へらるゝに到りて始めて此の陳腐なる問題が斬新なる高説となり實現せんことを想像すればなり、各番の諸公希くは速かに大獅子吼する所あれ。

次に吾人の注意を喚起せしものは『有聲』第九號に掲げられし松山公の説である、公は熱心なる藝術論家と見え、弘法大師の清涼成佛も直に藝術であるてふ卓見を立てらるゝ、新知識にして、藝術萬能藝術效驗の信仰は彼のトルストイ伯以上の宗教家らしい、并は公の勝手とし別問題とせんも、彼の『有聲』第九號に信仰、安心の研究は閑問題である、其の形體の造り様が研究の問題である、云はる、吾人は此の松山公の説に就ては聊か意見がある、公は此の形體の造り様は、自證の爲めに云はるゝや、將た化他の爲めか、公は高祖の影像を信仰の眞核とし、これに對して有り難き恩恵を感孚する底を以て安心の確定させらるゝに似たり、然らば自證の重位はこれにて盡くるやに見ゆ、否なこは自證の初入にして眞の決定位は猶ほ後心であり、云はるれば、公の云はる安心は未だ眞の安心にあらずして此の安心を自證するに猶ほ多種の研究も工夫も要すべしと思ふ、然らば安心問題研究の餘地は猶ほある可し、若し自證はこれにて足る故に此の高祖影像中核の安心さへ(無意識にても)決定せばそれにて自證はよし、故に信仰の形體を造くる云ふは、化他に約して立つることである、云はるゝか、然らば其の説を聞かん、故に吾人は未だ松山公の此の研究問題に於ける説は何れも判明することを得ず更に細論されん事を請ふ。

さり乍ら吾人は松山公の此の説が何れの點にありとも敢て其れには關せず、大體上より公に、今少しく宗教の信仰心を眞面目に工夫し、第一に我見を張るを抑へて佛の正見を聞かれんことを勸奨するものである、并は公は他の論者とは違ひ、幾分か實行修養に着手し居らるゝ、見る故である、果して然らば、事新しく高祖影像中核杯と云ふに及ばぬ、一座の行法を修しても直に解かることである、十八道の作法に就いて云はん、彼の前方便の所作事を済まして、正しく其の所宗の所に到れば、第一に入我々入觀がある、これが身密より本尊、高祖でも同の影像に對する安心信仰の形成である、何にも事新らしく淺慮なる我説を設くるに及ばぬ、此の入我々入の觀を徹底すれば直に自證の加持成佛である、而して亦信仰も安心も此の一刹那に圓滿するものである、假令ひ徹底せずして圓滿せざるも安心信仰の談としては他に殊に求むべきものでない、又語密より入る正念誦にても全く同様である、次に意密より入る字輪觀でも同様である、但し此の觀は別に本尊と我々に對象を設けぬも、前の身密、語密の二重の後邊にあるを思へば、自ら此の意密より入る觀も彼此涉入其儘の上であるとは知らるゝことである、而して此の觀を約すれば月輪でも、阿字でも、皆な同じである、これが吾人の有り難き安心である、又修行である、故に高祖は發心即到も、信修忽證も仰せられ、安心即修行にて、一位一切位(三密各立は舉勝爲論と見よ)の實地談はこゝである、然るにこれをこれ深く味ひ懇ろに求むること爲さずして凡夫智の推量を逞ふし、小利口めくは誠に好まぬことである、それ故吾人は此の修養修練は常に積まねばならぬ、唯其の積む上

に於て其の行人の境遇より修行の作法に廣中略の重々の別がありて、乃至一字廣運迄あれば決して今日の茶の會事相家や、宮内省の式部職がする如き面倒臭きことは爲さなくとも可い、可いけれ共吾人行者は常にこれを安心とし、修行するが本意ぢや、それこそ松山公の所謂研究問題でなく實行問題である、而して此の安心を行法修行の外に於ても常に心に留めて舉足下足喫茶喫飯を始め一切有爲の事相に移し修せば、實に有爲即無爲となり、向ふ所一々佛作佛行にして歴縁對境咸な佛教界の因縁なる、これが吾人の平生安心で又平生業成である、この外何物の贅疣をか求めて夢說醉論するや、松山公少しく反省ありて可なり、然りも雖も這は吾人の安心にして信修の境なるも、若し夫れ此の祕密乘教を一切の有情に施す對機得益の點に到ては機根の非一なる種々の方便を要するなり、此の點に關して吾人は教友會諸公等が此の陳腐の題を如何に新らしく如何に活かして説くかを謹聽せん、希ふのみ。

雙棲山人に與ふ

雙棲山人閣下、閣下の手に成れる、今の安心研究説に就いててふ一文は、僕の安心説に關して多く語られたり、されど山人の巧なる文法は説話の對手を教友會の諸子に索めたれば、諸子が主として山人に應接するこゝなるべく、僕はたゞ伴として言議の僕に逮びたる部分に關してのみ應ふるこゝを允さ

るゝならん。

山人閣下、曩きに僕が眞言宗の信仰、安心は事新らしく問題として研究すべき性質のものにあらずして、千年來確立したるものなれば今はそれを自覺せざる可らず、而して自覺したる信仰は則ち親しく高祖の影像を拜しまつることを謂へるに對し、閣下は「我見を張るもの」を戒め、「淺慮なり」を卑しめ、「凡夫智の推量にして小利口めく」を貶し、「夢說醉論」を罵られたれば、其の惡聲に依りて、聊か閣下の逆鱗を宥め得られたるならんか、實に思へば僕の言ふこゝろ頗る大膽なれば、佛天に誓うて咀はれざりしは望外の僥倖なり、難有く思ふなり、されど僕が斯の説を爲すに至りたるにも所由あり、今は且らく閣下の問はるゝまゝに答へみんか。

山人閣下、僕は高祖の影像を親り見奉るこゝを信仰の眞核として、之れこそ我教徒の信仰なれ、信するものから、際涯なき研究、寧ろ世話に云ふ理屈詰に憊焉たる僕は、我教徒に此の信念の自覺を促したるなり、此の信念は僕が信するまゝのものにして、之れが高きか卑きか深きか淺きかそれは初めより知らざるなり、我が信するまゝのものにして、それが我に利あるならば自利も言はるべく、若しもそれが他人に利あるならば利他も言はるべく、もよし、僕は利も不利も他も淺も深もを分別して我に利ある故に慙く信ぜん、他人に利ある故に慙く主張せん、高き故に深き故に慙く論ぜん、なきの故意の作爲にはあらずりしなり、閣下は故意に作爲せる信仰安心なるものは、人を欺き己れを欺くものと思はれざるか、たゞ慙く信ぜざる可らざる故に慙く信するなれば、何の工風もする餘地はなきなり、之れを

譬ふれば春三月高野山に入りて櫻花の爛熳たるを見るこそ、得も謂はれぬ喜を感ずるならん、此の喜の情は學者が爲す如く研究討議の後に得たるものにあらず、技師の爲す如く設計工風の後に得たるものにもあらずして、櫻に對するこそ直下に感ずるこそこの情なり、我が信念は櫻花を見ての喜なごに譬へうべきものにはあらずるべきも、之れが直觀的にして討議や設計の後に來るべきものにあらずるここに於いて相肖たるなり。

山人閣下、僕が優秀なる信仰の形體を造らねばならぬと言へるに對し、閣下は又しても自證か化他かてふ不審を懷かれたるが之れは言ふまでもなく化他のためなり、何となれば我教徒の信仰は千年來確乎として動かざるどころのものなるにも拘はらず、往々にして他の問詰に遭ふて我家の安心を明確に答へ得ざるために、人は眞言宗に安心してふものなきか、嘲り且つ疑ひつゝあるは、閣下の明敏なる熱く之れを知らん、而も時代の新しき要求は高尚なる談義にあらずして、明白なる信仰の告白を迫りつゝあれば、其の要求に應ずるために、眞言宗の信仰の眞核たる、高祖我々俱にある信仰を、最も明白に最も力強く説き明かす事を工風せざる可らず、云へるなり、例せば眞宗にては念佛往生の安心信仰を最も平易に説き明かすに生死事大、無常迅速なきの形を取りたる如く、高祖我々俱にあるこそこの福音を傳ふるために、現世安穩か後生極樂か現世主義か活動主義か其の他の形を工風せねばならぬ、僕が安心問題に於いて研究を重ねざる可らず、謂へる點は實に茲にありたるなりき、眞言宗徒にして安心其のもの、信仰其のものが全く未決の問題なるこそを信する能はざるなり、唯だ我等には潑刺たる

る安心こそ信仰はありながら其を自覺せざるを悲しと思ふなり。

山人閣下、閣下が引かれたる十八道の例に依りて見るも閣下は僕の安心が絶對的に誤謬ならざるこそを承認したり、承認してさて後に「これが身密より本尊(高祖)でも同(の)影像に對する安心信仰の形成である、何にも事新しく淺慮なる我説を設くるに及ばぬ」と言ふ如き論法に對して、僕遺憾ながら之れに應接するの道を習はず、實に事新しくなければこそ怨る説をも爲し得るにあらずや、萬一も僕が事新しく論じたるならば夫れこそ宗意を亂す大罪人なれ、僕は僕が論じつゝある信仰は千年の昔より成立せるものなるこそを謂ひ他人が事新しく論ずるこそして非難するこそをこそ恐るゝにあらずや、若しも古よりあるこそを事新しく論ずるが不可なり、閣下が眞面目に僕に語らん、此の如きは實に陳腐極まるどころにあらずや、閣下が「此の入我々入の觀に徹底すれば直に自證の加持成佛である、而して亦た信仰も安心も此の一刹那に圓滿するこそである」と言ひ、又語密より入る正念誦にても全く同様である」と言ひ、次に意密より入る字輪觀でも同様である」と言ふ、こそを「深く味ひ懇ろに求むるこそを爲さずして、凡夫智の推量を逞ふし」と言ふこそが閣下の直接の經驗の後の言なるか、將た經軌に慙くある故に假りに夫れを我物に借りて論ぜらるゝかを穿索するは、頗る禮を失する恐ある故に今多く語るを欲せざるも、さりながら閣下の如き説は經軌をくり擴げて高き深き理想を譯もなく見せびらかして得意がる人の好むで説かん、此の如きところ、而して反之僕は現實の我、刻下の我が懐ける安心信仰を告白し、併せて同教徒の自覺を促したるなれば、閣下の立場を以て僕を律せ

んごするは、全くの門違ひにてあるなり、僕惟ふに安心信仰は眞言宗の唯一の問題にあらずして無数にある問題中の一個條に過ぎざるなり、若し眞言宗の教義の根蒂論ならば僕も亦た閣下の如き論を爲すに躊躇せざるなり、さりながら安心信仰は宗教的人事の問題にして兩者は其の立脚地を異にせり、僕常に閣下一類の論客ありて教義論と安心論とを混淆せるを悲しむ、教義論即安心論の如く解するに至りては、寧ろ其の愚を憐れまざるを得ざるなり、閣下も記憶せらるゝや、曾て『六大誌上』に南海山猿生なるものありて云爲したるを、彼が言へる中に如斯意味の言ありき、日本で眞言宗が行はれて居るのは大日如來や絶対法界なきに對する議論のためではない、全く高祖、高祖をさながらに信するからである、單に臆ろけなる記憶に依りて取意す、と言へり、當時之れを以て頗る僕の安心意見の大體を得たる論なるを喜びたりき、實に今の眞言宗の生ける信仰界は山猿の言ふ如く、高祖而も六尺に足る足らざる小國の沙門の姿容を爲したる高祖の姿が活躍して現に末徒を誨えもし、誠めもし、慰めもし、導きもしつゝ、ありて、閣下の今も僕等の學生時代にも欣んで討議したる、發心即到も信修忽證も信ぜられ安心即修行にて一位一切位の實地談(?)はこゝである、てふ深義は、終に現實の我を支配するに至らざる事は彼の山猿も俱に(勿論閣下は彼も別人なるも)許さるゝならんか、されど閣下も謂はるゝ如く、對機得益の點に到つては機根非一なる故に種々の方便を要する、ために閣下の今の説が閣下に有益なりとすれば敢て黑白を争ふ要なきかも知らず、たゞ僕には宗意安心とて閣下及び閣下一味の人が懐ける所謂安心論なるものに對しては僕一言なきを得ざるなり、何となれば僕は閣

下等が今懐ける安心説に就いて會つて思考を凝らし而して寧ろ危険なる安心論としたりしところなればなり、之れ頓て僕の安心論が如何なる根底にあるかをも示す一端ともならんと思ふ、閣下ばかりかは眞言宗の論客には常の事であるが、擧足下足喫飯を始め一切有爲の事相に移し修せば、實に有爲即無爲となり向ふ所一々佛作佛行にして、歴縁對境成な佛境界の因縁となる、これが吾人の平生安心で、又平生業成である、と云ふ、追がに閣下だけに、一切有爲の事相に移し修す、と言ふ、其の移し修すると言ふこと、や、佛境界の因縁となる、と言ふ中の因縁となる、と言ふ文字を挿みたるために、安心は研究問題にあらずして實行問題である、と言へるに相照應して技巧を盡したり、さりながら夫は單に閣下の敵者に對する豫防的論法にして眞言宗の教義論としては寧ろ遠慮に過ぎたる説なるべく、此の點に關して僕は世の普通の論者も俱に愠く訂正するとの迫かに眞言宗意に近きを知る、曰く「擧足下足喫茶喫飯を始め一切有爲の事相、一々佛作佛行にして、歴縁對境成な佛境界となる、これ吾人の平生安心で云々」となるべし、閣下も若し前に敵者ありて或る點より非難を受くること、この恐なきを豫想し得たらんには、必ず愠く訂正したるならん、と推せらるゝ否、な眞言宗の教義の根底に立ちて直截に論ぜん、とすれば爾からざるを得ざるなり、たゞ閣下の恰愼なる他の論客も趣を異にし辭を廻したるために頗る理論に實際的方面を加味したる痕は見受けらるゝも、夫れが爲に却つて閣下の論に矛盾を生じ、隨つて眞言宗の教義の根本精神も稍離るに至りたるは、自然的の過失にして閣下の明を以てするも、是ばかりは豫防し得ざりしなり、擧手動足の一々が佛作佛業にして、佛境界の因縁にあらず

寧ろ佛境界其のものなり、移して修するを問ふまでもなく、喫茶喫飯皆無爲なるべく密印なるべき由は閣下より反省を促さるゝまでもなく、僕が眞言宗の教義として常に深く信するところなりき、さりながら閣下も既に幾重にも防線を張らざるを得ざりし如く、閣下よりも大膽に眞言宗の教義を生地のまゝに振り廻さんか、其の結果は實に恐るべきものあり、閣下が好んで用ひんごする舉足下足一々佛作佛行なる安心觀(？)は、凡庸なる俗物をして一向らに高慢ならしめ無能を以て能しし不徳を以て徳とし、未得を以て得とし、畢には惡を以て善とし、正に邪を混じ、秩序なく法則なく實に混沌たるものたらしむる恐れあり、實に眞言宗が社會に求むることは別とし、宗旨夫れ自らも既に無秩序無頓着に陥りて、今は其の極に達し居れるにあらずや、自體日本の佛教が各宗派をもをしなべて今日統一を缺きたる所以は一に此の差別を兎角に嫌ひ、何事も平等々々平等にかまけたる結果ならざる可らず、莫遮今の僕等は實に罪深きもの、智淺きもの、徳汚れたるもの、能なきもの、福なきもの、我ながらに愛想の盡きたる我ならずや、されば已達ならざる我等は、如何に高遠なる教義に遇ひ多少の修養を積みたりとするも、閣下等が云ふ如く、我の舉手動足が佛作佛行として之れに平生安心せんか實に忌々しき曲事ならざるなきか、斯く罪惡に満ちたる我を擁して、未來の安穩も現世の安穩も期待せらるべきならず、僕は今の身の無智なる無能なる無藝なるに鑿きはてたり、我は慙かる殘骸を守りて、舉足下足佛作佛行なりと思ひ做させらるゝに忍びざるなり、さりながら未達の人にして既に未到無能々の弊習に慣れて、それを善いこみにすればこそ、宗教界には特に惡人多きなり、惡人をよいと

にすら爲すに至りたるなり、僕は閣下の如き覺論醒説を以て世を誤るこゝは最初より欲せざるころ、さりながら此論に關しては、閣下も言はんご欲するところ多かるべく、僕も聞き且つ語らんごするところ頗る多し、冀くは僕の不敬を以てして前後二回に最も大膽に僕の自説を兎も角も發表したる如く、閣下も他人の説に對し同情なき攻撃を専らごせずして、如何にも道理なりと思はしむるまでに閣下の信仰談を最も具體的に聞くを得ば、豈に僕一人の幸福のみならずや、僕等は近時教友會諸氏の安心談を聞くを得るの好機に接し居り、他方には閣下の如き有力なる文士を得て、俱に安心談を語るの光榮を有す、僕は實に欣喜に堪へざるなり、辭の調はざるごころ、希くは恕宥し給はんごこを。

東條隆哲上人に答ふ

雙 棲 山 人

東條君、予は君より信仰談を具體的に陳べよご云はるゝも、予の信仰談として、君の云はゆる、我が信するまゝの信仰談は、別に事新らしく云はずごも、曩に十八道の例によりて陳べしにて、明了瞭である、他に予の信仰談ご云ふ者はなし、君は直接經驗の言なるか、將た經驗に慙くある故に假りに夫れを我物に借りて論ぜらるゝか、云々ご翻弄せらるゝが、予は明らかに云ふ、此は固より經驗にはあるが、十八道加行の作法を始めしより予の直接經驗し及び現に經驗を積みつゝある實行

談である。加行開壇以來其の中間に懈怠の日はありしも、相續して現に日々修行修養しつゝある談である。予は君が殊更經驗談なりや抔皮肉に切り込まるゝことを訝かしく思ふ。何となれば君も、眞言行人として修養さるべき第一の要點は此にあらん。然らざれば君は眞言行人として加行入壇以來何を第一として修養し居らるゝや、單に經軌の文句を比較し、教説の蘭菊を採綴するを以て修養させらるゝならば、抑々眞言行人として修養の本末を顛倒し居らるゝものにて其は場合によりては修養の害となるともあらんと思ふ。但し君は徒らに斯かることに拘泥し居らるゝ人にはあらざるやに見ゆ。然らば君の意は眞言の教養は高し吾人の機根は卑くし、故に教養談は教養談として參考はするも、實行に就き自己の機に相應する、安心信仰てふものは、高祖の影像を見奉りて、それを信仰の眞核とするが、至極有り難き恩光に接觸する心地なり。是れが君の信仰の立場ならんか、果して然らば予も君もは信仰上の意見大いに違ふことである。その大師の影像を見奉る迄はよし、然るに對像以上に於て予も君の信仰は、信仰の位地が違ふ。君は自分を眞言宗結縁の機に鄙下し、予は正彼の阿闍梨と自信するのである。故に君は心外の高祖に涙を濺ぎ、予は前に十八道の例もて示せし如く内外一如凡聖不二の觀に於ける高祖に涙を濺ぐものである。獨り高祖而已でなく三世十方の諸佛菩薩等に對し奉りても全く同一である。是れ予が安心にして又信仰である。此に於ては予は六無畏も十地も該攝して一の不二心に置き他に何等の階漸は見ない、而して此の不二心を入我々入の觀等もて調練修養する際に於ける心上の薰

俱は云はゆる冷暖自知と云ふべきもので、予は十八道開壇の日より假令ひ中間に怠惰のこころあるも、今日に及んで幾分の進取は自信し居ることである。此の際は固より直覺の推理のこころ味は要らぬ、唯々純一無雜の信仰さへあれば、修するに従つて心自證心の光りは自然に接觸するこころである。予は之を東條師に勸進する。否な是れは大日如來の勸進である。東條師は何に故に眞言の兩部都法の阿闍梨であり乍ら、信仰を此の方針に立てざるや、何に故に大日如來所説の經軌を傳受し乍ら殊更に身を結縁機に下たし居らるゝや、予は頗る物足らぬ、否な痛惜に堪へざるこころである。然るも猶ほ予の安心は他の律すべきにあらずして、舍衛三億の徒に倣はんさせらるれば、亦詮すべきことではある。

蓋し予は惟へらく、東條師は教養論と安心論とを根本的に誤解し居らるゝにあらざるなきか、何となれば、安心信仰は宗教的の人事問題にして兩者其の立脚地を異にせり。予は師の言なり、此の「宗教的の人事」なる面白き語は解し悪くきも、推察するに宗教上の安心は人間範圍の問題にて、教養は人間以上佛境界の問題なりとの意味ならんか、是れ一應は聞ゆる如き論なるも、是れが全く根本的に誤解し居らるゝ點である。手近かき例に就いて云はんに、龍樹大士の菩提心論は古來より眞言行人の觀心門、即ち安心論とするは一定の通規じや。而して其の安心は三種の菩提心にして、即ち眞言行人が始終一貫して修養すべき範疇である。而かも其の三種が中に於いて特に至要とするは三摩地の菩提心である。而して此の心を行人に修養せしむる最捷徑は、彼の前に擧示せし十

八道の入我觀等の如き即ち是れである。而して此の行人は即ち所被の機にして、人を云へば、予も東條師もその人である。此の對象は(即ち人法一體の上につく)大日如來、高祖大師、又は阿字、何れにても能被の法體である。此の法體は機人、蓋相稱し人法一體なるが、我が三摩地談の極致である。予は是れを目的とし修行す、何を苦しんで自ら降だりて永く人法乖角し、機は終に法に相應し得ざる底の地に甘んじ得ることに満足し居り得らるゝや、固より宗祖の提撕の如く、無時暫廢云ふ行人には到らざるも、隨時の登壇修養は、時に其の不二觀の運ぶに連れ一種不可言の靈感に打たるゝ、こゝは必然あるものにて、此は經驗談である。自ら長者の子なるを忘れて、窮子に井在するは誠に惜しむべきことならずや、彼の教相學は覺の所在を知る爲め云ふ、此の覺は行人心内の覺である。然らば教相學は自心の覺の所在を開顯する鍵である。然るに此の學を教義談として自己の安心即ち機につく邊に全く立脚地を異にする杯云はるゝは、非常なる誤解である。但し此の鍵の使用には、彼の事相の修養を要し、此の修養の進取は、禪家の有る者が大悟十八、小悟數を知らず云ふ如き階漸も、一位中にて經る事である。東條師も此方針に於いて一層進取さるゝならば、覺へず嗚呼、快呼一番さるゝ、こゝは必らずあると思ふ、そは法螺でなし、踐上人の修して即ち知れの言を三復せられよ。

更にふり顧りて云はん、今まで陳べたる談は、本有、修生の邊にては修生に約して云ふことである。若し教相學に充て、云へば、高野の宥快師の奉ぜられ居る芳躅を辿る者である。此は下面の解釋

を爲すに必要ゆへ陳べて置く、故に本有に寄せて談するまきに、「一切有爲の事相に移し修する」云ひ又「佛境界の因縁」なる「予は云ふたのである。若し本有表徳の一點張りより云へば、予が前の辭は、迂遠である、淺略である。然るに斯く云ひしは、全く之が行人用心の點にて、宥快師が常に教相上にありて用心さるゝ、節目である。而して予の信じて迎ざる徑路も此處じや、何となれば本有一點張りは動もすれば惡平等の結果を來たす。今より數十年前のとはあるが、高野の或る學匠が、藝州で起信の立義分を講ずるに當たり、彼の三細六龜の名を駢らべ來りて、大浪小なみ、シャシヤラ、シャラシヤラ、ヤツサモツサミ打ち出でたり、藥罐頭を振り立て、見臺敲いて講談師めかせしを、有る大儒が見て、呆然としてあつた云ふことじや、此の人は既に本覺走しりに調子をくゝるわし魔の眷屬となりし學匠ならん、高野山その曉は遙かなり、なほも掲げん法の燈火云はるゝ、宥快師では逆も斯ゝる態度は出来るものでない、之が用心の入る所じや、稚子利刀の誠めも茲にある。古來學匠の魔道に落ちるも此の岐路よりじや、そこで予は「移し修す」云ふて、予は秘密の道場にて、凡夫の三業を如來の三密、冥會不二なり、觀照せし清淨の心を、道場を出ても、直に失せず世間有爲の事相を爲すに移し持てば、是れが即ち、即事而眞である。故に此の心を以て育兒の事業、貧民の救助、寺門の興隆、宗務の經營等を爲すまきは、直に佛作佛業である。是れを眞言宗の平生業成云ふ、若しも一念此に到らずして、我見、名聞、利己、排他、不正、詭曲、これ等の念を以て作すまきは前に駢らべし事業を爲したりして、何の即事而眞のこゝやはある、是れも矢張り予の安心じ

や、又宥快師の教ぢや、若し本有一點張りを誤れば、佛頭に放尿しても佛作佛業ぢや、經卷にて除糞やつても皆成密印じや、乃至五逆重罪も同一阿字云ふに到るよし、斯く迄到らぬも此の傾向の阪路を上下しつゝあるじや、今日多分の眞言行人も此の種の部屬の様に窺はれる、それ故、折角東條師が訂正し呉れしも、そは師に返上する、固より法の本源なる「無字」阿字の絶對的談より云へば訂正されしを誤謬は云はぬ、云はぬが危険である、故に教しては採用出来ぬ、彼の蘇東坡の「溪聲元是長庚舌、山色無非清淨身」の句に元は無非の四字を蛇足に批判せし如く、單刀直入的より云へば師の訂正も尤もである、されど其は意を得た上のことである、故に師が豫防的論法云ひ給ふは豫防の解釋次第で、予は然りて答ふるこゝである。

次に師は、予が一味の人が懐ける安心論云はるゝが、予は未だ安心論を一味の人と戰はせしこゝをなし、故に予の知人一味は知人云ふこゝならんが如何に安心論を懐抱し居らるゝかは知らぬ、一二の老宿に安心論を質し得る所ありしも、其は二十年前のこゝに屬し、爾後未だ會心の談は聽かぬ、又聽く必要もなし、故に師の想像は予の迷惑のみならず、知人も亦迷惑に感ぜられん。終りに一言し置くは此の安心談は、予の安心談である、故に化他方便につく談ではない、釋迦如來も四十餘年一字不説云はるゝ如く、化他は對機說法にて、客觀的說法である、故に予は此の說法の談相を廣く新知識者等より聞かん事を欲し、教友會諸師に問題解釋の揭示を促しつゝあるとである、殊に東條師の高議は「有聲」紙上に拜讀し、文の巧妙なるを俱に感服して居るものである。

改めて雙棲山人に申す。

雙棲山人閣下、再度の高教に依りて貴意の在るこゝろを悉知するこゝろを得併せて僕の意の多く誤解され居らざる事を見て實に喜に堪えざるなり、愆く事理の明白になりたる上は更らに煩はしく答の答に答ふる如き拙劣なる企を爲さざるべし、たゞ茲に重て閣下に一言せざる可らざるものあり、閣下は僕が高祖の影像を以て信仰の眞核とする事を如何にも不思議らしく言はれ、其處に閣下は僕に非常なる異見あるらしく言はるゝも、僕の考にては何等の相違點をも看出し能はざるなり、何となれば、僕は高祖の影像を信仰の眞核とするこゝろを主張するも、何もそれがために他の諸尊の影像を否定したると曾てなく、不動尊觀世音の影像も高祖の夫れと等しく、之れを觀すれば親り見奉るこゝろを得るものなり、こゝろは深く信するも、たゞそれ等諸影像の中に特に吾人に最も因縁の深き高祖を取りたるまでなり、故に若し閣下は僕に強ひて異見ありとすれば、閣下は信仰の對象を廣く曼荼羅の聖衆に取るこゝろ、僕は信仰の中樞を高祖に定めまつりたるまでなり、梅の實の核には肉あり、肉の後には花あり、花の咲きたる枝あり、枝を飾る葉あり、これを養ふこゝろの幹あり、根あり、樹の生へたる大地あり、周圍の光景あり、温寒の空氣あり、日月星宿あり、て萬象は森羅たり、梅の核を云ふこゝろ、他の現象界の存在を否定するもの、こゝろ速了するあらば、夫れは誤れり、其の人の罪にして僕は知らず、閣下にして此の中樞を定めるが不可なり、こゝろ言はるゝなれば、それは自ら別問題にして僕は何故に高祖が最も難有きか、其の

理は知らず、最初より自白するところなりき。若し閣下にして此れに對して強ひて明かなる答を求めん、欲すれば、先づ以て人は何故に食事を爲さざれば死するやうに造られたるか、何故日は西に傾き月東に上るやうに造られたるか、云ふ科學哲學宗教已上の疑問を解決したる後に來らざる可らざるなり。

山人閣下、上述の如き最も簡明なる問題に對し、僕は再三閣下の高手を煩はすことを欲せず、而るに此の問題に關連して御互に閑却せる、さりながら世間にては昨年來の宿題なる一大問題の横はれるあり、一大問題とは何ぞや、閣下、僕、多少見を異にするにもせよ、要するに俱に曼荼羅の諸尊の影像在ることを信するものなり、而して此等の影像が縁生無性にして鏡中の影像の如く、旋火輪の如く十喩の如くなるを知るなり、而るに此等の影像とは何物ぞ、如何にして生じたるか、是れ哲學者科學者の疑問なり、彼等は此の影像を解して或は迷信とし、或は空想妄想とし、或は虛構をすら怪しめるものあり、此等の鋒銜に對して閣下は如何なる態度を取らる、か、僕が閣下に教を請はんことを欲するは茲なり、或は閣下は信じて後知れ、例の如く空嘯かる、か、然らば僕も其の聲に習ふて世論を避けん、さりながら未だ到らざる僕は空嘯きつゝ、も實に心苦しき限りなり、僕は彼の解りきつたる問題を捉へて往復し、以て閣下を幾度も煩はさんことを恐る、故に茲に問題を新にして閣下の高教を得ば、豈に僕一人の僥倖のみならんや。

山人閣下、尙一事の述べたきものあり、閣下は本有、修生、に就いて宥快師の成立を上げられたる

が彼の點に就いては謂ん、欲するところ雲の如く簇り起れり、さりながら夫れ等の事は自ら枝末に亘る爲に後、日機會を得て意見を伺ふところあるべし、又宥快師が本有、修生、を相並べて、本有表徳ボコリに陥らざるやう、修生門の最も肝要なる事を勤められたる意味の在るところを、今少し深く考ふれば、尙ほ更ら以て僕が低き信仰を懐くこと、の理は直ちに了解さるべき筈なり、想ふも、それは別として、苟も閣下が對手として論を構へつゝ、あるものは、せめて宥快師成立の一義位は心得居るもの、取扱はれたきものなり、若しも吾人にして本有、修生、が如何なる關係あるものにして何を意味するかを、も知らざるものなり、せば、始めより閣下の對手たるに堪えざるなり、若しも恚かるものを對手させらるゝならば、決して閣下の名譽にはあらざるなり、僕敢て惡質にあらざるも、曾ては吾人等の藝術の主張に對し、幾度か非難を試みたる人ありたるも、對手が藝術論に對して餘りに幼稚にして、一瞥にすら價せざるために、終に何の應答をも爲さざりき、或人は是れを見て、莽りに一矢相酬ひよ、懣懣したる、僕、僕、は恚かる言論に對しては、答へざるを以て、最好の答辯なり、せりき、閣下も若し僕にして本有、修生、を辨ふるだけの用意すらし、見給ふならば、寧ろ答へられざる、この閣下に取りて、頗る適當なりしを想ふ、然るに閣下にして、それほ、この事は僕も心得居るもの、許されて尙ほ且つ劣りたる低き信仰を言ふ、所以に想到せられたらんには、其處に論議は一段の進歩を成したらん、惜しき事なりき。

山人閣下、要するに閣下、僕、の間には何の乖角するところなく、最初より意見の透徹せる者あり

而してだゞ何きはなしに理屈ありたるなり、随つて是れ等數度の應返は常規と異なりて論難を事としたるにあらず、各所見を陳述したるにて事は既に明白なり、此上に無用の言を費さんか六天子は直ちに水を入れて、此論は是れにて切上げ以來は雙方の論は掲げずと云ふ宣告に與る恐れあれば茲に閣下の甚深なる同情を陳謝し、併せて閣下の宏識に對して敬意を表するものなり、尙ほかの新しき問題の如きは直ちに閣下の勞を煩はさんにはあらざるなり。(完)

松山全集 完

松山東條隆哲師略傳

泉州大鳴山七寶瀧寺中興二世贈中僧正東條隆哲師ハ阿波徳島市ノ士族ナリ。明治六年十月出生。十二歳出家。明治十二年十五歳快忍阿闍梨ニ隨ヒテ傳法灌頂壇ニ入り。二十六年眞別處榮嚴和尚ニ隨ヒテ具足戒ヲ受ク。二十八年古義大學林全科得業。三十四年東京専門學校(今ノ早稻田大學)文科登第。三十六年高野山ニ登リ聯合大學林兼中學分覺(三箇年制度)舍監ノ職ニ就キ始メテ學徒教養ノ任ニ當ル。三十七年聯合大學林教授中學分覺教諭ニ任ゼラレ。對聯合議會大中學提出案ノ調査委員ヲ依囑セララル。此頃雜誌『有聲』ヲ發行ス。四十一年聯合高野中學教諭並ニ監督ニ任ゼラレ。大中學事務員ヲモ兼ネタリ。四十二、三年ニ涉リテ大學林ヲ専門學校令ニ依ラシメ中學ヲ五箇年制度ニ改善シテ文部省認定校タラシメ徴兵猶豫ノ特典ヲモ得シメタリ。四十四年宗會議員ニ特選セ

ラレ。犬鳴山秀範和尚ノ依囑ニヨリテ七寶瀧寺住職トナル。

大正元年記念大法會臨時事務局參事ニ任ゼラレ宗務ニカヲ致ス。四年聯合高野山中
學校長兼大學々監ニ任ゼラレ愈學徒ノ教育ニ盡カセリ。五年特ニ制度調査會委員ニ任
ジ。別ニ宗部教科書編纂委員ニ舉ゲラル。七年再度聯合會議員ニ特選セラレ。八年學階
評議員トナル。十二年御遠忌設備計畫委員ニ任ゼラレ。十三年高野山大學評議員トナル。
師稟資高邁學真俗二諦ニ精通シ。豐饒ナル思想ヲ貫クニ熱烈ナル信念ヲ以テス。特ニ教
學ノ事ニ識見卓越シ。高野山大中學ノ爲ニ前後十又七年間粉骨碎身不屈不撓能ク現時
ノ昌盛ヲ致サシメタル師ノ功績之レヲ蔽フベカラズ。大正十三年春宿痾漸ク重シ。當時
偶々祖山大學昇格ノ議起リ師爲ニ金剛峰寺當局ト大阪浦江ニ會シ。平生ノ抱負ト深重
ノ籌策トヲ提示シ。一宗教學發展ノタメニ再度ノ奮起ヲ約セリ。然ルニ中夏ニ入りテ疾
益々重キヲ加ヘ。九月十二日午後五時奄然トシテ遷化セララル。壽五十二。

大正十四年九月五日印刷
大正十四年九月十日發行

不許
複製

編輯並發行
代表者 長谷部隆諦
京都府葛野郡梅ヶ畑村高雄山
神護寺

印刷所 京都市西洞院七條南入
内外出版株式會社印刷部
大阪府泉南郡大土村犬鳴山
發行所 七寶瀧寺

犬鳴山
七寶瀧寺藏版

227

511

114

終